

どこまでも真っ直ぐで
お人好しな酒場の白兔

花見崎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『豊穣の女主人』には一つ噂が存在した

噂欲求不満な好きの神々ですらこの噂を知るものは数少ない。

普段酒場との店員として表に出ることはない

これはどこまでもお人好しな白兔ヒューマンが紡ぐ酒場の物語

.....

この垢だと処女作にあたるのかな？

拙作ですが楽しんでもらえると幸いです

豊穰の女主人とベルの小説が無さすぎてついに自作にまで走ってしまつた…

誤字脱字アドバイス等くださると嬉しいです

目次

とある酒場主人の独り言	1
ファミリアクロニクル episode	
リユール	
EP1 エルフからの依頼	8
EP2 正義の眷属（アストレア・ファミリア）	18
ミリア	
EP3 作戦実行	25
EP4 後日談	86
怪物祭（モンスターファイリア）	
EP5 脈動	95
EP6 【ロキ・ファミリア】	
EP7 怪物祭（モンスターファイリア）	104
ア	
EP8 食人花	
EP9 女神アストレア	
剣姫神聖譚（ソード・オラトリア）	
EP10 白巫女（マイナデス）	157
EP11 英雄の形	170
EP12 壊れだした歯車	181
EP13 迷宮の楽園（アンダーリゾート）	188
幕間 小さな英雄	199

E P I S O D E 豊穰の女主人

320	E P . 2 2	シル・フローヴァ	309		
	E P . 2 1	酒場の白兔	309		
	E P . 2 0	魔法	295		
	E P 1 9 .	仮面の男	283		
	E P 1 8	ベル・クラネル	270		
	E P . 1 7	パーティ	256		
	E P 1 6	豊饒の女主人	247		
	幕間	ギルド職員の憂鬱	240		
226	E P 1 5	英雄が為に鐘は鳴る	226		
	E P 1 4	襲撃	212		
					抜けるような蒼穹の下で
					331
					咎人
					341
					兔
					351
					ニョルズ様
					364
					ここは豊穰の酒場
					379
					日常編
					幕間 阻害要素
					403
					E P . 2 3
					ドツペルゲンガー
					411
					E P . 2 4
					騒動
					424

とある酒場主人の独り言

「『豊穰の女主人？』止めとけ、止めとけ、あんな酒場に行くのは。」

「確かに酒も料理も美味え、店員も別嬪揃いで文句のつけようがねえ。

だが、値段は高えし・・・悪酔いして、いちやもんなんてつけてみる。
たちまち店の外に殴り飛ばされて、治療院の世話になるだろうぜ。」

「・・・ん？誰に殴り飛ばされるか、つて？決まってるだろ・・・」

「店で働いてる女どもさ！」

「だが、まあ……もしお前さんが頼る当てもなく、困り果てた時、エールを煽って泣き喚くのもいいかもしれねえ。」

「あそこにはいるんだよ。困って助けを求める奴はほっとけねえお人好しなヒューマンがな……」

「『正義の眷属』でもねえ。どこの眷属子なのかも分からねえ。分かっているのは種族ヒューマンってことだけ。ギルドさえその概要どころか存在自体認知してねえんだ。噂好きの神々ですら詳細は知らねえ。」

「何か厄介事があるなら、行ってみな。助けてくれるかもしれないぜ？」

「まあ何だ、しがねえ店主の独り言だ、忘れちまってくれ。」

「あ、危なかったのにや。」

「だから言ったじゃないですか。今度からはきちんと無理なく持つてきてくださいよ！あ、ルノアさん！こちらは終わったのでミアお母さんの所へお願いします！」

「はいよー。」

「クロエさん！それはまだ持つてかないで！」

「ほらあんた達！もうすぐ時間だから急ぎな！」

「はーい。」

ここは『豊穡の女主人』。オラリオでも有数である酒場の名店

冒険者の集うこの街で、オラリオ今日も『豊穡の女主人』の扉は開かれる

「すみません、クラネルさん。」

その扉が1人のエルフによって開かれる

「すみませんリユーさん。来て下さるのは嬉しいのですが、まだ開店前なのでもう少し待っていただけると・・・」

「いえ、今日は客としてでは無くクラネルさんに頼みたいことがあります・・・」

「なんかりューさん達僕のこと便利屋か何かと勘違いしてません？」

「そ、そんなことはない…はずです。」

明らさまに目線を合わそうとしない

「それりューさん達が1番言っちゃいけませんよね!？」

「喋ってる暇があつたらこつちを手伝いな！」

ミアの怒号により、2人は肩をすくめる

「……仕方ありません。今日はお昼のうちに終われるので、本当に必要というのならお越しく下さい。」

それだけ伝えると、彼は再び皿洗いを続行する

「やはり貴方は――」

これは正義でもなんでもない

単なるどこまでも真つ直ぐなお人好しの酒場の店員ヒュイマシが紡ぐ物語

ファミリアクロニクル episodeリユ

E P 1 エルフからの依頼

「^{グランド・カジノ}最大賭博場・・・ですか。」

あの後、昼休憩に入る際にミアお母さんに一言ことわってリユさんを2階に招き入れ、備え付けのテーブルに座って貰って朝の要件を聞くことにしたんだけど

「はい。昨日私達の所^{ホーム}にヒューイ夫妻が相談しに来ました。

何でも酒場での夜遊びに負けた結果娘を取られてしまったそうです。」

「なるほど。それで【アストレア・ファミリア】に・・・」

なあ。

あの【正義の眷属】が動き出すくらいだからほぼ間違いないと裏があるんだろう

「それで？その娘さんの居場所が最大賭博場と。」

「はい。別件で私達は既に最大賭博場への潜入自体は問題無いのですが・・・」

ここでリユーさんは言葉を濁す

ここまでで大まかな流れは理解出来た。ただ、腑に落ちない点も幾つかある

何より1番の疑問は何故僕を頼る必要があるのか

ただ彼女を奪還するだけなら【アストレア・ファミリア】だけでも問題は無い

「リユーさん、一つだけ質問いいですか？」

「何でしょう？」

「事情は分かりました。僕からでもできる限りの手も尽くします。ただ、僕である必要が分からなくて。具体的に何をすればいいんでしょうか？」

「今、私達に一番必要なのは【絶対的切り札^{ジョーカ}】です。そのためにクラネルさん、貴方の手をお借りしたいのです。」

「ええええええ?!?!? いやいやいやそんな僕ギャンブルなんてした事ありませんし!!! 無理ですつてばー!」

「シルから聞きました。クラネルさんの運は神がかつてると。その運をお借りしたいのです。何より……」

リユーさんが一呼吸おいて目を伏せる

「顔が割れてない方が動きやすい。」

「……分かりました。僕としても彼らを見過ごす訳にもいきません。僕なんかどこまで力になれるかは分かりませんが、尽力させていただきます。」

「ありがとうございます！」

途端、リユーさんの顔が笑顔になる

ああ、僕は誰かの笑顔の為だけに動けるんだなって

「それと最後に一つだけ…」

「何ですか？」

「出来ればで良いのですが、もう一人だけ見繕っていただきたいのです。」

「それなら大丈夫です。僕としても強力パートナーとして頼もうとしていた方がいるんです。後それと少しだけ…」

リューさんにここで待ってもらい、自分に割り振られた部屋に入って麻袋を掴んで戻ってくる

「これを。足しにしなければならないと思いますが軍資金として。」

リューさんの前に置くと受けれないとばかりに首を振り

「い、いえ！さすがに受け取れません！依頼したのも私からですし。」

「何度も言っていますが、報酬は全てが終わってからで構いませんし。何より、一番は他言無用さえ守ってくれば多くは望みません。それに軍資金は多くて困ることなんてありません。」

「分かりました。貴方の頑固さは知っていますし、有難く貰っておきます。それでは3日後、最終確認に尋ねさせていただきますね。」

そう言って、階段を駆け下りていった

「さて、僕の方も準備しないとな。」

.....

「ニャー？少年カジノに行くのかニャ？」

「は、はい。頼まれてしまって・・・」

リユーさんに帰ってもらった後、ミアお母さんの賄いを食べてる間のシルさん達に尋ねられることとなった

「全く・・・ベルだったらとんだお人好しっていうか・・・」

「私はベルさんのそういう所、好きですよ？」

「ははは・・・面目ありません。」

「つたく、受けてしまったもんは仕方ないね。やるんだつたらきちんと最後までやって

くるんだよ！そしてしつかり稼いできな！」

ミアお母さんからの許可も降りた。後はシルさんに頼めるかなんだけど・

「そのついでで頼みたいんですが。シルさんも連れて行つて良いですか？リユーさんから2人欲しいと頼まれてまして、僕としてもシルさんの力をお借りしたくて。」

「受けちまったもんは仕方ないからね。シルが良いって言うんなら許可するよ。」

「ぜひ行かせてください！リユー達にはいつもお世話になってますし。私、大賭博場カダジノに一度行つてみたかったんだあ。」

「もちろんその分きちんと働いてもらおうからね！」

「ありがとうございます！」

「ほらほら、話は着いたんだ。さっさと準備するんだよ！お客と時間は待つてはくれな
いよー！」

EP2 正義の眷属（アストレア・ファミリア）

「おはようございますシルさん。」

最大賭博場グラン・カジノに潜入する当日の朝、僕はシルさんに連れられて正装に着替えるため
行きつけの店だと言っていた呉服屋を訪れている

「いよいよ今日ですね。頑張りましたよ♪」

「それにしてもよく招聘状なんて用意出来ましたね。」

「無理かなって思ってたけど知り合いの人に頼んで譲ってもらったんです。」

「酒場の表には出ないんで分からないんですがシルさんって人脈広いですね。」

今までも彼女が知己を頼ってる事はあったけど、直接あったことはなかった

「はい。皆さん優しい方達でよくお世話になってるんです。」

「いずれにしても、感謝しなくちゃいけませんね。」

「はい。ここまで着飾る機会も貰えましたし。」

僕達は賭博場カジノに招聘状を戴いたマクシミリアン夫妻として訪れる算段だと伝えられた

賭博場カジノには冒険者や高貴な人達が集まつてるから正装に身を包む必要がある

「ふふつ、ベルさんとてもお似合いですよ。本物の紳士みたいです。」

「シルさんこそ凄く似合ってます！」

「ふふふ、こうして見ると本当の夫婦みたいですな。」

「な、なな何言ってるんですかシルさん!？」

「ふふっ、これから私達は夫婦として潜入するんですからこれくらいに慣れないとダメですよー？」

「は、はい。と、とにかく！リユースン達が待ってますので行きましょう！」

僕達は「アストレア・ファミリア」が本拠^{ホーム}、『星屑の庭』へと足を運んでいく

．．．

【アストレア・ファミリア】

正義と秩序を司る女神アストレアを主神とし、15名の第一、第二級冒険者が構成員であり、全員が女性のファミリアである

探索系ファミリアではあるものの、憲兵的な役割も担っている

活動範囲はオラリオ内外に問わず、彼女達を慕う者も多く。2大派閥に次いで名は広く通っている

5年前、イツイルス閹派閥を壊滅させたとしてその名を一躍轟かせたものの、本人達は余り良い顔をして話そうとはしない

オラリオ史上最悪の7日間とまで予想された『大抗争』から2年

『空白の2年』からの突然の幕切れ

神々の間でも様々な噂が流れてはいたものの、今ではそれもなくっている

そんな彼女達の本拠^{ホーム}である『星屑の庭』はオラリオの一角に位置している

「リオンが男を連れてきてるわ！これは事件よ大事件！」

「アリーゼ落ち着いてください。先日説明したはずですよ。今回協力して下さいるマクシミリアン夫妻です。」

「【アストレア・ファミリア】のお噂はよく耳にしております。私はアリユード・マクリミアと申します。こちらは妻で。」

「シレーネです。」

「いえ、こちらこそわざわざご協力いただき感謝します。改めて名乗らせていただきます。【アストレア・ファミリア】リユール・リオンと申します。そして彼女が……」

「【アストレア・ファミリア】団長、アリーゼ・ローヴェルです。今回は私とリユールの2人で護衛させていただきます。」

「今回の作戦は聞いております。それでは参りましょう戦場^{グラン・カシノ}へ。」

E P. 3 作戦実行

今から僕たちが向かう先は、『エルドラド・リゾート』

オラリオ南部、繁華街にある大賭博場カジノの中でも娛樂都市サントリオ・ベガの最大賭博場である『エルドラド・リゾート』

そこに向かうため、僕たち4人は馬車に乗っている

「とりあえず今のうちに今回の作戦について確認しておきます。今回、潜入するのはオラリオに幾つかある中でも最大賭博場グラン・カジノに当たる『エルドラド・リゾート』です。そこに買われたそうです。」

「手口から考えても経営者のテリー・セルバンティスが糸を引いてることは間違いないでしょうね。まったくあのドワーフも懲りないものねー。」

リユーさんの言葉にアリーゼさんが続き、うんざりした顔で告げられる

「お2人ってそのテリーさんとお知り合いなんですか？」

「知り合いも何も【アストレア・ファミリア】は彼を1度捕まえてるのよ。ただ、その時は彼の嘆願に免じて許しちやつたのよねえ。」

「なので今回は【アストレア・ファミリア】とは別の協力者が欲しかったのです。ご協力感謝します。」

リユーさんが座りながらも感謝を述べてくる

毎度の事ながら律儀な人だと思う

「いえいえつ、確かにシルさんから頼まれた時は驚きましたけど。僕もあの両親や娘さんも助けたいと思いましたが！」

「コホン。とりあえず話を戻しますが、アンナさんを取り戻すには経営者オーナーがいる貴賓室VIPルームに招かれる必要があります。そのためにも目立つ必要があります。羽振りがいい所を見せつけ、上客になると分かれば、いづれあちらから接触をしてくるでしょう。」

「そのためにも多く勝って元金を増やす必要があるわ。」

「テリーに顔が割れてしまっている私達では警戒されてしまう恐れがある。そこで貴女方の手を借りたいのです。」

「大丈夫ですよ。ベルさんの運は酒場でも評判ですもん。ね？」

し、シルさん!?!?そんなプレッシャーいきなり!?

.....

最終確認を終え、怪しまれない程度に話し始めた頃、馬車が動きを止める

「いよいよ着いたようですね。」

「それではまず私から降りますので次にクラネルさんから降りてください。」

今回リューさん達は僕達のボディガード役になってる

扉に一番近いリューさんがまず降りて続く形で僕が降りてシルさんを降ろして最後にアリーゼさんとなってる

「あ、シルさん。足下気をつけて。」

「ありがとうございます。」

この先、僕達はマクシミリアン夫妻としてなりきらなきやいけない

いつ誰が見てるか分からない上に本物のマクシミリアン夫妻は初めて呼ばれたらしくて、嫌でも視線をあつめちゃう

下手な真似だけは避ける必要があるんだ

「それでは向かいましょう。」

シルさんの手を取り『エルドラド・リゾート』の入口までエスコートする

「書状をお見せ頂けますか？」

「はい、こちらで大丈夫ですか？」

中へ入ると給仕と思われる人から書状の確認を求められたので招聘状を取り出して渡す

「ようこそおいでくださいました、マクシミリアン様。素敵な夜をお過ごしください。」

表面上で繕っていても、彼の疑いの目は拭えていなかった

後々詮索されると動きにくいんだけどね

「彼女達に何かご不満な点でもございますか？」

「い、いえ、少々知己に似ておられたもので。失礼しました。改めて素敵な夜をお過ごしください。」

「とりあえず最初の関門は突破したかな？」

「はい。ですが、一番の問題はここからです。」

「そうね、まずは元手を増やす必要があるわ。招かれる為にも賭札チップは多いに越したこと

はないわ。」

「ルーレットなんていかがですか？ 賭札チップをテーブルに置くだけなので簡単ですよ？」

「そうですね。ルーレットなら問題は無いでしょう。」

ルーレットの台にはルーレットの他に赤と黒の数字が記されてる

シルさんの説明通りならこの色や数字で賭けるのかな？

「このシートにお金を置けばいいんですか？」

「賭ける方法によって配当は異なります。赤か黒か、色に賭けたなら2倍、数字単体なら最大36倍です。」

「さ、36倍……！じゃ、じゃあ、これで……」

流石に最初から飛ばすのは不味いし……

地道でもいいのでまずは元金を増やしていこう

アーニヤ達とはトランプ位しかやったことないからルーレットには自信は余りないし……

トランプでもアーニヤ達からは「ゲームにならないニヤ！」と言われて最近相

手してくれないけど・

・
・
・

「ウソツ……高額賭札^{チップ}300枚、一点^{ストレート}、数字一つ賭け……配当36倍……です……」

結果から言うと僕の不安は杞憂で終わった

色賭けから少しづつ上げていったらまぐれにも当てまくってしまい遂にはここまで勝ち上がってしまった……

「きゃあ！すごい、貴方！」

リユーさん達は護衛を装いながらも気づかれない範疇で周囲を見渡してる
みたいだ

「貴方、私ポーカーをやってみたいです。」

「ポ、ポーカーでしたらあちらのテーブルにどうぞ。」

「(賭博場に有利な進行役との勝負では無いので問題は無いでしょう。ですが、シルが
ギャンブルですか・・・)」

・
・
・

「やったあ！また私の勝ちですね！」

多分神様を抜いて彼女と心理戦で勝てる人は居ないんじゃないかと思う

こちらの心の奥底を見透かされているかのような・・・

それこそ嘘を見抜く神と対峙しているかのようなそんな感じで・・・

「なんです！なんですすかな!?!」

「なんとという賭札チツプの山！見たところ一見さんのようですがなんとという幸運！」

「何でも白^{セイ}聖^イ石^{ロス}の山をたまたま掘り当て、そのため領地が潤つててこの大賭博^カ場^ジで遊んでるらしいですぞ。」

「いやはやなんと凄まじい豪運。是非とも分けて欲しいものですなあ。」

「なんでもアリユード伯爵はルーレットで大当たりしたとか。」

「夫妻で豪運持ちとは、実に羨ましい。」

な、なんか大分噂が飛躍しちやつてるような・・・

「・・・お客様。経営者のセルバンティスが、是非お会いしたいと。」

オーナーからの誘いつてことは、間違いなく貴賓室^{VIPルーム}への招待

落ち着こう、ここで取り乱したらバレちゃうかもしれない

「私のような若輩者に、経営者^{オーナー}自らそう言っ頂けるとは光栄です。」

「どうぞ、こちらへ。セルバンティスがお待ちしています。」

・・・

「おお、貴方がマクシミリアン殿ですか？」

茶色の髪に髭を随分と生やし、スーツを着込んだ一人のドワーフに話しかけられる

流れからして彼がテリーさんなんだと思う

「私はテリー・セルバンティス、この大賭博場の経営者を務めておる者です。今夜は遠路はるばるお越しくださつて誠にありがとうございます。」

「こちらこそ、招待して頂いて感謝しています。私はアリユード・マクシミリアン。ここ

らは妻のシレーネです。」

「夫ともども楽しませてもらっています、^{オーナー}経営者。」

「おお、マクシミリアン殿はとてもお美しい奥様をお連れになられているようだ・・・ふふ、羨ましい限りです。それに傍付きの方々も実にお美しい。」

「ええ。私にとって勿体ないほどでございます。」

「お聞きしたところ、本日は相当ツいているご様子・・・そこでご提案なのですが、あちらの^{VIPルーム}貴賓室に來られませんか？」

「VIPルーム、
貴賓室、
ですか……」

「要は、より高額の賭博ゲームを楽しもうというわけです。最高級の奉仕サービスや、あの部屋でしかできない賭博ゲームは勿論のこと……金満家の方々も揃われています。同じ境遇の者にしかわからない話もあることでしょう。お気に召してもらえるかと。是非傍付きの方々も一緒にいかがですか？」

「貴方、私もぜひ行ってみたいです。」

「妻もこう言っているので、よろしければ。」

「がははははっ、決まりですな！それでは参りましょう。」

「VIPルーム
貴賓室への扉が開かれる

ここからが本当の決戦、気を引き締めないと

「こちらが我が大賭博場の貴賓室でございます。」

・・・

見るからに豪勢な装飾、中央に余計なものは配置しておらず、形からもその気品さが伝わってくる

言うなればまるで社交室サロのようだ

招待客ゲストの仕草一つとっても別格の富者ということが見て取れる

間違いなく抱えている用心棒も強いはず

「では、こちらのテーブルへどうぞ。」

招かれたテーブルには既にテリー以外にも2人の招待客ゲストが座っている

「ささ、マクシミリアン殿、おかけください。他の招待客をご紹介します。」

「今夜も楽しませてもらっていただけますぞ、オーナー経営者。」

「ところで、そちらの方は？」

老齡の狼ウエアウルフ 人にドワーフ・・・いや、ヒューマン人族かな？

「こちらはアリユード・マクシミリアン殿です。お隣におられるのは、そのご夫人のシレーネ殿。今宵初めて来られたのですが・・・随分と羽振りがいいので招待させていただきます。」

「お初にお目にかかります皆さん。」

「オーナー経営者のご厚意でこちらへ来させて頂きました。宜しくお願い致します。」

「お飲み物をどうぞ。」

「ありがとうございます。」

エルフの女性からは一切の感情が感じられなかった

彼女らもまた、アンナさんと同様に被害者なのだろうか

「オーナー経営者、先程から見かけるこの美しい方々は・・・」

「彼女達は、まあ聞こえが悪いかもしれませんが・・・私の愛人です。

自分で言うのもなんですが・・・多情な私めの求愛に真摯に答えてくれました。」

「この貴賓室VIPルームにいる女性たち全てが・・・ですか？かなりの女性がいらつしやるように思えますが・・・」

「ええ。私の愛に答えてくれた美姫達ですが、独り占めしようものなら美の女神から言が飛んでくることでしょう。そこで僭越ながら皆様の目を潤す一役になって頂ければと、こうして酌に協力して頂いているというわけです。」

怒りで我を忘れそうになりながらも何とか押さえ込みながら接する

後ろで控えるリユーさん達からも僅かながら殺気が感じられる。恐らく彼女達も同じ感情なんだ

「そういえば……ここに来る途中、オーナー経営者は傾国の美女を手に入れたと耳にしました。」

「おおっ、私も聞きしましたぞ！何でも遠い異邦の国から娶ったのだとか。」

「がはははは！皆さんは耳が早い！ええ。おっしゃる通り、新しい愛人として迎えたのです。せっかくだので紹介しましょう！おい！」

「初め、まして……アンナと申します。」

伝え聞いた通りの容貌、彼女で間違いはず

それにしても・・・

綺麗だなあ・・・

って、ダメダメ！今は集中集中！

ようやく出逢えたんだ、何がなんでも救出するんだ

「実は異国の地で巡り会いましたな。この愛らしさと美しさに私めもすぐに虜になつてしまったのです。・・・ん？マクシミリアン殿、彼女の顔になにか付いていますかな

「？」

「いえ……ただ、彼女と似ている娘を知っています。とある知人の話なのですが、彼は悪漢達の誘いに乗って賭博に手を染めてしまい……多くの財産を奪われてしまった拳句、自慢の一人娘も攫われてしまったのです。」

「……!？」

大きく崩れてはないけど、オーナー経営者の顔が曇り始めている

「知人が愚かだったのは間違いありません。しかし調べてみると、その件は誰かの差し金だったらしく……」

「……………」

「娘を手に入れるために、ならず者達をけしかけ、全てが終わった後は悠々と彼女を懐に囲っているそうです。心を痛めるばかりです……私は、今でも彼女の身を案じ、その行方を追いかけています。」

「……興味深い話ですなあ、マクシミリアン殿？ところで、貴殿は彼のフェルナスの伯爵と聞いておりますが……」

「ええ、ただの田舎貴族です。愚かな友人さえ見捨てることの出来ないどうしようもない正義気取りのヒューマンです。」

「何を勘違いされてるかは存じませんが……どうやら、マクシミリアン殿は奥様を差し置いて、このアンナにご執心の様子だ。ならば、賭博ゲームをしませんか？」

「ここまででは打ち合わせ通り、遠回しにほのめかすことでテリーの逃げ筋を潰していく。」

「ここまでが第1段階だった」

「賭博ゲーム……？」

「そうです。賭博ゲームに勝った者は敗者に願いを聞き入れてもらう。勝者は求めるものを手に入れることが出来るのです。あと、最高額の賭札チップもお貸ししましょう。こうでなければ我々の求める賭博ゲームは成り立たない。」

用心棒の立ち位置も変わっているし、逃がすつもりは毛頭無さそうだ

最初からその選択肢はないですけど・・・

「富や地位、名声も勝ち得た私達が欲するもの・・・それは命懸けの緊張感。違いますか
な？」

「・・・いいでしょう。その賭博^{ゲーム}、受けます。」

「貴方・・・」

「大丈夫です、シレーネ。私は負けない。」

不安そうに僕の手を握るシルさんをなだめ、改めて彼らと向かい合わせる

「皆様もどうですかな……ここは最大賭博場！私とマクシミリアン殿との一騎打ちでは実に味気ない！条件はみな一緒です、勝者の願いは私が叶えましょう！流石にお前の命が欲しいなどと物騒な望みは御免被りますがな！」

「せっかくの機会だ、私も宜しいかな？」

「では、私も。」

「どうぞどうぞ、参加者は拒みませんぞ。」

「賭博ゲムに何かご希望はありますか？無ければポーカーを行おうと思いますが。」

「構いません。」

「では、賭札チップの有無。元手の賭札チップが無くなった時点で、その者は敗者です。」

一見すると1vs1vs1のロワイヤル制。ただ、ここは敵地。間違いなく2人はあちら側、かといってポーカー以外の選択肢も取れない

「私は・・・手始めに賭札チツプ二十枚から賭けるとしましょうかな。」

「私はその倍を！」

長い長い夜になりそうです

・・・

「フルハウス。今回は私の勝ちのようですね。」

まさかこんな所でクロエ直伝の駆け引きが役立つとは・

とはいえ、3 vs 1の不利な状況。なんとか勝ち越してはいただけるけどギリギリな状況に変わりなかった

「賭札チップが随分と減ってしまったようですが、大丈夫ですか？マクシミリアン殿？」

手札の役は悪くない。それでも最初から勝負を仕掛けてこない彼らには部が悪すぎる

「そういえば……まだ私が勝った時の願いを言っていないませんでしたな。」

「私が勝った暁には、貴方の伴侶……隣にいる奥様をしばらく貸して頂きましょうか。お若い奥様をもらわれて羨ましい限り。私もぜひ、そのおこぼれに預かりたいと思いま

してなあ。なに、私が暇な時に晩酌に付き合ってもらっただけです。．．．．．2人きりのね。」

気持ち悪い目付きだ、オラリオのとある男神太陽神を彷彿とさせる

「ふふ．．．生意気な者や欲に目が眩んだ者、あとは貴方のような正義感に突き動かされる者．．．．．私は全て、食い物にしてやりましたよ。さあ、どうしますかな？賭博ゲームを続けますか？それとも．．．」

この依頼をリユースさんから持ちかけられてから1度たりとも投げ出そうなんて考えたことなんてなかったし、つもりなんてなかった

なにより女性を食い物にしているこの男が許せなかった

昔、僕の生き方を導いてくれたお爺ちゃんが教えてくれたんだ

『女の子は大切にするもの』だと

それをバカにしたような目の前の男がなにより嫌いだった

「少し、よろしいでしょうか？」

ふと、シルさんが声を上げた

「いかがされましたかな？奥様？」

「皆さん、夫は少々疲れているようです。ですので、ここからは私も賭博ゲイムをさせていただきますか？経営者オナナイ、負けた際は私は望む通りにいたします。だから、夫には何もしないで。」

「ふふふつ、はははははは．．．真に美しいものですなあ、夫婦愛ケイゴイというものは。ええ、約束しましょう、奥様。」

シルさんに限って心配は要らないはずだけど．．．最後の最後に頼っちゃうのは男して不甲斐ないというか．．．

それでも今は、シルさんに賭けるしかなかった

「早速再開といたしましょう。奥様はポーカーがお得意とお聞きしました。一応なにかご希望はありますか？」

「お恥ずかしいのですが、ドロージャーでもよろしいでしょうか？それと、勝負を下りる際には、参加料エントリーの2倍の額を支払うというのはどうでしょうか？」

「2倍の参加料エントリー?・・・まあ、いいでしょう。では、そのルールで。」

「ありがとうございます！」

・・・

「ああ！また私の勝ちですね！」

「馬鹿なっ!？」

シルさんと交代してからは負けることはなかった

最初は手札を明かし始めてびっくりしたけど、彼らは見事に術中にハマったかのように焦り始めていた

「ふふ・・・ストレート。」

「スリーカード。」

「フルハウス。」

減っていく
シルさんの予告手札ハンドに見事に搔き回されたみたいで、彼らの賭札チップはどんどん

「皆さん、ご存知ですか？神様の中には『魂』の色を見抜いてしまう女神がいるそうですよ？何でも彼女の瞳は『魂』の色の揺らぎを見て、子供たちの心まで暴いてしまうのだとか。」

アーニヤさん達がシルさんを『魔女』と揶揄する理由が分かった気がする．．

「さあ、再開しましょうか？」

．．．

「フォーールド降りる．．．」

「アンデイト忘れずに参加料の二倍を払ってくださいね？」

「チップ(賭札から見ても．．．ここは賭けたい．．．俺のハンド手札は．．．これは!?)」

「（フォーカード！これならば・・・これならば見透かされていても関係ない！最後に勝利の女神が微笑んだのはこの俺！ここで・・・こいつらは終わりだ！）」

「^{オールイン}全賭札投入だ！」

「ちよつとだけ、あやかれたら・・・なんて思ってただけなのに。」

シルさんからは今まで以上の笑みをこぼしている

「私も^{オールイン}全賭札投入で。」

「っ!？」

テリーの顔から驚愕が隠せないでいる

「そ、それでは……ショーダウン手札開示！」

「今日の私は、どうやら『幸運の兎』さんに祝福されているみたいです。」

2人の手札を開示する

テリーはフォーカード、対してシルさんは

「ロイヤルストレートフラッシュユ！」

「ファ、ファウスト！」

「．．．不正は、ありません。」

「では、約束通り．．．主人の願いを聞いて頂けますか？」

「．．．よろしい、彼女にはしばらく暇を出すことにしましょう。思えば異国から来たばかりで疲れてるでしょうからなあ．．．」

よし、あとはここから畳み掛けるだけ！

「これで……よろしいでしょうか？ マクシミリアン殿。」

「いや、まだだ。」

「……なんですか。このアンナだけでは、ご満足して頂けないと？ マクシミリアン殿は実に強欲でいらつしやる。私はどれほど愛する者を手放せばいいのでしょうか？」

許せない、ここまで女性女の子をバカにするようなコイツだけは！

「全員だ。」

だから、ここにいる全員助け出す。それこそ僕の目指した英雄像だから！

「はっ。」

「貴方が金にもものを言わせ奪い取った全ての女性を解放してもらいます。」

「ふっふっふっ、……うふふふっ。主人はとても欲張りなんです。ふふっ」

「ここ、このっ、調子に乗るなよ、若造……何を勘違いしている？何様のつもりだ？たかが賭博ゲムに一度勝ったくらいで！ギルドが守ってくれるなんて考えているのなら間違いだ!! 娯楽都市サントリオ・ベガから出向している俺はっ」

「違います。貴方はサントリオ・ベガ娯楽都市の人間ではない。」

今まで口を開かなかつたりユーさんがその口を開いて語り始める

「そもそも、テリー・セルバンティスなどという名前ですらない。……貴方の名前は……テッド。」

「オラリオで違法賭博を繰り返していた店の胴元。都市から追放された主神が天界に送還されていたとしても……その背には封印された「ステイタス」が残っています。この開錠ステイタスチップ葉がそれを教えてくれるはずです。」

「……ふ、ふふ。これは、飛んだ言いがかりを付けられたものだ。くだらない出まかせ

に耳を貸すつもりなど毛頭ないが……この俺、ひいては店の沽券に関わる戯言を吹聴して回る輩を、生きて帰す訳にはいかん！おい！お前達！」

「ひっ！」

周りにいた2人の用心棒がテリーを護る形で構え始める

「一応……そう一応、殺す前に聞いておいてやろう。貴様、何者だ？」

「名乗る程じゃないけど教えておいてあげるわ！」

今まで喋らせて貰えなかった反動からか、ここぞとばかりに声を上げるア

リーゼさん

それとそのポーズは必要ないと思うんですが……

「アリーゼ・ローヴェルよ！ 忘れたとは言わせないわよ！」

「……っ!? ま、まさかっ 貴様はリオンか!?!」

「1度は主神であるアストレア様がお許しになる機会を与えたお前が、あの方の厚情を無無碍にし、私欲を貪り続けたお前にもう免罪の余地はない！」

「や、やれえ、お前等あ！」

.....

「ぐああああ!!？」

「あの方に代わって、私達がお前を裁く！」

「ファ、ファウスト!!? ロロ!!? やれえ! 奴を殺せえええ!!」

2人に命じた後、テリーはアンナを連れて逃げようとしていた

不味い！とにかく追いかけないと！

「こいつらは『黒猫』と『黒拳』だ！名を聞いた事くらいは有るだろう？」

「2対2、どうしますか・・・」

「リユースン達はテリーを追ってください！ここで奴を逃がしたら追えなくなっちゃいます！その上これ以上護衛が増えてしまえば手に負えなくなっちゃいます！だから急いでー！」

「恩にきりますクラネルさん！ご武運を！行きましょう、アリーゼ。」

「わ、わかったわ！」

「追わせるわけないっぐふっ!?」

リユーさん達の後を追おうとした1人に体当たりでぶつかる

「いいから急いで！」

「どうやら死にたいようだなあ？」

「これでも冒険者なんで、いつでも死ぬ覚悟は出来てますから。」

大丈夫、彼らは本物の『黒猫』と『黒拳』じゃない

騙ることしか出来ない彼らに負けるほど、よわくない！

「もう……もうこんなところに居たくない！」

「ウチに帰すニャー！」

どうやらテリーに買われた子達も動いてくれた

さてと、ここから急がないと

．．．．

「ちよつと！リオン！あのまま残しつちやっつていいの!？」

「問題ありません。それより今はテッドを捕まえる方が優先です。」

「まあ、それなら問題ないでしょ。ほら、リオンさつさとやっちやっつて！」

「全く．．．【今は遠き森の空。無窮の夜天に散れば無限の星々】」

アダマンタイト
超硬金属で固められた金庫に向け、リユーは詠唱していく

「来れ、さすらう風、流浪の旅人、空を渡り荒野を駆け、何物より疾く走れ―」
「星屑の光を宿し敵を討て」！
「ルミノス・ウインド」！

魔力の衝突により、金庫はこじ開けられ、中の様子が頭になる

「なっ、ぎやあああ!?」

アダマンタイト
「超硬金属には、硬度に直結する純度が存在する。確かに「深層」で取れる最高純度の破壊は困難を極めますが・・・この金庫の素材は、上層や中層で採掘されたもの。強度を落としたものであれば、私の魔法でも貫ける。粗悪品を掴まされたようですね？金にも

のを言わせていたツケ・・・というものでしょうか。」

「まさか、商人どもも、俺を騙してやがったのか・・・？ちくしょう！どいつもこいつも、全員ブチ殺してやる！」

「いい加減にしなさい！」

アリーゼがいい加減聞き飽きたのかテッドを気絶させる

「アリーゼ・・・貴方って人は。」

「いいのよりオン！終わりよければすべてよしってね！さ、こいつを【ガネーシャ・ファ

「ミリア」に突き出しましょう！」

「ええ。クラネルさん達も気になります。早く戻りましょう。」

・・・

「見つからなかったわねー。あの二人。」

「はい。貴賓室^{VIPルーム}にも何処にもいませんでしたし。」

事情を話していた「ガネーシャ・ファミリア」の団員にテッドを引き渡して
戻ってきた

その道中置いてきたクラネルさんとシルを探していたのですが見つかりませんでした

彼なら大丈夫だとは思いますが・・・

「あ、いたいた。リユースーン。」

「無事でしたかクラネルさん。シルも無事で何よりです。」

「外にいたのね、てつきり【ガネーシャ・ファミリア】と一緒にだと思ってたわ。」

「ははは、事情はどうあれ、暴れちゃったのは確かですからね。逃げちゃいました。」

「本当にみんな今日はお疲れ様！シルちゃんさえ一つとそういえば名前を聞いてなかったわね。」

「ベル・クラネルです。こちらこそお役に立てて何よりです。」

「それで、報酬の件なのですが。今回賭博^{ゲイム}で得たチップ分30億ヴァリスから「ガネーシャ・ファミリア」への謝礼や買われていた彼女達分を減らして15億ヴァリスでいかがでしょう。」

「そ、そんなに稼いでたんですか!？」

「はい。本来ならお2人に分割して渡すのが1番なのですが・・・」

「い、いいですよ！流石にそんな大金貰っても！」

「ですが・・・」

「流石に報酬なしってのはミアお母さんに怒られちゃいます。ですのでも5億ヴァリスで手を打ちませんか？気持ちには嬉しいですけど【アストレア・ファミリア】に渡した方がより良く活用してくれそうですし。」

「僕もシルさんに雇われた身ですし、シルさんがこう言っている以上はこれ以上望む訳

にもいきません。」

「本当によろしいですか？」

「それじゃあこうしましょう。次に『豊穰の女主人』に来てくださった時に奮発していた
できればミアお母さんも喜んでくれますし！」

「分かりました。5億ヴァリスで手を打ちましょう。良いですね、アリーゼ。」

「ええ、そういうことなら仕方ないわ。これ以上言っても埒が明かないしね。とにかく
追手が来る前に戻るわよ！」

「はい！」

こうして4人は闇の中に消えていった

EP 4 後日談

「失礼します。」

「いらつしやいませー。……ってリユースさん、お願いですから裏口から入るのはやめてください……。」

「いえ、客ではない私が表から入るのは迷惑をかけてしまうと思って。」

あの日以来、相談や依頼事以外にもたまにリユースさんが訪れるようになった

基本裏方しかしない僕にとって話し相手が出来るのは嬉しいんだけど・

「それで、今日はどんな話を持ってきてくれたんですか？」

ひとまず彼女を簡易的に設置されたテーブルに案内してハーブティーを出す

「半分私室と化してませんか？」

周囲を見渡したながらリユースさんから質問される

「リユースさん以外にもここに来られる人は少なくともいるんで、ミアお母さんから許可を得て置かせてもらったんです。勿論自腹ですが・・・」

「何か申し訳ありません・・・」

「いやいやいや！リユースさんが謝ることなんて無いですよ！断りきれない僕にも責任はありますし。」

「そこは自覚があつたんですね・・・」

あれ？僕呆れられてる？

「そのハーブティー、最近練習し始めたんですけど・・・もしかして苦手でしたか？」

ハーブのいい香りを醸し出し、湯気がいい感じのコントラストを生んでいる

せつかく来てくださったのに何ももてなさずに終わるのは酒場の店員としてどうかと思つて練習し始めたのだ

勿論ミアお母さんのお墨付きが貰えるまで出さない約束でだけと・

「いえ、おしかけてる立場上、もてなされるのは気が引けると言いますか。」

「ここは酒場です。どんな客でも食べさせてやるのがミアお母さんのモットーです。ここでもてなさないと逆に僕が怒られてしまいます。あ！味ならちやんとミアお母さんからお墨付き貰つてるので問題ないですよ！」

「分かりました。ここはお言葉に甘えさせてもらいます。」

そう言つて一口、味わうようにして飲んでいく

「どうですか？お口に合えばいいんですけど・・・」

「余り紅茶というのは嗜む訳ではありませんが、美味しいことは分かります。」

「良かった。人によつて好みは分かれると聞いたので、その言葉を聞くまで不安だったんです。」

「酒場なので出す機会は無いと思われませんが、これなら万人受けするのではないでしようか。」

「それで…今日はどんな話を持ってきてくれたんですか？」

片や酒場の店員、片や都市内外問わず活動する冒険者

多くの冒険者の集う酒場だからこそ好奇心は駆られてしまうのだ

「いえ、今日は先日のお礼をと思ひまして。」

「いえ、あれは半分僕の我儘みたいなものですし・・・」

「そういう訳にもいきません。私から持ちかけた以上、何も返さないのは流石に・・・」

「分かりました。ありがたく貰っておきます。」

女性にここまで言わせて断るのは失礼というもの

.....

「そろそろ時間ですので失礼します。」

「はい、こちらこそ色んなお話が聞けて楽しかったです！」

あれから皿洗いを続けながら他愛もない世間話を続けてた

「それではまたのお越しをお待ちしております。」

リユースさんが帰宅すると言うので裏口から送ることにした

「ああ、最後に1つよろしいでしょうか。」

彼女の背中を見送って、また作業に戻ろうかとドアに手をかけた時、ふと思
い出したかのように

「なんですか？」

「アー・デイ・ヴァルマという女性をご存知でしょうか？」

その一瞬だけ、酒場の喧騒が嘘のような静けさを感じていた

怪物祭（モンスターファイリア）

EP5 脈動

「アーデイさんですか？」

「ええ。別に深い意味はございません。あるかないかだけ答えていただければ。」

「はい。名前くらいは……」

「そうですか……つかぬ事をお聞きしましたね。では失礼します。」

立ち去る彼女の後ろ姿はどこか儂げだった

「いつまでそこにいるんだい！早く戻りな！」

「は、はい！」

・・・

「怪物祭モンスターフェアですか？」

「はい。明日開催されるんです。」

「そうか、もうこんな年ですか・・・」

「ベルさん、一緒に回りませんか？」

「えっ…それは別に構いませんけど良いんですか？仕事とか。」

「ミアお母さんから許可は貰ったので大丈夫です。ベルさんは元々お休みでしたよね？」

「そうですね。モンスターフィリア怪物祭は1度も行けませんでしたから行ってみるのもありかもしれませんね。」

「やった！約束ですからね。」

ルンルンと厨房に戻っていくシルさんを見送って、再び作業に没頭する

その日は久しぶりにダンジョン潜りたかったけど…たまにはいつか

・・・

「ベル君！この通りだ！頼む！」

お昼前の客足もまばらでアーニヤさん達も各々休憩を挟んできた頃、ヘルメス様がやってきた

「事情は分かりましたがなぜ僕なんですか？ヘルメス様の所の団員でも十分では？」

「勿論俺のどこからも出すつもりだけど、君には別行動で調査をお願いしたいんだ。ミアさんに俺から頼んどくからさ！」

「はあ……」

ヘルメス様には色々とお世話になったりしたりしてはいるものの、このような曖昧すぎる依頼は初めてだなあ

元々何を考えているか掴めそうで掴めない雲のような胡散臭い神とはいえ、意味

もないことで彼は動かない

そんな神なのだヘルメス様は

「アスファイ達にも僕から伝えておく。情報交換は積極的にして欲しい。」

ミアお母さんの方を振り向けばやれやれと言った顔でこちらを見る

「分かりました、引き受けましょう。でも具体的に何をすれば良いんですか？18階層以降の調査と言っても宛もなく探す訳にもいかないし・・・」

「具体的に調べて欲しいのは27階層なんだ。最近不穏な動きが目立ってきてるらしく

てね。ギルドの方でも大きな動きは無くても目を向けてるらしいんだ。」

27階層と言ったら港街メレンに繋がってる場所だったっけ

「流石に【ロキ・ファミリア】や【フレイヤ・ファミリア】に頼めないんだ！頼めるかい？」

「一応ミアお母さんには話しますがどちゃんとヘルメス様からもお願いしますね？」

「さすが持つべきものは親友だ！」

やっぱりこの男神苦手です・・・

・
・
・
・「
・
・
・
・
」

普段ベルがダンジョンに潜る時に限らず、外出する際は基本ナイフを装備してる

昔所属していたファミリアにいた時、打ってもらった不壊デユランダ属性の1品

当時からベルの得物の一つ

「べるさん、ミアお母さんから呼ばれてますよ。」

「あ、ごめんなさい。今行きます！」

・・・

た
オラリオ全体を眺めることが出来るバベルの頂上にその女神は見下ろしてい

「ふふつ、面白いことになりそうね。ねえオツタル？」

EP6 【ロキ・ファミア】

酒場とは一種の情報源だ

元から冒険者とは噂がやたら好きであり、酒が回ることも相まってその喧騒は次第に大きくなっていく

獣人には遥か劣るものの、酒場の冒険者たちの内容くらいは聞こえてくる

酒場で働いている以上は仕方ない

変に意識すると手が厳かになっちゃうから黙々とこなすだけ

そんなことを考えていると一際喧騒が騒がしくなる

「そういえば今日は予約された団体が来られるんだっけ。」

「これからもっと増えるからねー、貯まらないように頑張りなよー。」

去り際にルノアさんが注意してくれる

今日は確か【ロキ・ファミリア】が遠征帰りに宴会をやるんだっけ

【ロキ・ファミリア】はオラリオに数あるファミリアの中でも1、2を争うほどの巨大派閥

それもほぼファミリア全員で宴会。喧騒はさらに増していく

「よっし！皆、迷宮ダンジョン遠征ご苦労さん！！今日は宴やから、無礼講や！！」

エセ関西弁が特徴の【ロキ・ファミリア】主神のロキが乾杯の音頭を取る

【ロキ・ファミリア】の宴会は彼女の音頭から始まる

「よっしやあ！アイズ！そろそろ例のあの話、皆に披露してやろうぜ！」

この声はヴェートさんだっけ、顔までは一致してないけど常連でもある【ロキ・ファミリア】の1部は声と名前くらいは一致してる

特にベートさんは中でもよく声の通る方だからこそよく覚えている

「あれだって！帰る途中で何匹か逃したミノタウロス。最後の1匹お前が5階層で始末したろ？」

ミノタウロスが5階層まで逃げたのか・・・レベル2相当だから【ロキ・ファミリア】の団員たちなら問題なく倒せるけど5階層はまだ序盤だからレベル1や2の冒険者と当たった日には目も当てられないな・・・

とはいえ、「ロキ・ファミリア」の人達の手から逃げられるミノタウロスの方が
凄くない？

「そんでその時居たトマト野郎！いかにも駆け出しのヒョロくせえガキが逃げたミノタ
ウロスに追い詰められてよう！そいつ、アイズが細切れにしたくっせえ牛の血を浴びて
真っ赤なトマトみてえになっちまったんだよ。」

あまり気のいい話じゃなかった

駆け出しのレベル一がミノタウロスから助けられた。まとめればそれだけ
の話だけど、どうも気分が悪い

自分達のミスで冒険者が1人死んでしまった

それを回避出来たのだ酒場の笑い種になるくらいならまだいいのかもしれないな

い

それでもこの喧騒だけはどこか好けなかった

「それでよ、そのトマト野郎叫びながらどつかにいつちまってえ。うちのお姫様助けた相手に逃げられてやんの。ハツハツハ、情けねえつたらありやしねえぜ。」

酒が回ればベートさんが1人喋り始める

「ゴミをゴミと言って何が悪い。アイズ、お前はと思う。例えばだ俺とあのトマト野郎ならどっちを選ぶってんだ？ おい！」

胸の中のモヤがどんどん覆いかぶさってくる

いけないいけない、抑えないと抑えないと・・・

「自分より弱くて軟弱な雑魚野郎に、お前の隣に立つ資格なんてありやしねえ。他ならないお前自身がそれを認めねえ！ 雑魚じゃ釣り合わねえんだ。アイズ・ヴァレンシユタインにはな！」

ガタンッ

勢いよく椅子が引かれる音がし、誰かがかけていく音がする

その時、何か吹っ切れた音がした

やっぱりこの喧騒だけは好きになれない

先までの酒場の喧騒が嘘のように鎮まっていく

「ちよ、ベル！抑えて抑えて！」

ルノアさんに言われてハッと我に返る

それでも一度鎮火された喧騒に再び火が点ることは無い

「はあ……しようがない子だね。ベル、あんた様子を見てきな金は明日までに返せつて事もね。ほら、さっさとしないともうしなつちまうよ。」

遠回しに頭を一回冷やしてこいと言われてる

無理もない、火種はあちらにしろ酒場を白けさせたんだ。怒りはしないにしろこのま待つて訳にも行かないだろう

「分かりました。失礼します。」

2階に掛けておいたフードを身にまとい裏口から出て追いかけていく

ここで、自分が当の本人に心当たりのないことを思い出す

「とは言ってもこのまま帰る訳にも……」

それでもただ1つ確信に近い心当たりがあった

……

ダンジョン6階層、そこでとある冒険者を見つけた

そこで彼は単身、ナイフを片手にウォーシャドーと戦っていた

そこに怒りはなく、ただ悔しさに駆られるままに自分を突き動かしていた

ダンジョンで獲物の横取りは御法度

という訳では無いけど何故か手助けをする気にはなれなかった

詳しくは分からない

ただ、彼と出会うのはまだまだ先にすべきだと直感で感じたから

大丈夫、彼はまだ死ぬことは無い

またいつか、会えるその日まで

・・・

「すみません、ただいま戻りました！」

「やつと戻ってきたニヤ！流石に早くもどらニヤいとてんてこ舞いニヤ！」

「は、はい！」

フードを元の場所に向け、手洗いを済ませてからまた裏方の作業をこなしていく

「ベルさん、彼の状況はどうでしたか？」

シルさんがこちらを覗きながら質問してくる

「彼って白髪で赤い目の？」

「はい。さつきベルさんが追いかけていったあの子です。」

「あの子ならまだまだ伸びそうですよ。」

「ベルさんがそう言うなら確かですね。安心しました。」

「そんなことよりシルさん、そろそろ戻らないとミアお母さんに怒られちゃいますよ?」

「あ、いけない。それじゃベルさん。またお話聞かせてくださいね。」

少し、今後の楽しみが増えた気がする

EP7 怪物祭（モンスターファイリア）

「すみませんでした！」

まだ店の開いていない時間、昨日の彼が勘定を返しに「『豊穰の女主人』にやっ
て来てくれた

「あの子がシルが言っていた冒険者かにや？」

「ですね、あの様子だと。」

「もう少しで私達が乗り込むところだったもんねえ。」

「いやもう昨日の時点で押し掛ける寸前でしたよ!?!」

「それがここのやり方つてもものにや。おミャーもいい加減慣れるのにや。」

「ベルって私達より先に働いてるのになれない感じよね。」

「白髪頭はウブだから仕方が無いのにや。ただ、怒らせた時はミア母ちゃんとは違った恐ろしさにや。」

「ウブってなんですか!?!ウブって!それに僕そんなに怖かったですか!?!」

「そうにや。あれはもう鬼神が宿つてたにや。」

「まあ、僕は基本裏方ですし・何より。」

「行つてきます！」

裏口から勢いよく彼が出ていくのを見送る

「見守つてる方が好きだから。」

・
・
・

「ベルさん！次はこれ食べましょう！」

「待つてくださいいよシルさん！この人だかりじゃはぐれちやいすよ！」

今日のシルさんはいつもより活発な気がする

そのくらい楽しみだっただって事なのかな？

「ほらほら、ベルさん早くー。」

「お願いですから先行しないでください。」

「あ、ごめんなさい！」

さすがに年に一度のお祭りとだけあって人だかりもいつも以上だ

「すみませーん、クレープ2つ下さい。」

「あいよー！」

屋台のおじさんがクレープを作ってる間に財布を取り出していると

シルさんがポツケを探りながら困り顔をしていた

「ごめんなさいベルさん！財布忘れてきてしまつて…」

「大丈夫です。僕も余分に持つてきましたし。今日は僕の奢りということで。」

「でもそれじゃベルさんが。」

「気にしないでください。この前の賭博場カジノのお礼もまだでしたし、何よりいつもお世話になってますし。」

「そうですか？じゃあお言葉に甘えさせていただきますね。」

．．．

「あれ？シルさん？」

クレープを食べ終わって、他の屋台を見回っているといつの間にかシルさんと
はぐれてしまった

「この人混みの中で探すのは骨が折れそうだなあ．．．」

かれこれ五分くらい探してるけど一向に見つからない

かと言ってもこのまま一人で行動するのもなあ

「きやああああ!!モンスターだああ!!」

悲鳴の方向を向けば、闘技場の方からシルバーバックが逃げ出していた
出てきたところから考えても怪物祭に使う予定のモンスター!?
でも「ガネーシャ・ファミリア」がそんなポカをやらかすと思えない

「それより今はアイツをどうにかしないと!」

巡回の手伝いに入ってるらしい「アストレア・ファミリア」に任せれば確実なんだろうけど、やっぱり放っておけない

「念の為ナイフを用意しておいて良かった。」

とにかく皆の目線がちらばってる今のうちに・

「ああ！エイナの弟くんじゃん！」

「え？」

出鼻をくじかれ、声をした方に振り向くもそこには見覚えのない女性
制服から見てもギルドの職員なのは分かるけど見覚えがない

「今突然モンスターが暴れだして大変なの！」「ロキ・ファミリア」の人達に頼んだから弟くんもすぐ逃げて！」

「えっちよつと待ってくださああああ!!」

EP 8 食人花

「ふん…まさか貴様がまだ生きていたとはな。」

「この騒ぎ、やっぱり闇派閥あんだつが黒幕の一人だったとはね。」

「ふんつ、時代錯誤の英雄が。今更このオラリオになんの用だ？」

街中で突如暴れだしたモンスター群の中、二人の男が対立する

「いいのか、こんなところにいて？」

「問題ないさ。彼女達ならやってのける。俺はあんたを捕まえる。まあ、まともな情報なんて」

食人花を操っていた男の背後に回り込み、男を後ろ手で縛り上げる

「一応だが聞いておく。イヴィルス闇派閥に関する情報を吐くつもりはないんだな？」

「誰がそんなことを喋るかよ！」

「【ウィーシエの名のもとに願う】【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽園の契り。円環を廻し舞い踊れ】」

レフィーヤのみに許された千変万化のレアマジック

あらゆるエルフの魔法を発動できるサモン・パイスト召喚魔法

「あつちはもう心配ないな・・・」

・・・

「【至れ、妖精の輪—どうか、力を貸し与えてほしい】【エルフ・リング】！」

レフィーヤを中心として魔法陣が出現する

「―終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け」
【閉ざされる光】！【凍てつく大地】！

対象は三体の食人花

一度は打ちのめされ、挫けそうになるももう一度立ち上がり

仲間を守るため、まだ届かない憧れに少しでも手を伸ばすため

「吹雪け、三度の嚴冬。―我が名はアールヴ」！
【ワイン・フィンヴェトル】！

彼女の師であるリヴェリアが使用する第1階位攻撃魔法

レフィーヤから放たれた極寒の冷氣により食人花は一瞬にして氷漬けにされ、
砕け散る

「ありがとうレフィーヤ、助かったあ！」

「テイ、テイオナさん!？」

レフィーヤにテイオナが抱きつき、続いてテイオネとアイズが集まってくる

「みんなご苦労さーん。」

ロキがアイズにレイピアを投げ渡し、一人の少女を連れてやってくる

少女は騒動の中で、母親とはぐれてしまい探して欲しいと頼まれていたのだ

「まだ仕事が残つとるでー。アイズは、逃げた残りのモンスターを片づけてや。ティオネとティオナは、悪いけど地下水路を調べてきてな。他にも居ると厄介や。」

それぞれがロキの指示に沿って行動を移そうとしたその時だった

「また地震!?!」

「ちよつとちよつと!?!まさかまた来るなんて言わないでしょうね!?!」

2 度目の地震

テイオネの嫌な予感は的中し、先程の食人花が今度は5体出現する

「また増えてるんですけど!?!」

「ロキ!その娘達を連れて早く避難しなさい!残った私達で片付けるわよ!」

突然の2度目の襲来に驚きつつも、それぞれが迎撃体制を整える

「【父神（ちち）よ、許せ、神々の晩餐をも平らげること。貪れ、獄炎の舌】【喰らえ、灼熱の牙】！【レーア・アムプロシア】！」

「うっそお……」

「あれを、一撃……」

詠唱と共に描かれた一閃の後に全ての食人花が灰と化し消滅する

「なんだったのかしら？」

「さあ？」

技を放った本人は見つからず、困惑している姉妹と打って変わってあまり浮かない表情をするロキ

「なあ、アイズたん達にもうひとつ頼み事があるんやけどな。」

「何よ？」

「さつき見た事、しばらく内緒にしてくれへんか？」

「それは別に構わないけどどうしたのよそんな険しい顔して。」

「ちよいと気になることが出来てな・・・」

・・・

「シルさーん、シルさーん？」

突然モンスター達が暴れだしてしまい、できる範囲でモンスターを倒しながらもベルはシルを探していた

「『豊穰の女主人』に戻ってたら良いんだけど……」

人混みをかき分けながら歩いているとダイダロス通り付近までやってくる

「あ、ベルさん！」

自分と呼ぶ声が聞こえ、振り向けばダイダロス通りからシルが現れる

「シルさんいた！探したんですよ、一体どこに居たんですか！」

「ごめんなさい。それよりあちらで女神様が倒れてしまつて。運ぶの手伝つて貰えませ

んか？」

「わ、分かりました。案内してください！」

二人、ダイダロス通りへと足を踏み入れていく

そんなふたりを一人の神が見下ろしていたとも知らず

EP9 女神アストレア

「シルさん、ヘステイア様の様態は……」

怪物モンスター祭後半は騒動の終息に追われ、祭りどころの騒ぎではなくなっていました

あの後シルさんと合流できたものの、気を失ったヘステイア様を休ませるために『豊穡の女主人』の自分の部屋を貸して休んでもらうことにした

「疲労で眠ってしまったみたいです。それよりよろしいのですか？ベルさんも明日からヘルメス様の頼みでダンジョンに潜りつきりになるのに……」

「流石に女性に押し付ける訳にも行けませんから。」

「ヘルメス様がおっしゃるには下層に潜られるんですよね。」

「下層といってもまだ上の方。それに、頼りになる知り合いも居ますから。」

昔色々あつて、下層でお世話になったファミアが居る

風の噂で、最近色々動いていると聞いた

言ってしまうと手を組むのは賭けみたいなものだけど0より1

「アスフイさん達も並行で調査してるそうですし。それでも、下層にはいい思い出なんて有りませんけど・・・」

あそこは本当に色々ありすぎた

「・・・」

・・・

「ははは、お主から手前を尋ねてくるとは珍しい。」

「いつもは椿さんが押しかけてきますもんね・・・」

椿・コルブランドさん

「ヘファイトス・ファミリア」団長というだけあって、鍛冶師としての腕は一流であり、冒険者の腕も試し斬りでレベル5まで到達したとか色々つぶつ飛んでいる人だ

「どうしたどうした、試し斬りならばし待つてくれ。今色々混みあつてて手前も忙しいのだ。」

「違いますよ!?!?てか、また試し斬り行くんですか!?!」

椿さんとはオラリオ中でも関係は長い方で、ひよんなことから休日に椿さんの試し斬りに付き合わされる事がしばしば

そのお代としてナイフの整備を頼む

なんだかんだ互いにウインウインな関係でやって来てはいる

「それに…忙しそうなので戻ってきてからで大丈夫です。時間取らせてしまいごめんなさい。」

明日から下層で活動するからと、寄ってみただけですがに他の冒険者を押し

のけて頼みたくはない

いきなり押しかけた謝礼を述べようと口を開く

「まあ待て、せっかく来たのだ手前の話し相手にでもなってくれぬか。一緒にお主のナイフも整備してやろう。」

「でも、他の冒険者の依頼が・・・」

「ついぞ主神様から暇を出されてしまつてな。かと言って他の団員の邪魔などできんからちと一人で暇しとつところにお主が来たのだ。ちと付き合え。どうせ休みなのだらう?。」

「そうですね。それじゃあお言葉に甘えて。」

促されるままに椅子に腰かける

「ところでお主、何かいいことでもあったか？」

「え？」

「昔からお主はどこか影を含んでおった。だが今はどこか明るくなったように感じる。」

そんなもんなのかな、僕自身じゃ何も感じなかった

「椿さんやミアお母さん達のおかげかも知れません。」

もう、独りは嫌だから

全てを1度手放したあの日から、僕の中にどこか大きな穴が空いた感覚が続いた

多くの出会いと多くの別れを経て、得たものも失くしたものも

椿さんと出会い、馬車馬の如く試し斬りに付き合わされたおかげで余計な考えも飛んでしまった

ミアお母さん達が今の居場所をくれたからこそ、ダンジョンで墓標を探す日々も消えた

「お主と出会った時、【剣姫】がまだ【人形姫】だった時以上の何かを感じてしまったのだ。」

「僕そんなに酷かったですか？」

「うむ。手前とて鍛冶師として数多くの冒険者を見てきたがあそこまでの見たことがなかった！だが同時に興味が湧いてな。生存確認がてら誘ってるって訳よ！」

生存確認で死ぬ思いしたくないんですけど……

「ところでお主はどこまで潜るつもりだ？」

「下層、27階層がメインですが恐らく場合によってはそれより潜ることもあるかと。」

27階層という言葉にいい顔はしない

「まあなんだ、あまり深く捉えない方がいいぞ。」

「ありがとうございます。」

・
・
・

空はすっかり黒に染ってるものオラリオの明かりは消えない

「こんばんは、クラネルさん。」

椿さんとの話が長引いてしまい、帰るのが遅くなってしまった

明かりに照らされた夜道を歩いていると、後ろから声をかけられる

振り返るとリユーさんとアストレア様が買い物袋を持って立っていた

「こんばんはリユーさんとアストレア様。買い物の帰りですか？」

「そうなの。本当はみんな疲れてるから私ひとりで大丈夫って言ったんだけどね。子供達がどうしてもって言うから・・・」

「ア、アストレア様一人にさせる訳にはいきません！今回の件では裏で闇派閥イウイルスが関わっていたと耳にしましたし。」

【アストレア・ファミリア】は探索系ファミリアでありながら【ガネーシャ・ファミリア】と連携して治安維持も兼ねてる

今回の騒ぎも彼女達は鎮静に動いてたのだからいたわりたい気持ちも分かる

でもやっぱり神様ひとり出歩かせるのも不安

親と子の想いとは相容れないものだとは誰かの言葉だった気がする

「えっと……こうやって直接話すのは初めましてですね。ベル・クラネルです。」

「カジノの件、ありがとう。リユウのお願いを聞いてくれて。」

「いやいやそんな！頭を下げられるようなことなんて何も！ほとんどシルさんのおかげですし。最後もリユウさん達に任せっぱなしでしたから。」

「クラネルさん、貴方の謙遜は控えた方がいい。過度な謙遜は相手を傷つけることもある。」

「心に留めておきます。」

「ところで・・・」

アストレア様が僕たちを少し口元に笑みを浮かべながら見てくる

怖い怖い怖いって！シルさんから学んだんだ、物静かげな女性がこのような笑
い方する時は大体よからぬ事を考えてる時だって！

「こ、ここは逃げるが何とかだ！敏瞬にものをいわせてここを去らないと・・・」

「クラネルさん、諦めてください。」

ちよっ！リユーさんもそんな目で見ないでえ!?

「うんうん。同じ団員内でも距離が縮まりにくいあのリユーがまさかいつの間にな・・・」

この後、アストレア様から質問責めを喰らうこととなった

.....

「今度、改めて時間貰えないかしら。」

あれから『星屑の庭』に着くまで散々いじられ続け、いざ別れる時にアストレア様からお誘いを受けた

「この子の神親としての心配ももちろんだけど、何故かしら……貴方とはいずれ深すぎる関係になってしまう。そんな気がするの。改めて紹介させて貰えないかしら。」

「……少し考えさせてください。」

ここオラリオで僕の存在を知る人は少ない

ましてや、過去を知る人はそれこそほんのひと握り

今までも、そしてこれから

「そうね。突然言われても困るわよね。それと、リユウのことよろしく頼むわね。この子、こう見えて寂しやがり屋だから。」

「はい。よく存じていますから。」

劍姫神聖譚（ソード・オラトリア）

EP10 白巫女（マイナデス）

少し、昔の話をしよう

ア
15年前、オラリオにとって闇派閥イツイルスの抑止力であった「ゼウス・ヘラファミリ」が『隻眼の竜』の討伐失敗により壊滅

次第に闇派閥イツイルスが台頭し始め、オラリオは暗黒期に突入していった

7年前、『大抗争』によって善と悪は完全に決した

2年後、「アストレア・ファミリア」によって壊滅にまで追い込まれる2年間

後に『空白の2年』と揶揄されるほどあまりにも静かすぎた2年

ただし、それは表向きの誤った認識

6年前、27階層にて闇派閥イザイルスが冒険者に怪物進呈パス・パレードする事によりすべては始まった

元より闇派閥イザイルスの不穏な動きを調査に入った冒険者

それが全て嘘の情報であると気づくも時すでに遅し

もう一つの陣営まで巻き込んだ三つ巴の惨憺たる結果となった

そして、ギルドはこの事件を握りつぶした

その真意は誰も知らず、そして誰も語らず、闇の中に葬り去られてしまった

・
・
・
・

ヘル・ハウンドがその身体を霧散させ、灰と化する

その間にベル・クラネルは見向きもせずただ走り抜ける

魔石は落とさず、破壊される

「(目的は下層での調査・・・出来るだけ身軽にするためにも魔石は持っていけない。リ
ヴィラに滞在できる分はある。)」

兎は止まらない

薄暗いダンジョンの中を脱兎のごとく駆け抜けていく

愚かにも立ち塞がった敵は殲滅され、霧散していく

倒す敵は最低限、とにかく早さだけを重視してひたすらに潜っていく

・
・
・
・

18階層

存在する

モンスターが跋扈するダンジョンの中にもモンスターの存在しない領域は

エリリア

その1つがここ

天井はクリスタルで覆われ、森林と湿地で彩られた階層

冒険者が集い、街を創った

街が出来れば人は増え、栄えていく

そして、現在リヴィラとして成り立っている

「よう、ベル・クラネル。」

「お久しぶりです、ボールスさん。」

僕がリヴィラに着くとまずはボールスさんの所を訪れる

「お前が来る時は決まっていたいいことは起きねえんだ。今回はどんな要件だ。」

「下層の調査です。ここには一泊だけする予定なのであまり長居もしないかと。」

「お前も色々大変だな。あんなこともあったってのに。」

「せめてもの罪滅ぼし……ですかね。僕自身のもあり僕以外も含めて。」

「・・・やり過ぎるなよ。」

「もちろんです。」

踵を返して振り返ることなくその場を立ち去ることにした

・・・

「あれ？ハシヤーナさん？」

見知った顔を見かけ、声をかけようとするもその口は閉ざされる

「赤い髪にロープ？」

冒険者の街の酒場であるため、情報を求める冒険者も多い。身バレを避けるための格好をする者も少なくはないはずなただけ……

「そんな破廉恥な目で何を見ているのだお前は。」

「フィ、フィルヴィスさん！」

どこか遠目からハシャーナさん達を目で追いかけているとグラスで小突かれる

「久しいな。最近はめつきりダンジョンでも見かけなかったから、めつきりオラリオを出たとはかり思っていた。」

「・・・冒険者業は辞めました。今はある目的があつてオラリオに留まつてるんです。」

「そうか。なに、深い意味はない。私としても礼を返さないままなのは嫌なのでな。」

「冒険者なんだから困った時は助け合つて当然です！」

「でもお前は冒険者では無いのだろう。」

「あつ。あうう。」

「こ、これは恥ずかしいなあ・・・」

「そ、そういうえばディオニソス様はご一緒じゃないんですか？」

「なんだ、それでは私が常に一緒に居るみたいじゃないか。」

「えつ、無自覚だったんですか!？」

「ふつ、冗談だ。今は少し訳あつて別行動している。お前の方はどうなんだ？わざわざこゝまでやってきているのだ。何も無いわけじゃないのだろうか？」

「ここでようやく本来の目的を思い出す

「そ、そうなんです。色々あつて下層の調査を依頼されて・・・」

「なるほどな。丁度いい、その調査同行しても構わないか？私も下層に用がある。何、邪魔はしない。」

「いえ、同行して頂けるのは僕としても願ったり叶ったりです。調査と言っても手がかりが少なすぎて。そんな時、フィルヴィスさん達が下層で動いてると聞いて、何か情報でも得られたらなと思つて・・・27階層」

「すまない、力になれそうにない。ただ、同行させて貰うのは可能だろうか？ 私達も下層に用がある。」

「確かに着いてきてくださるのは嬉しいですけど。良いんですか？」

「ディオニソス様からできる限り協力しろと仰せられてる。私はそれに従うまで。」

「今日はもう時間なので明日また集まりませんか。」

「そうだな。改めて言うておくが、馴れ合うつもりはないからな！」

「分かっていますよ。」

E P 1 1 英雄の形

『英雄』とは一体なんだろうか

万物を救うか、誰かのために立ち上げられる100か

誰かが誰かを『英雄』であると言えば彼は誰かにとっての『悪』である

ベル・クラネル

彼もまた、英雄足りうる存在だった

誰かのために立ち上がり、100を救った『英雄』

ただ、彼が英雄と呼ばれることは無い

誰かの英雄ではあっても、万人のための『英雄』にはなれない

そう、『英雄』になることは決して

．．．

「へえ、ザルドの技を誰かが、ね。」

「そうや。あの技はあの日を知つとる子らでも知る人は少ないねん。それを使えるとな
ると最悪の場合．．．」
大抗争

「……それ以上は辞めておこうロキ。人類最大の禁忌は僕らにとつての悲願でもあるが、名の通りあつてはならないものだ。例え、全員がそれを望んだとしてもね。」

ザルド
アルファイア
【暴食】と【静寂】は死んだ

7年前、【暴食】と【静寂】達によつて引き起こされた『大抗争』

当時を知るもの、知らないもの。全ての認識はここに収まる

魔法とは唯一無二の武器であり、レファイア例外はあれど、言つてしまえば1種の存在証
明と言つても過言ではない

それも、1度死んだはずの【暴食】の魔法を誰かが使ったのだ、衝撃は計り知れない

常識なんてものは存在しえない迷宮ダンジョンですらまず理解は追いつかない

『輪廻転生』はあれど、死者が蘇るなど、あつてはならない

「せやけどなあ、あの時の事もある。このまま見過ごすっちゃうんか?」

「リヴェリア達には伝えるつもりさ。ただし、あまり広げすぎると混乱を招く恐れもある。ロキもその辺りは頼むよ。」

「結果ウチらの恩人に変わりないしなあ。」

「二応ギルドには僕から上手く伝えておくよ。彼が敵か味方かを判断するには早いけど、彼が魔法を使ったことは事実だしね。」

.....

「いらつしやいませ！あ、リユー！久しぶり！」

「ええ、久しぶりですシル。」

『豊穰の女主人』裏口、通りに面しているとはいえ表口が広い通りに面してるところもあり、普段から人通りは少ない

シルの日課になりつつあるお弁当を済ませ、店に戻ろうとしたシルは後ろからリユーに呼び止められる

「ふふ、来てくれるのは嬉しいけどベルさんなら居ないよ？」

「ど、どうしてそこでクラネルさんが出てくるのですか！」

「だって、リユーってば最近ベルさんと楽しそうによく話してるじゃない。」

「あ、あれはいわゆる世間話というものであつて別段深い意味はありません！」

「ふふつ、そういう事にしとくね。それで、今日はどうしたんです？」

「いえ、クラネルさんが出る前に少しお話をと思つたのですが遅かつたですね。」

「ベルさん、いつも早いから・・・朝くらいゆっくりしていけば良いのに。」

少しふくれっ面でバベルを見上げるシル

「いえ、今回の訪問は突然でしたので致し方ありません。言伝と言つても、大したことはありませんので。仕事の邪魔をする訳にもいきませんのでここで。」

「良いの？ベルさんへの伝言なら帰ってきた時に伝えておくよ？」

「いえ、もう言伝は必要が無くなつてしまったので。そうですね…では一言だけ。無茶しないようにとだけ伝えてください。」

シルに一つお辞儀をしてその場を立ち去ろうとする

「本当にそれだけでいいの？」

「……」

シルの言葉に立ち止まり、少し思念したあと

「大事なことは直接伝えることにしました。」

それ以上、言葉は紡がれなかった

・
・
・

灰を被ったような濁った空から降る雨が地面にシミを作り水溜まりを作っていく

昼間の喧騒は薄れ、雨粒の水たまりを打つ音だけが周りに響いていく

「だ、大丈夫ですか…?」

い
地面にはおびただしいほど流れ出た血が水溜まりと混ざり、止まることを知らな

「すみません…お見苦しいところを見せてしまい。しばらくしたらここから立ち去るんで…」

「でも大怪我してますよね!?!とにかく私の職場まで案内するので行きませんか?」

ウェイトレスの格好に身を包んだ女性に肩を持たれながら、白髪の男性は路地の奥へ

と消えていった

EP12 壊れだした歯車

「・・・フィルヴィスさん？」

「どうした?・・・つてとぼけても無駄だな。」

「たまたま出逢えたフィルヴィスさんと一時的なコンビを組む事になり、時間を考えると明日から動くのが妥当と考えて僕達は共に夕食を摂ることになった

まではいいんだけど、どうもフィルヴィスさんの視線が気になって仕方がない

初対面の時に向けられた敵意とは違う

好奇心から来るのかそれとも不安を孕んでいるのか、余りにも無視しづらい視線を送ってくる

「初めて対峙した時から疑問だったのだ。何故お前があのような場所にいたのか。」

「・・・」

僕と彼女の出会いとはダンジョンだった

ダンジョン内で闇派閥イギリスを追ってた僕達と彼女を含んだ討伐隊が

かち合ってしまった

怪物進呈バスバレードによって死に物狂いで戦っていた冒険者達によって全員が巻き込まれ、四つ巴の凄惨たる光景になった

つまりフィルヴィスさんは僕が何故ダンジョンの奥から出てきたのか。ということだろう

「・・・そうだね、これからコンピを組もうとしてる人との間の亀裂は崩壊に繋がってくるもんね。せつかくの機会だし、話すよ。」

「頼む。」

・・・

何時からだっただろうか

順調に回り始めていた筈の歯車に石が投げ込まれたのは

小さな亀裂から大きな崩落へと続くように、投げ込まれた石は歯車自体を崩落させていく

最初に投げ込まれた石は「ヘラ・ゼウスファミア」の壊滅

三大クエストの1つである『黒龍討伐』の失敗から彼の人生は崩落の一途へと足を運ぶこととなる

「未来の礎となる為、悪に身を落とさないか？」

オラリオから追放された後、ゼウスとたった1人の弟と共に遠く離れた僻地で暮らし始めて数年、とある1人の神がやってきた

「いめんなさい。」

その言葉に僕は頷けなかった

エレボス様の言つてゐる事は理解出来る

それでも、僕は神の言う所の『絶対悪』に身を賭すことは出来なかつた

「いや、いいさ。あの子たちから君の事は聞いていた。ダメで元々つて奴さ。じゃあ、俺は帰る。またなゼウス。」

これで、良かったのかもしれない

オラリオに火の海が広がる事は目に見えていたが、自分の無力さを考えれば手を下すのもそれを防ぐことも出来なかつた

何より僕には守りたい人が居る

・・・

「ベル。お前には言わなきやいかん事がひとつある。」

エレボス様がこの場を立ち去つてから数ヶ月がたった頃、ゼウス様から話を切り出された

「あ前の母親の姉のアルフィアがザルドと共にエレボスの策に乗ったそうじゃ。」

「!」

お義母さんとザルドさんが? どうして?

あの時エレボス様は『ダメで元々』と言っていた。つまりあの時には既に2人に声をかける算段だったはず

あの時、僕が案に乗っていればお義母さんを止められたのかな
なんて、たらればが通じる訳もなく

「ベルよ、お前はとうしたい。」

「僕は・・・」

「お前がやりたいように動け。これはお前だけの物語だ。」

「ゼウス様、最後の更新お願いします。」

「本当にいいのだな？」

「はい。」

もう、迷うことは無い

お義母さん達の真意を知るため

僕はもう一度オラリオに戻る

「新スキル、発動しとるな。」

「・・・ありがとうございます。」

深く礼をして後にする

さあ、紡いでいこう僕だけの英雄譚を

・
・
・

これは誰からも語り継がれない英雄譚

『英雄』として語られることの無い

ただ1人、裏で動いた『英雄』に憧れることの出来なかつた1人の男の物語

そんな彼のスキルは【殺人兔^{シリアルキラー}】

EP13 迷宮の楽園（アンダーリゾート）

数年ぶりのオラリオは酷く荒れていた

建ち並ぶ家々は半壊し、酷いところでは黒い煙が上がっている箇所もある

怪我人を診ている所を見るとつい最近地上で襲撃が起こったということだろうか

「（念の為フードを被ってきたけど、これ多分逆効果だよね・・・）」

敵対するつもりは無いけど過去が過去のため、知ってる人と鉢合わせて余計な混乱を巻き起こすのは避けたい

そう思つて身を隠してきたけど・・・

逆効果なようで、悪い意味で目立つちゃってる

「立ち止まりなさい。」

ヒタリと首筋に静かな殺意が向けられる

「最近、ここ近辺で貴方のようなフードに身を包んだ輩が出没し夜な夜なよからぬ事を企んでいると聞く。あらぬ疑いを持たれたくなければ控えた方が良いでしょう。特に私はいつもやりすぎてしまう。」

「……忠告感謝します。」

タイル敷の舗装された道を背を向けながらお互いに立ち去っていく

「（長い付き合いになっちゃいそうだなあ……）」

そんなことをふと思いながら、
ベル・クラネル 彼は一人歩き始めていた

・
・
・

ベル・クラネルはいつもトラブルメーカーの人物だった

冒険者として過ごしてきた時期に遭遇した異常事態は数知れず
とはいえ、彼はオラリオ最大派閥。多少の異常事態は今晚の酒の肴として笑い話でお
しまいだつた

アルフィアはそんな彼らを呆れ顔で見ながらもベルに一言二言小言を漏らしつつも
無事に生還した彼を母であるメーテリアと共に労う

ゼウスはそんなベルをいつも笑つて彼の冒険譚を聞いていた

もはや彼のトラブルの遭遇率エンカウントは異常の一言であり

その才は静かに動きたかつた彼の行動を阻んでいくこととなつた

拠点にしていた廃教会は憲兵に見つかり

闇派閥との抗争に常に巻き込まれる形で目的の人物も見つかることも無く無下に時間
だけが過ぎていく

「さて、久しぶりだね。君とこうして話すのは。」

それが元で、1人の悪友^{とも}であり、戦友^{とも}とも呼べる出会いを果たしたのはまた別の話である

・・・

黒龍討伐失敗を機に、ヘラ・ゼウスファミリアへの風当たりは悪くなっていき、特に「フレイヤ・ファミリア」との関係は悪化していき、最終的に追放という形で終わりを遂げた

余計な衝突は避けたかったベルは、できる範囲の接触を避けながらも水面下で密かに行動をしていた

それでも、彼特有の巻き込まれ^{トラブルメイカー}気質と、どうしようも無いほどのお人好しが何も起こさない訳もなく

段々と巻き込み巻き込まれながら『大抗争』へと足を踏み入れていく

「貴方は、私達の味方なのですか？敵なのですか？」

「目の前に手を差し伸べるのを待つ人の手を僕は取ってあげたい。ただ、それだけです。」

想いは継がれていく

『最後の英雄』を求め、神時代の崩壊を目論んだ彼らとはまた別の形でベル・クラネルは迷宮都市オラリオの行末を、『英雄』の誕生を彼は見届けるため、彼は留まった

それが歯車に投じられた最後の投石だとは知らず

．．．

ベル・クラネルは元冒険者である

『大抗争』以降、冒険者資格を剥奪された彼がその後も迷宮ダンジョンで活動を続けられたのは、ある二神と他ならぬ彼自身の行動故のこと

闇派閥イッイルス壊滅の目的のために彼は水面下で動いていた

それは枷とでも呼ぶべきか、闇派閥イッイルスに対抗できる1つの手段として、彼は動いていくことになる

結果、表と裏で動いていた冒険者達が1年後、闇派閥イッイルスに巻き込まれる大事件に繋がってしまふ

結果として、ベル・クラネルは『英雄』にはならなかった

誰かが彼を『英雄』と呼ぶことはあれど、彼を『英雄』とする事は無い

彼はその後の迷宮都市オラリオを「ベル・クラネル」として見守っていくのだろう

そう、これは英雄を目指す少年の物語ではない

『英雄』をめざした少年の、『英雄』のための神聖譚

.....

「お前も色々苦労してきたんだな。」

「ははは、失望しました？」

結局、僕はフィルヴィスさんに掻い摘みながら話すことになった

「話を切り出したのは私だ。振ってにおいて勝手に失望するほどエルフとして墮ちたつもりも無い。」

「そうですね、僕としてもフィルヴィスさんに聞いていただいたら気持ちが悪くなったような気がします。」

「そうだな。私の目にもお前の顔がどこか柔らかくなったように見える。」

「昨日も同じこと言われました。」

「お前を見ていると昔の私を見ているようでちよつとな。」

「あの後も色々ありましたので・・嬉しいことも悲しいことも。」

「・・・そうだな。」

冷めた飲み物を無理やり喉に通し、1つ息を吐く

思い返せば、ここに来てからというものの、ちゃんとした休みが取れてない
今度の休みは少し街歩きに費やそうかな

・
・
・

「すごく騒がしいですね。」

「ああ。何かあったのか？」

迷宮の中とはいえ、冒険者たちの街、^{ダンジョン}喧騒が絶えないのはいつも通りなのだが、今回だけは様相が変わっていた

いつものような活気と怒号の飛び交うリヴィラでは無い
どこかどんよりしたものを感じられる重い空気

「何かあったんですか？」

「殺しだよ殺し！誰かがヴィリーの宿でやりやがったんだ！」

「ええ!?!そ、それで犯人とかの目星とかって・・・」

「殺されたやつが女と一緒に入ったのを見たらしい。そいつがクロで間違いねえんだが。フードで誰も顔が分からないらしい。お前さんがいるならまず心配いらねえが、

何があるか分からねえからな。」

いくら無法地帯とも言えるリヴィラでも、殺人は許されぬ禁忌
冒険者が殺された真実は瞬く間に広がっていくはずだ
そして躍起になって犯人探しに駆り出すはず

「心に留めておきます。」

「じゃあな。」

「はい、また。」

僕たちの本来の目的は27階層の調査

本当なら、この場を立ち去って降りていく必要が有るんだけど……

「……この事件にも首を突っ込むつもりか？」

「犯人探しは彼らに任せるべきでしょう。ただ今回の事件、僕が追っている27階層の件と無関係とは思えなくて・・・」

「乗りかかった船という訳ではないが、私も最後まで付き合おう。ただな・・・」

フィルヴィスさんはここまで溜めて、少し遠くの空を見つめる

「今回の件は大分長丁場になりそうな気がする。」

「ええ、僕も同意見です。」

天井を覆うクリスタルの光が一際妖しく輝いたような気がした

幕間 小さな英雄

〔ダイダロス通り〕

迷宮都市には文字通り一迷宮が存在する

1番の目玉とも呼ぶべき摩天楼施設の地下に存在する迷宮のほかにあと一つ

円形に形成されたオラリオの南南東第3区画に位置し、度重なる区画整理によって狂った広域住宅地

迷宮街の異名を持つほど複雑に入り組んだこの道は案内印はあれど、無視してしまうと冒険者でも迷うほどの複雑怪奇

主に貧民層の人達が住んでいる

そのほとんどが冒険者に含まれない人達である

数日前、ここは戦場と化していた

何者かによつて地上で暴れたシルバーバックが暴れだし、この通りに迷い込む形で意図せずともここでlvslの戦闘が起こってしまった

シルバーバックの出没階層は11階層から

レベル1でも到達できる階層域とはいえ、片や恩恵フェルナを受けてから半月の駆け出し冒険者

野に放たれた怪物モンスターに理性など存在しない

く
ただ、本能に従うままに猛進して行き、取り憑かれたように少年たちを追いかけていく

彼らはダイダロス通りの行き止まりまで追い込まれる

目の前に立ちはだかるは圧倒的格上のモンスター

退路は絶たれた

無謀にも立ち上がるか or ひれ伏し立ちすくむか

そして、彼は1人ナイフを獲物に立ち上がる

自分の背格好の3倍はあろう体格差と圧倒的な実力差

圧倒的強者に立ち向かう彼を誰かはきつと嘲るだろう

無謀だと鼻で笑い、見下すだろう

それでも、勝利の女神とは時に残酷で、時に気まぐれだ

ジャイアントキリング
番狂わせなど、いくらでも起こりうる

誰かがこう言った『人は守るものがあるから強く立ち向かっていく

はたまた誰かはこうも言った『人は守るものがあるからこそ弱くなる』のだと

小さな女神のために彼は1人立ち向かっていく

さあ、ちつぽけな英雄よ
????????????

武器を取れ、その瞳眼に闘志を宿せ

舞台戦場は整った

さあ、刮目しろ

これは偉大なる英雄譚の1部に過ぎない

それでも、これは後にも語り継がれる1頁なのだ

さあさお立ち会い、彼の勇姿を目に焼き付けろ

．．．．

シルバーバックは白い大猿の怪物モンスターである

攻撃時はその巨軀をいかなく發揮してくる

その巨軀故に小回りは効かない

狭きダイダロス通りと言えど、レベルーの彼が躲す余裕派ある

標的目掛けて飛んでくる腕を足で躲しながら反撃の好機チャンスを狙う

二三度躲し、シルバーバックと正面に回って相対する

大振りに振りかぶったシルバーバックに狙いを定め、ナイフを構え大猿の懐に飛び込
む

狙うは奴の急所

ダンジョン産のモンスターには共通して心臓部に核が存在する

その魔石を破壊すればどんなモンスターであろうと理論上では倒すことが出来る

そして、彼の刺したナイフは見事シルバーバックの胸へと突き刺さり

シルバーバックは霧散する

そう、彼は無事番狂^{ジャイアントキリン}わせを成し遂げたのだ

その後、ダイダロス通りで一部始終を見ていた人達の中で時の人となっていた

・・・

「ごめんね、リユ。お買い物に付き合わせちゃって。」

「いえ、今日は非番でしたので。それと怪物^{モンスターファイリア}祭の時のお礼もまだでしたので。」

「あ、あれは冒険者さんが頑張ってくれたので・・・」

「そうですね、後々彼らにも改めて謝礼をしなければなりませんね。」

建ち並ぶ住宅の影で朝でもほの暗い雰囲気^霧の路地裏を買い物袋を持った2人の女性が歩いていた

「アリーゼ達も捜していますが、白い髪の男性だけでは取っ掛りも掴めないそうで……
せめて所属ファミリアが分かれば良いのですが。」

「ごめんね、私も聞いてないの。特徴は、そうね……ベルさんにそっくりだったかな。」
「クラネルさんに。ですか？」

「白い髪で兎のような見た目。赤い瞳。ベルさんをそのままちぢめた感じで……」
「その方なら、昨夜見かけたかもしれません。」

「ホントに？」

「ええ。昨夜同胞に襲われていたところを助けたのですが、その方かもしれません。」

そんな2人の合間を縫って1人のフードを被った小人族バルウムが通っていく

「待ちなさい。そこのパールウム。」

すれ違いざま、リユールが小人族パールウムを呼び止める

「袖にしまったナイフ。それを見せて欲しい。」

「リユール？」

「知人の持ち物に似ていたので確認したい。」

歩みは止めるものの、互いに振り返ることは無い

「生憎ですが、これは私のものです。あなたの…勘違い、でしょう。」

「抜かしなさい、神聖文字ヒエログリフの刻まれた武器の持ち主など、私は一人しか知らない！」

リユーによって放たれたコインは細路地を抜けようとした小人族バルウムに直撃し、崩れ落ちる

それでも歩みをとめない彼女はナイフを落とすも拾う暇もなく開けた道へと逃げるように駆けていく

「リリ!？」

路地から出たところで左手から出てきた1人のヒューマンとぶつかって倒れ込んでしまう

「シルさん！それにあなたは確か昨日の・・・」

そこに遅れて2人が駆け寄る

「あ、そうだ！2人とも、上から下まで真っ黒なナイフを見かけませんでしたか!？」

慌てて立ち上がり、あたふたした声で探していたナイフの特徴を読み上げる

「これの事ですか？」

「ありがとうございます！」

リユーが出したナイフを受け取って感謝を告げる

「拾っていただきありがとうございます。これ、どこで拾いましたか？」

「拾った、というより1人の小人族バルウムが所持していました。」

「小人族バルウム？」

「……いえ。多分私の見間違いでしょう。」

「？」

「ところでなのですが、貴方の名前と所属ファミリアを伺ってもよろしいでしょうか？」

「い、いえそれは構わないですが。どうしてですか？」

「怪物祭モンスターフェアの時に逃げ出したシルババックに襲われたと聞きました。その事件についての謝罪をと思ひまして。」

「いえいえ！とんでもないです謝罪だなんてそんな！あの事件は貴方のせいじゃないですし！」

「分かりました。」

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね。」

少し興奮気味で折れていた背筋を伸ばし

「【ヘステイア・ファミリア】所属、アル・クラネルです！」

.....

「良かったのリュー？あのままで。」

結局、小人族は立ち去っており、お互いに2、3言話したあと、解散という形となつた

「神の言葉に『疑わしきは罰せず』という言葉があります。例え限りなくグレーでも、グレーのうちは手を出してはならないと。そうでなくても私はいつもやりすぎてしま

う。」

「な、なんですかシル。突然笑って。」

「リューも結構変わったなあって。」

「確かに自分でもそう感じることはありません。特に7年前の巨悪との日々には比べると色々考えさせられる場面は多かったですからでしょうか。それより先程のアル・クラネルという少年。」

「クラネルって事はベルさんの弟さんかな？」

「そういったことは聞いた事は無いのですか？」

「確かにベルさんから家族について聞いたことないかも。」

「そうですか・・・」

EP14 襲撃

「つつー訳で……女は全員身体検査だッ！脱げエーッ！」

「奴らは一体何をしているのだ……」

「ははは、多分犯人探し……だと思おう。」

改めて下に潜るためにリヴィラを離れようとした所、入れ替わる形で「ロキ・ファミリア」が入ってきた

何より驚いたのはその錚々たるメンツで、このまま階層主でも倒しに行くのかと思うほどのパーティーだった

「ロキ・ファミリア」の幹部がほとんどであり、その中には団長であるフィンさんまでいる始末

ここに至るまで蹂躪されてきたであろうモンスターに同情まで抱くかもしれない・

事件のあった宿屋から出てきた一行はます、リヴィラに滞在していた冒険者を集め身体検査を呼びかけている状態で

「ボールスさんの声に男性冒険者が歓喜し、女性冒険者達が怒りの声を挙げている。冒険者達が集ったが故に出来た混沌たる惨状な現状に僕達は遠巻きで見ることしか出来ない

何より、彼女にそういった話はNGだということも知ってる

「あれも犯人探しか？」

「ソ、ソウナンジヤナイカナ。」

なんか向こうで女性冒険者に吹き飛ばされてるけど僕は知らない

・
・
・

「あれ？」

ステージの弾き飛ばされている冒険者たちの横に立っていた金髪のヒューマンの女性がステージから離れ、駆け出していた

そしてその後を追うようにエルフの女の子もステージを離れていく

「何かあったか？」

「わかんない。ここからじゃ丁度影になってて・・・」

「追いかけるか？」

「【ロキ・ファミリア】だから大丈夫・・・だと思う。闇派閥イグニスの人じゃないはずだし。何より突然話しかけられて逆に勘違いされる方が大変だから。」

彼女たちが見つけたモノが何かはわかんないし、今回の件と無関係とは思えない

けど、今出ていくのは違う。そんな気がする

「あの人・・・」

人混みから外れた街の一角に捉えた人が少し気になっていた

・・・

「なるほど、そういう事情があつたんですね・・・」

朝があるならば必ず日は暮れ、夜は訪れる

クリスタルに覆われた18階層にも夜は訪れる

クリスタルから届けられていた光も消え去り、闇に包まれる

犯人探しの最中に人だからから抜け出した冒険者を追つて飛び出したアイズとそれを追いかけるレフイーヤに事情を説明している犬シアンスローブ人だった

「安心してください！私が責任をもって預かります！」

ルルネ・ルーイと名乗った少女が本来渡す予定だったモノ

球体で、中には胎児のようなモンスターと液体が入っている
言うなれば、それは母胎だった

「ところでレフィーヤ達に聞きたいんだけどさ。ベル・クラネルって冒険者知らないか？」

「ベル・クラネルさん？きいたことありませんね・アイズさんは何か知ってますか？」

「どこかで聞いた・・・かも。」

「この依頼を受けた時にヘルメス様から名前と特徴は聞いたんだ。困った時は頼るといいって。」

「ヘルメス様がそこまで仰られるならきつと 凄い方なんでしょうけど・・・
団長なら何か知ってますかね？」

「白い髪にうさぎのような見た目で目は赤いんだってさ。」

「(アイズさんが知っている人物でしょうか・・・？でもでも、そのような噂は聞いたことないし・・・それに名前を聞いた時も)」

アイズは1人の知己を思い浮かべていた

奇しくも合致した見た目をしている1人のヒューマンを

「アスファイに聞いてもあまりいい顔はしなくてさー。ただ一言『悪い人ではありません。必ず力になってくれるはずです。』の一点張り。ヘルメス様も詳しくは教えてくれないし。」

「確かにそれだと不安ですね・・・せめてどこのファミリアかさえ分かれば少しは安心な

のですけど。」

「どこ所属かも教えてくれなくてさー。というより避けてる？みたいな。」

「それだけ聞くと怪しいこと極まりないですね・ヘルメス様が大丈夫だとおっしゃるとはいえどうも臭いです！事件の香りがプンプンします！」

「そ、そうかな？」

「そうです！きつとそうに違いありません！」

「うわあああああああ」

「今の悲鳴は・・・!?」

「街の方からです！」

夜の帳とともにもたらされた静寂を破つて轟いた悲鳴によりリヴィイラに再び喧騒が舞い戻る

「グオアオアアアアアア！」

共に余計な怪物モンスターを引連れて

・
・
・

「クラネル！今の咆哮は?！」

「うん。確実に怪物モンスター祭ファイリアの時に襲撃してきたモンスターで間違いない。」

恐らくは闇派閥イヴィルスが放つた食人花ワイオラスによって蹂躪ワイオラスされてる

リヴィイラは伊達にダンジョン内に造られていない

伊達リヴィイラに同業者リヴィイラの街と銘打っている訳じゃない

彼らとて立派な冒険者

モンスターの襲撃に怯むような人達は居ないはず

だからって、この惨状を見逃す訳にもいかない

あの女性のこととは気になるけど・・・

今はこつちが優先だよ

「フィルヴィスさん！手伝って貰えませんか！」

・・・

「これで一段落って所か。」

「はい。恐らくですが目に付いた食人花^{ワイオラス}は倒したはずですよ。」

「それなら後向かうべきはあそこか。」

「はい。ですが、もうここから降りてしまった可能性が高いでしょうが・・・」

最後に見かけてから数時間は経過してる

彼女の目的は分からないけど、もしこの襲撃が彼女が引き起こしたのなら長居する
とは避けるはず

とはいえ、彼女が完全に消えるまでは第2波が来る可能性も考えられる

なるべく犠牲者を出さないように動かなきゃダメだ

「こちらも片付いているようだね。」

「フィ、フィンさん！」

「君とこんな形で再会出来るとはね。」

「僕としては余り会いたくなかったかなあ・っつて。」

「それは手厳しいね。」

互いに乾いた笑いが零れていく

別にフィンさんが嫌いというわけじゃない

フィンさんのことは心から尊敬してる

彼がいてくれたから、僕もここにいられる

あの時、彼との間に一つだけ大きな契りを交わしてる

正直に言うとなフィンさんがこれをどう思っているかは分からない

今でこそ「ベル・クラネル」という冒険者自体知ってる人の方が少ないくらいだけど
当時、あの暗黒期の中で彼はどう感じていたのだろうか

「色々と裏で活躍しているそうじゃないか。実際に見たわけじゃないけど僕の団員も何人かお世話になったそうだね。改めて僕からも礼を言わせてくれ。」

「い、いえ！そんな僕なんて何も。」

お礼を言われるのはまだ小っ恥ずかしいところがある

それに、どれだけの人を救っても取りこぼしてきた命は帰ってこない

「君はあの日から変わってなさそうで安心したよ。」

「僕も、どこかフィンさんと話せた事で少し吹っ切れた。そんな気がします。」

.....

『イカイルス闇派閥との抗争を想定する中で、いくつか最悪の盤面を想定していたけど。君の介入は想定してきた中で一番外れていて欲しかった。』

7年前、『大抗争』の最中流れがオラリオ側に傾いた事件が起きた

イグイルス
闇派閥の戦力は半分位上が削がれ、途絶えることのなかった血で血を洗うような衝突の
なかつた事件

全ては名も知らぬ1人の何者かによつて引き起こされる

『どうか、これから先起こる全ての出来事を黙って見守り続けてくれませんか』

小さくも大きく動かされた彼らの会話を知るものは誰もいない

・
・
・

・スキル

シリアルキラー
【殺人兎】

・対峙する敵が人型の場合能力上昇

・対峙する敵の想いの丈により上昇値大幅増減

EP15 英雄が為に鐘は鳴る

「オオオオオッ！」

モンスターの咆哮が天を衝き、僕たちのいる場所より後方で女体型のモンスターが産声を挙げる

距離のせいで詳しい容貌は掴めないけど、あれが異質であることは容易に想像が着いた

「なにあれ!？」

「つたく、ようやくあらかた片付けたつてのに・・・！」

「どこから現れた…と言いたい所だが、始末する方が先決だな。」

「ああ、そうだね。」

こんな異常事態イレギュラーの渦中でも冷静さを保てていられるのはやはり最大派閥であり上級冒険者であるがゆえの特権つてもものだろうか

かくいう僕もどこかで好奇心が抑えられないのは元冒険者が故ということなのかな？

「君は後悔してないかい？」

「してないと言えば嘘になるかもしれませんが。あの日、僕が起こした行動が正しかったとも間違っていたかなんて考えたことはありませんし、教えて欲しいとも思いません。それでも、僕はこの選択ものがたりに迷いはありません。」

「君からその応えが聞けて安心したよ。愚問だと笑われるかも知れないけど一緒に戦ってくれるかい？」

あの時とはまったく逆の問いかけ

あの時とは環境も、世界も、多くが変化している

それでも、誰かに頼られるというのはここまでむず痒いものなんだろうか

されど、共に戦おうではないか

『英雄』達が産まれるこの場所に大鐘楼は鳴らされる

オラリオ

持たざる者から、持つべき英雄達へ全ての祝福を

「グオアオアアアアア」

僕たちのいるわずか後方、最初に襲撃してきた食人花の咆哮が木霊する
闇派閥の差し金か、新たに増援として投入されたんだと思う

ただ、僕のやるべきことは変わらない

「数分でいい！リヴェリアさん達が攻撃する時間さえ稼げれば！」

「【我は汝を救おう】【生誕を祝え、祝福されし我が宝よ】

【原罪^{つみ}を赦せ、万物に浄化の輝きを】【鳴らせ、鐘の音を】

【愛を持たぬ悲しき者に愛情の慈悲を】【さあ、心を持って。矢を捨てよ】

【汝の誓いを今果たさん】【ゾオアス・アンジエラス】！」

18階層全域に大鐘楼の音が響き渡る

暗闇から刹那、フィールドは光に包まれる

大鐘楼がもたらすは勇氣

光が奪うは闘志

怪物は地に伏し、先まで感じていた緊張感すらをも失っている

打って変わり、冒険者たちは武器を取り、より闘志を燃やし力の湧き上がりを感じる
鐘はなる、数多の英雄たちの欠片のためにその音を響かせる

・
・
・

「こ、これは一体何が起きてるんですか！」

刹那のことでした

ハシャーナさんを殺した殺人鬼とアイズさんに助太刀も出来ず、ただひたすら新種の
モンスターから逃げることにしか出来ないでいると、突然鐘の音が響いてきて
直後に光に包まれたと思ってたらしいの間にか殺人鬼の人が倒れてて・・・

「ア、アイズさん！やりましたね！」

「・・・私じゃない。」

モンスターから逃げることに必死だった私とルルネさんはもちろん不可能ですし、誰か他の人が乱入してきた様子もありません

考えられるとしたらアイズさんが倒した以外考えられません！

でも、その肝心のアイズさんも驚いて何が起こっているのかも分からない様子ですし・・・

もしアイズさんじゃないとしたら考えられるのは先程の鐘の音と光・・・

誰かの魔法でしょうか？いえでもそんな魔法は聞いたことがありますし

リヴェリア様なら何かご存知なのでしょうか・・・

「チツ・・・アイツの介入は想定外だ。惜しいが、お前とはいずれその時が来るだろう。」

そう言い残すと、彼女はおぼつかない足取りのまま崖へと身を投じてしまいました

「追わないと！」

「待って！追いかけてちゃダメ。」

アイズさんの声で何とか踏みとどまることが出来ました

「そつ、そうですよね！深追いは危険ですよね・・・すみません。」

「それより今はあのモンスターが先。」

先程から暴れていたはずのモンスターの音が聞こえなくなってる

「やれやれ、派手にやってくれたじゃないか。」

団長とリヴェリア様が来られた

「とりあえず状況を説明してくれるかい？」

「先程までハシャーナさんを殺した殺人鬼と思われる女性がいて戦っていたんです。と言っても、私じやまるで歯がたちませんでした。アイズさんと同等かそれ以上の実力を持つてると思います。」

「そうか。それで今そいつはどこに。」

「あの光が消えた直後、まるで人が変わったように逃げていきました。詳しい行先は分かりませんが、その崖を飛び降りていきました。」

「そうか…よく頑張ったな。」

「い、いえ！私なんてほとんど傍観しか出来ませんでしたので・・・」

一呼吸置いて、リヴェリア様にあの魔法について聞いてみることにしましょう

「それでリヴェリア様、質問があるのですが。」

「大体の予想はついている。大方あの魔法についてなのだろう？」

「は、はい。今まであのような魔法は見たことありませんし、何よりあの光から色々に変化が多すぎます！」

殺人鬼が去ったのも、モンスター達が急に大人しくなったのも、あの不思議な光が出現したあとの事だった

私でもアイズさんでもないなら一番の要因として考えられるのはあの光

リヴェリア様には遠く及びませんが、魔法の知識はある方だと思っておりますが、あのよ
うな魔法は見たことがありません

「・・・そうだな、お前たちは知らないんだったな。」

「そうだね、なんて説明したらいいかな。」

団長もリヴェリア様もあまり浮かない表情をしてる

もしかしたら私聞いちゃいけないこと聞いちゃった!?

「す、すみません！野暮な事聞いちゃって！」

「いや、いいんだ。いずれは団員達に伝える必要があるって考えてたからね。」

「あの魔法は昔、とある最大ファミリアの1つの眷属が使用していた魔法だったんだ。と言っても、彼女は末端。実力は低かった。それでも、彼女は誰からも愛されていた。まあ、もう死んでしまっているがな。」

「え？じゃ、じゃああの魔法は一体誰が・・・」

「おっと、敵は悠長には待ってくれないみたいだ。」

団長の言葉の通り、先程まで戦意喪失していたモンスターはまだ状況が掴めていない

のか狼狽えながらも臨戦態勢に入っている

「レフイーヤ。以前行った連携を覚えているよな？あれをやるぞ！」

「わ、わかりました！」

今はこの現状を打破するのが先決、詳しいことはホームに戻ってから考えることにしましょう

気を取り直し杖を持ち、詠唱を始める

「【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を卷け】」

魔力に反応したモンスターがリヴェリア様へと向かっていく

「【閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の・・・】」

後は「ロキ・ファミア」に託したのは僕だけど、やっぱりレフィーヤさん達の魔法を見ているとどこかしら悲しく感じてきちゃう

「我々からしたらお前も大概だと思っぞベル・クラネル。」

「そ、そんな事ないですよ！お義母さんに比べたら全然ですし・・・」

「いやそれは【静寂】が規格外なだけだ。まともに比べるだけ虚しくなるだけだ。」

「ソ、ソウデスネ。」

後から出てきた食人花もテイオナさん達によって片付けられ

18階層によりやく平穏が訪れた

「さてと、だいぶ遅れちゃったけど本来の目的を達成しないと。」

僕の本来の目的は27階層

色々あつて足止めをくらつてしまったけど僕は進まなきゃいけない

「すまないが、主神から呼ばれてしまつてな。私は1度地上に戻るこゝなつた。」

「い、いえ！そもそも引き止めたのは僕ですし。ディオニユス様のご伝達であれば引き止める訳にも行きません。こちらこそありがとうございます。」

と言ひ残して僕は、19階層へ続く道へと進んで行つた

幕間 ギルド職員の憂鬱

「アル君が18階層に!？」

「そうなの!18階層で殺人事件が起こった時にたまたま居合わせた冒険者が居て!その子が可愛い子を見たってはいやいで、どんな子なのか気になって聞いたらさ!雪のような白髪の兎みたいな子だって!弟くんそっくりじゃん!」

「いやいやいや!流石にあの子でも18階層なんて流石に信じられないかなあ。」

「でもさでもさ、うさぎみたいな見た目の冒険者って・・・」

白い髪をした兎のような冒険者は少なくとも私は1人しか知らない

それでもオラリオという長い括りで見れば合致する冒険者はいると思う

それでも、今現状冒険者登録されてる方達の中で知ってる中では1人だけ

「アル君……だよね。」

「確かに弟くん好奇心旺盛というか、危なっかしい所はあるけどエイナの言うことはちゃんと守ってるもんね。そもそもレベル1だと18階層どころか10階層に辿り着けるだけでも凄いもん！」

「そうだね……そうだと信じたい。冒険者たちを信じることもギルドの仕事だもんね。」

ギルドは冒険者たちに生き残るための知識は与えられても、行動をギチギチに縛ることとはできない

死んじゃう時は第1級冒険者でも駆け出しの見習い冒険者でも一瞬だから

『冒険者は冒険しちやダメ』

これがエイナの信念だった

どんなにスパルタだと言われても、自分のやり方を変えるつもりは無かった

『冒険者には情を移さない方がいい』

昔、上司から伝えられた言葉だった

冒険者というのは常に死と隣り合わせ

昨日まで馬鹿騒ぎして酒を酌み交わした仲の友でさえ、明日には居ないことなんてよく聞く話だった

「それにさ、弟くんにはサポーターも付いたんだからさー！」

「うん、そうだね。」

そのサポーターの子が悩みの種の1つだということは秘密にしよう
【ソーマ・ファミリア】とは常に喧騒が絶えなかった

私の強い人が多い冒険者とギルド間での対立は日常茶飯事

中でもほとんどを占めるのが【ソーマ・ファミリア】の眷属だった

「そこまで気になるんだったら弟くんに直接聞けばいいじゃん！今日も出かけたんだよね？ダンジョン。」

「でもなー・・・間違ってたら失礼というか・・・」

「そう？あの子そういうこと気にしなさそうじゃない？」

「うーん・・・分かった、それとなく聞いてみることにする。」

「そうそう！冒険者との隠し事は作らないのが一番だつて！」

「ミイシヤはオープンすぎだと思っけどね・・・」

同僚であり学区時代からの友人に少しだけ感謝を告げてまた、各々の仕事へと戻って行った

．．．

「えつと．．．クラネル氏ですか？」

私は今、何故かヴァレンシユタイン氏の相談を受けている

聞けばアル君に用があるそうで、それなのにせっかく会えても数秒後には逃げられてしまい、まともに話も出来ないのだとか

「(多分あのスキルのせいなんだけど、流石に他派閥のヴァレンシユタイン氏に教える訳にもいかないし．．．)」

「逃げられないためには．．．どうしたら。」

す、すごい落ち込んで．．．

お、教えてあげたい。アル君が逃げているわけじゃないと教えてあげたい！

「理由は了解しました。ですが、クラネル氏が来られた際にこちらから頼んでみます。」

「ありがとうございます……ございます。」

パアアアと効果音でもつきそうなほど雰囲気明るくなった気がする

「アル君？」

ふと、ギルドの受付の方に目を向けるとそこには先まで話題に挙がっていた彼だった

こちらを見留めるが早いか、そそくさと出ていこうとする彼

そして流石第一級冒険者と言うべきか、彼を足止めするヴァレンシュタイン氏

兎にも角にも、これでヴァレンシュタイン氏の相談も解決し、一件落着となったわけだけ……

「一体なんの用で来たんだろ？」

自らの目的も忘れ、アルの目的も分からぬまま、戻っていくエイナであった

EP16 豊饒の女主人

お義母さん達は、今の僕を見てどう思うだろうか、

酷く落胆し、嘲笑^{わら}ってくれるかな

それとも、笑って見守ってくれるのかな

誰よりも讃えられるべき英雄たちは『悪』に身を染めた

数多の希望のために礎を築くための礎となり、『踏み台』にもなった2人を僕はいつまでも心思い続けると思う

あの日、僕がお義母さん達と最後に言葉を交わしたあの日彼女たちは僕に『最後の英雄』になることを望んでくれた

今思えば、あの抗争に僕を巻き込まない為の配慮だったのかもしれない
それでも、僕は裏切ってしまった

彼らを止めるためでもなく、この抗争を止めるためでもなく、エレボス様の思惑にノることにした

あの日、僕のファミリアが解散したあの日、お義母さん達が何を感じ、どう考えたのかはわかんない

どうしてお義母さん達が『英雄』にこだわるのかも、理解出来ないと思う

それでも、お義母さん達が望んだのなら僕はその思いを引き継ごう

将来、誰かの笑顔を守れるなら道化にだってなって見せよう

かつての『英雄』が、1人のヒロイン。否、多くの笑顔のために道化として振舞ったように

僕は、みんなの笑顔のために彼らの前に立ちほだかろう

彼らが待ち望んだ『最後の英雄』の誕生を見届け、この身を礎とするために僕は、『絶対悪』にも身を落とすだろう

これは、僕だけの物語だ

あの日、あの時、僕は本来の目的を忘れ

長く、果てしない茨の道を進むことにしたんだ

「いつか、数多の英雄の前に立ち是因为からん事を。」

背中に刻まれたゼウスの血が深く、淡く光った

そんな気がした

・・・

「さあ！ネタは上がってるニヤ！いい加減吐くのニヤ！」

「だからなんの事ですか!?!」

ダンジョンから戻ってきた僕を迎えたのはアーニヤさんによる質問^{尋問}だった
てかつ！なんでアーニヤさんはそんな憲兵のような真似事してるんですか！
いや！本当にしてるかは分かりませんが！

「あ、あのー？」

「ふっふっふ、まあそう焦るな少年よ。まあこれでも食べて落ち着くニヤ。」

なんでクロエさんまでノリノリなんですか!?!それとそのじゃが丸くんどこから取り
出したんです!?

いや、でも2人はたまに『名探偵』とかにハマってるって聞いたような・・・

「さあ！さっさと吐いて楽になるのニヤ！」

「とまあ、アホ猫2人は置いといて。ベルって弟君本当に居ないの?！」

「だから何度も言ってるじゃないですか！僕は一人っ子ですって！」

「うーん、こういう時にシルが居たらー！発なんだけどねえ・・・」

「そうニヤ、こういう時の少年の口は超硬金属アダマンタイト並に堅いのニヤ。」

「いやそれはちよつと使い方違うけどね。」

「あ、あのー？僕もう戻っても・・・」

「ダメにや！吐くもん吐くまで許さないニヤ！」

「えー・・・そもそもその僕に弟がいるかもって誰に聞いたんですか。」

「シルからニヤ！」

いやそんな堂々と言われても・・・

「まあ、小動物をいたぶる趣味はないし私は辞退するよ。後はご自由にく。」

ちよ、今聞き捨てならない言葉が聞こえたんですが!?

「そうニヤ、明日寝坊すると怖いしアホは放っておいて寝るとするかにや。」

いやいや、クロエさんもさつきまでノリノリでしたよね!?

そうして、この部屋に僕だけ残して他のみんなは立ち去って行った

「見間違いないやなかったんだ・・・」

1人、取り残された部屋でパタンと机に突っ伏した

頭の上で照らす魔石灯が揺れている

「やっぱり、こうなる運命だったんだ。」

動き始めた歯車は止まらない

例えばどんなに壊れかけの歯車だって、1度回り始めればその回転は止まらない

彼の『英雄』への道はもう決まってる

そのために僕はこの茨の道を進むことを決めたから

「神々よ」笑覧あれ！これが「アル・クラネル」の進む物語だ！」

ここから先は僕が綴る冒険譚じゃない

たった1人の、『英雄の欠片』が つむぎ出す

英雄譚だ

・
・
・

「そういえばさ、ずっと気になってたんだけど。」

各々の寝室に戻る際、ルノアが立ち止まってこう呟いた

「最初はアーニヤとミア母さんとシルの3人でやってたわけでしょ？」

「そうニヤ。まーシルはあの時にいつの間にか入ってたから感覚はにやいけどニヤ。」

「アホーニヤのことだから忘れてるだけでしょ。」

「ニヤ!? ミヤーはアホーニヤじゃないにや!」

「はいはい、話が進まないから。んで、その後にベル達が入って私たちが最後って感じで入ってきたわけじゃん? の割には部屋数的に余裕があるなーって。」

「言われてみればそうニヤ。不本意とはいえミア母ちゃんに無理やり入れられた流れ的

にはやけに高待遇だとは思ってたニヤ。」

『豊饒の女主人』の従業員は8人、店内自体が結構大きいとはいえ従業員たちの生活場所も兼ねているためそのスペースは結構カツカツなのだ

暗黒期から続いてきた『豊饒の女主人』のスタートは2人

当時の大きさがどれ位だったかはさておいても、8人分の寢床確保は難しいのでは無いかと彼女たちは括っていた

それにも関わらず、部屋一つ一つのスペースは狭いものの、一人一人のスペースは確保されていた

「ふっふっふ、おミヤーらは知らないのも仕方ないにや。それにはダンジョンよりも深い深い諷刺があつてにや?」

「コラあんた達!何時まで起きてんだい!明日も早いんだよ!さつさと寝な!」

「は、はい!」

E P . 17 パーティ

「フェルズさん？」

【豊穣の女主人】に僕の寝室として宛てがわれた一室。ベッドと寝間着や私服、仕事服を仕舞っているクローゼット。必要最低限の家具のみを揃えた殺風景な室内。

いつこの場に帰ることが出来なくなるか分からない以上は部屋はできるだけ片付いている方が何かと便利だった。

「やはり君にはバレてしまうか。」

灯りの着いていない月の光のみが差し込む片隅。そこから感じる何者かの気配からある存在の名前を呼べば、そこから黒衣の人物が現れる。

「何か用ですか？^{クエスト}依頼は確か明日からですよね？」

目の前の人物はとある神様からの依頼を受けるための伝達役を担っている。真つ黒なローブに両手には複雑な紋様の手袋^{グローブ}。色々と気になる点は尽きないものの、深く踏み込む気は殊更ない。

「その前にまず感謝と謝罪をさせて欲しい。18階層の件、こちらとしても想定外の事件とはいえ、早急な対応と尽力感謝する。それで、本題なのだが・・・その依頼^{クエスト}について頼みがある。」

「・・・？」

フェルズさんは表情どころか顔を確認することさえ出来ない。いや、骨なのだから見えたところで何う顔さええないのですけど。

「本来であれば、『ヘルメス・ファミリア』との合流を考えていたのだが、予定が狂った。君には予定より早く調査に出て欲しい。」

「具体的には。」

予定の急遽変更は依頼自体に大きく関わる可能性がある。何によって狂わされて、何が問題なのか。確認の有無は後々響いてくるのだ。

「想定以上に敵側の動きが激しいのが1つ。」

「・・・あと1つは？」

「どうも嫌な予感がする。君の実力を疑っている訳では無いが、できるだけ先手を撃っておきたい。君も知ってると思うが、『リヴィラの街』を襲撃した人物の可能性が高い。」

「・・・僕、その人物に会ってないんですけど。」

確かに僕のスキルの関係で闇派閥イヴァイルスに強く出れるのも確か。元とはいえ、「ゼウス・ファミアリア」の一員だった僕はオラリオにとつても彼らに対する対抗策としても置いておきたいんだと思う。でも、このスキルには大きな欠点がある。

「それに、「ヘルメス・ファミリア」の方はどうするんですか？あちらには誰か入るんですか？」

「その点は大丈夫だ。ある程度目星は着いている。「ヘルメス・ファミリア」にも私から君には負担をかけることになるだろう。」

「元より闇派閥との対戦を申したのは僕です。」

「武運を祈る。」

...

18階層に作られたリヴィラの街の北部、長大な水晶の谷間が形成された
クラスターストリート
 郡晶街路付近の裏道。ゴツゴツとした岩壁に口を開けた洞窟に『黄金の穴蔵亭』という酒場はある。

「あの……これはのこと、なんですけど。」

酒場で黒衣の人物が指す協力者と邂逅を果たしたアイズ。無事合流できた直後始まった内輪もめを鎮めるために声を発する。

「……すいまけん、見苦しいところをお見せしました。依頼内容の確認をしますが、目的は24階層の食料庫。^{バントリー}モンスター大量発生の原因を探り、それを排除する。間違いありませんか？」

「はい。」

「では、次にこちらの戦力を伝えておきます。私を合わせ総勢15名、全て「ヘルメス・ファミリア」の人間です。能力は大半がLv. 3。」

依頼内容の照らし合わせと戦力の確認を進めていく。合同でダンジョンへと潜っていく以上、お互いに背を合わせて戦っていくことになる。

「それでは行きましょうか。短いパーティになると思いますが、どうかよろしく。」

「ちよつと待つてよアスファイ！援軍つてもう一人来るんじゃないか？」

「ああ・・・我々に依頼をしてきたあのローブの人物から彼は先に立ったそうです。それで代わりに【剣姫】を遣わしたそうです。」

「私その他にも頼まれたの？」

「【剣姫】にも話しただろ？【ベル・クラネル】つて奴さ。」

「ルルネ、貴方はまた勝手にペラペラと・・・」

「ご、ごめんでアスファイ！」

「そういうことです。なのでわれわれも出発しましょう。」

. . . .

「お前等、『白巫女』^{マイナデス}とパーティと組んでいるのか？」

アイズ達を追って18階層まで降りてきた即席パーティは情報を得るためにボールスの元を訪れた。ベートによる脅s . . .ではなく質問によって聞き出された情報からアイズは24階層の食料庫に向かったとの推測をした彼らがボールスの元を離れようとした時、ボールスはレフイーヤに声をかけた。

「その2つ名って確かフィルヴィスさんの事ですよね？何か問題があるのですか？」

「ああ . . . いや、そこまで大きな問題じゃねえんだが . . .」

ボールスから声をかけたものの、間が悪そうな顔をする。

「いや、『白巫女』^{マイナデス}がアイツ以外とパーティを組むなんて珍しいと思つてな。」

「ど、どういうことですか？」

「今でこそあの名前で呼ぶやつは少なくなつたが、一時期じゃあ『白巫女』は『死妖精』^{パンシー}なんて呼ばれてた。」

オラリオの外の国の伝説のひとつに、死を告げる妖精としてパンシーが語り継がれる。

伝説ではパンシーは死ぬ人のために涙を流すともされている。だが、死ぬ人の元に死を予告する事の印象が大きいため前述だけが独り歩きしている結果、あまり良くない印象だけが伝わっている。

「い、一体何が……」

「あのエルフとパーティを組んだ連中が1人残らず死んでしまった時期があつたんだ。」

「……っ!?!」

「あいっだけを残して、な。自派閥だろうが他派閥の者だろうが関係ねえ。」

ただ静かに淡々と語り出すボールスにレフィーヤは言葉を失う。

「六年前に起きた、『27階層の悪夢』は知ってるか？」

「は、話くらいなら．．．大勢の冒険者が、亡くなったって。」

「おお、そうだ。あん時はまだ閥派閥の連中が、有力派閥のパーティを27階層でまとめて嵌め殺した。」

曰く、秩序を嫌う者達。

曰く、混沌を望む邪神達に率いられた過激派集団。

ギルドが絶対の根絶を掲げ、多くの「ファミリア」とともに打ち倒した『悪』の使徒。

そんな閥派閥が繰り返してきた数々の悪行の中でも、『27階層の悪夢』は一際凄

惨だったと言われている。

階層中のモンスター、果ては階層主を巻き込んだ敵味方入り乱れての混戦は地獄絵図と化した。ギルド派閥の有力派閥等と闇派閥、双方に多くの犠牲者を出した事件。それが表面上の偽情報フェイクだった。

「フィルヴィス・シャリアはあの事件の数少ない生き残りだ。色んな冒険者がいたが、あんな酷え顔をしたやつは初めて見た。」

「・・・」

「でな、その日からまるで呪われたかのように、あいつが関わったパーティは遅かれ早かれ、くたばつちまうようになったんだ。ただ一人を除いてな。」

「・・・っ!」

「訳あってそいつの名前は出せねえが、一度パーティ全員が無事生還したことが大きく

響いたんだろう。『死妖精』の噂も引いたって訳だ。」

「そ、そうなんですネ。」

「とはいえ一度広まった噂つてのは中々消えるもんじゃねえ。エルフの性質？つてのもあるんだろうが、そいつ以外とパーティーを組むことは少なかった。」

「でっ、でも！ファイルヴィスさんは悪くないですよね！」

「冒険者つーのはいつ死んだつておかしくねえ。昨日まで盃を交わしていた連れが今日うちに死んじまうなんてことは日常茶飯事だ。何よりアイツの強さもまた異常つてこともある。【凶^{ヴァナルガンド}狼】がいるならポツクリ逝くことはねえと思うが、せいぜい気をつけるんだな。」

・
・
・

「全員、止まってください。」

前方の通路にひそむ気配に、アイズを始めとした冒険者達は反応した。ただちにアスファイがパーティの進行をとどめる。

彼女らが注視する先には広い通路内を蠢くモンスターの大量群だった。

「うげえ……」

アイズの隣でルルネが呻いた。ありえないほどの数のモンスターの群れに、他の団員達も顔をひきつらせる。

「……少し妙ですね。」

「ん？そりゃモンスターの大量進なんて、珍しいことだけどさ。」

「それもそうなんですけど……やけに前情報と違いますか？」

「確かに……情報だと通路を埋め尽くすほどの大量だつて聞いていたし。」

「考えられる情報としては……」

「あ、あれは【ヘルセウス万能者】!？」

「ということは【ヘルメス・ファミリア】が来たんだ！良かった！」

アスファイ達の元に、怪我人を数人含めたパーティか駆けつけてくる。

「何があつたんです？」

「き、急にモンスターの大量に襲われて！そうしたら白髪の青年が助けてくれてそのままモンスター共をなぎ払いながら奥に行っちゃまったんだ！加勢してえが俺たちはこのザマだ。頼む！あいつを助けてやってくれ！」

リーダーらしき猫人から事の顛末を聞けば、彼らを助けた冒険者はその先の食料庫へと続く道に進んだという。

「ネリー、彼らの治療をお願いします。とはいえ、この後のことを考えると多く消費することは出来ません。ですから18階層まで戻れる程度の回復になりますが、構いませんね？」

「あ、ああ。こちらとしては願ってもねえ事だ。恩に着る！」

「・・・ひとまず、あのモンスターを処理しましょうか。」

EP18 ベル・クラネル

「レヴィス、侵入者だ。」

赤光に照らされる不気味な大空洞、男の警告がもたらされる。

「モンスターか？」

「いや、冒険者だ。それもたった1人。」

レヴィスの問いに、警告をもたらした男は「やはり来た」と憎々しげに答える。二人の周囲では、ローブに身を包んだ者達がそれぞれ嘲る声を立てている。最初こそ侵入者の存在を危ぶんでいたものの、1人でのこのこ現れた冒険者の愚かさを哀れんでいるのだろう。

「1人だからと高を括るなよ。奴の能力はかの『猛者』にも匹敵する。」

男の言葉にロープの連中は慌ただしく駆けずり回る。

肉壁の1部、月の表面を思わせる蒼白い水膜には、食人花をなぎ払いながら突き進む1人の冒険者が映し出されていた。

「敵は1人だ。お前達だけで何とかしろ。私は興味無い。」

「ぐっ！レヴィス、お前にも説明したはずだぞ！あいつ1人がどれだけ規格外か！奴とまともにやれるアイツも姿を見せない！」

「それがどうした。まさかお前の言う『彼女』から貰った体でも勝てぬとは言うまいな？」

「ちいつ！行くぞお前ら！ありったけの食人花^{ヴィオラス}で押しつぶす！」

男は白いロープに身を包んだ者達を引連れてレヴィスを残してこの大空洞か

ら動き出した。

.....

「私なんかよりずっと美しくて、優しい人です！」

レフィーヤはフィルヴィスにこう言い募った。

フィルヴィスの過去を聞き、彼女自身の思いを聞いた上でのレフィーヤの本心からの言葉だった。

レフィーヤのエルフとしての誇りと、フィルヴィスへの友愛が、理屈では説明できない感情を激発させた。

「なぜそんなことが分かるっ、いい加減なことを言うなっ。私とお前はまだ会って間も無いはずだ。」

怒気を滲ませた声をレフィーヤの鼻っ面に叩きつけるフィルヴィス。

正論という名の反論にレフィーヤはことは詰まらせるも、勢いのまま、反射的

に言い返した。

「くっ、これから一杯見つけていきます!! 貴方のいいところをつ!!」

「・・・」

フィルヴィスはその言葉にしばらくキョトンとするが、直ぐに「くっ」と嘖き出した。

「いや、すまない。あの男と似たような事を恥ずかしげもなく口にする奴が他にもいるとは思わなくてな。」

一度、崩れてしまった硬い表情は戻ることも無く、小鳥が囁くような細い笑い声を零しながら、どこか懐かしそうに昔を思い出していた。

「えっ?! ええええっ?!」

「その男と初めてパーティを組んだのは今回みたいな『即席コンビ』だった。お前も聞いたと思うが、パーティが私を残して全滅しかしていなかった。最初こそ断つたのだが、なし崩し的に組むことになったんだ。」

「凄く良い人なんですネ、その人。」

「良い奴には変わりないんだが……一度懐に入り込むと気が済むまでグイグイと来るやつでな。私が何度『あまり関わるな』と忠告しても『僕なら大丈夫です！』やら『フィルヴィスさんが噂通りの人とは思えません！』などと言い出す始末。あの男は底無しのお人好しなんだ。」

「な、なんか、凄い人なんですネ。でも！フィルヴィスさんがその人の事を大切に思っていることは凄く感じられました！私も負けていられません！」

「お、おい！私は何もそこまで言っていない！あとお前まで目指そうとするな！辞めろ！」

「おい、馬鹿エルフどもつ、さっさと来い！」

ベートの怒声によって、二人の会話は終止符が打たれ。リヴィラを後にしていった。

．．．

「^{バントリ}食料庫ってこんな場所だったっけ．．．？」

塞がれた通路のせいで大量発生したモンスター達をなぎ払いながら奥へ奥へと進んでいき、目的の食料庫までやってきた。．．．のはいいんだけど

記憶に残ってる食料庫の景色と比べてあまりにも異様だった。

広場中央にある大主柱にはやけに見覚えのあるモンスターが絡みついており、天井からは食人花が常に生まれ続けていた。

「まさに巢穴と言うわけか．．．」

ふと食人花が産まれ落ちる壁に目を向ければそこには謎の玉が埋まっている。中は謎の胎児が入っており、これは卵なのだろうかと予測はしてみる。

「やはり食人花^{ワイオラス}だけでは不足なようだな・・・」

「・・・チツ」

「仕事をしろ闇派閥の残党ども。『彼女』を守る礎となれ。」

「言われなくとも。」

食料庫の僕がいる場所から対面に位置している場所に白いローブに身を包んだ集団がこちらに向かってきている。

「大体の予想は着いていたけど、やっぱり黒幕は闇派閥かあ。」

今向かってきている白いローブの人達はほぼ特攻隊と言っていい。タダでは死のうとせず、悪あがきに自爆を仕掛けてくる。言ってしまうと感情の持たない生きる爆弾のようなもの。

だからこそ、僕も非情になれる。

相手を知った上で突っ込んでくると言うなら彼らに僕の魔法は知られていない。なればここからは一方的な殺戮劇シニョ。

「【我は汝を救おう】【生誕を祝え、祝福されし我が宝よ】」

僕は詠唱うたを紡ぎながら、彼らの元にぶつかって行く。【平行詠唱】。この魔法は敵に一切のダメージも与えられない魔法だけど、敵が何人いても効力は一切変わらない。範囲内にいる敵ならば何百人だろうと問答無用で適用される。その代わりマインド消費は激しくなっちゃうけど

「【ゾオアス・アンジュラス】！」

詠唱の完了と共に、食料庫全体に大鐘楼の音が響き渡る。

「な、なんだっ!? 今のは!?!」

「ち、力が!? 力が入らない!」

「く、来るなあアああ!??!」

魔法でまともに回避行動を取れない残党を片っ端からはねていく。

「壊れた連中め、神に縛られる愚者ども……まともに刃を向けることも出来ないとは……
食人花。」

奥の方に見た男が食人花の名を呼ぶ。すると、後方から大量の食人花が姿を表す。残党さえ巻き込んで、一気に叩こうとしたのでしようけど、それは愚策ですよ。

「魔法の残り香に引き寄せられた食人花にとって、糸の切れたマリオネット戦意喪失した死兵はただの餌です。

すみませんが、最大活用させてもらいますよ！」

食人花に食い散らかされる残党を尻目に、僕は男の方に向かった。

・・・

「また分かれ道か・・・アスファイ今度はどっちに？」

「いえ・・・います。」

何度目か分からない分かれ道。ルルネがアスファイに行き先を確認しようとしたとき、その先のふたつの穴から大量の食人花が出てくる。

【剣姫】片方お任せしても？」

「わかりました。」

アスファイがアイズに指示し、もう一方の穴から出てきた食人花を託す。彼女のレベルを考慮した上で最善策だとアスファイが判断したためである。

「ではっ！」

片方をアイズが、もう片方を「ヘルメス・ファミリア」が相手をする形となった。二手にわかれ、アイズが食人花と対峙しようとした

その時だった。

「そちらから出向いてくれるとはな。」

分かれ道の穴の奥から、赤髪の女がこちらに歩いてくる。彼女こそ、18階層でリヴィラを襲った張本人、レヴィスだった。

「本来ならば、分断しなかったところだが……まあいい。お前に会いたがつている奴がいる。来てもらうぞ『アリア』。」

「私は『アリア』じゃない。『アリア』は私のお母さん。」

「世迷い言を抜かすな。『アリア』に子がいる筈がない。」

アイズはすぐさま臨戦態勢になる。あの時とはレベルがひとつ上がった赤髪の女との戦闘。気など一切抜けるわけもない。

「行くぞ。」

.....

アスファイ達は目下の状況に戦慄を覚えていた。

白髪の青年と見られる冒険者が白いフードを被った闇派閥の残党と思しき連中を片っ端から殺していく凄惨な光景を。更にはそこに大量の食人花が次々に残党を食い散らかしていく地獄絵図が目下に完成していたのだ。

「彼は本当に……私たちと同じく冒険者なのですか？」

アスファイ達にも、闇派閥と戦う上で最悪の状態に陥った場合の覚悟はしているつもりだが、あそこまで無情に殺戮できることは出来ない。

人が人を翫る目下の光景に彼女達は微動だに出来ずにいたのだった。

EP19. 仮面の男

「いったい、なんなのですかあはは……」

アイズとは分断され、アイズだけ残したまま「ヘルメス・ファミリア」は食料庫に辿り着いたが、既に行われていた抗争という名の一方的な殺戮に足を止めていた。

まず彼女達の視界と意識を奪ったのは、食料庫の大支柱に寄生する巨大なモンスター。

更に、大空洞内に存在した謎の集団。上半身を隠す大型のローブに、口もとまで覆う頭巾、額当て。集団の一人一人が何者かに怯えるように慌てるように逃げ惑っている。侵入者のアスファイ達に気づくどころか気にする暇さえない状態だった。

その上、彼らに襲いかかる大量の食人花。モンスター咆哮と、ローブの集団から発せられる悲鳴によって奏でられる阿鼻叫喚が響き渡る。

「食人花は奴らが調教しているんじゃないのか？ どうして奴らは襲われている？」

「私が来た時には既にあの状態でした。犯人は恐らく謎の魔法を撃った何者かでしょう。」

「さっきの魔法なんだけどさ、アスファイ。私、18階層で見覚えがあるんだよ。」

「ルルネ、詳細を。」

彼女達が食料庫に突入する前、彼女達は鐘の音を聞いた。無論、ダンジョン内に鐘が鳴るはずは無い。間違いなく人為的なものは明確だった。

「18階層で起きた食人花と謎の赤髪の女の襲撃を話しただろ？本当はその時、赤髪の女に襲われたんだけど、その時もあの鐘の音が聞こえたんだ。【九魔姫^{ナイン・ヘル}】が言うには、あれは魔法らしいんだ。」

「魔法ですか・・・」

「詳細については分かんなかったんだけど、恐らく【能力上昇^{ステイタス}】だと思うんだ。それも、

「広範囲に及ぶようなのでかいヤツ。」

「広範囲の能力上昇効果なんて聞いたことありませんね……あの鐘の音以来やけに動きにズレがあると感じていたのはそのためですか。ですが、それだけでは彼らの状態を説明するには物足りませんね。ルルネ、他に気づいたことはありませんか？」

「そういえば、赤髪の女の動きが変だったんだ。魔法が撃たれる前までアイズとドンパチやってたのに直後逃亡したんだよ！」

「うーん……たしかに変だが、魔法のせいだと言い切るには少し足りないなあ。」

「そうですね。何にせよ、今の手持ちでは決めきるには至りません。今見極めるべきは目下で闇派閥と戦っている青年が我々に味方してくれるかどうかです。実力は恐らく我々より上。あまり考えたくはありませんが、【剣姫】以上と見れるでしょう。」

遠くで闇派閥の残党を片っ端から倒し続ける青年を見て、【ヘルメス・ファミリア】は血の気が引いていく。

「瞳の色までは確認できないが、白髪青年ヘルメス様がおっしゃってた【ベル・クラネル】なる青年ではないだろうか？」

「確かに風貌は一致しています。ヘルメス様の言う通りであれば、我々に力添えしてくれるでしょう。ですが、我々の中で彼を知るものが居ないのも事実。」

「私はアイツに賭けてみてもいいと思う。」

「……行きましょう。彼が我々の味方であろうと、敵であろうと、このまま進まなければ我々の目的は果たされません。」

「ああ、そうだな。このまま後退しても無駄足なんだ。だったら正面突破あるのみだ。」

「あの【剣姫】だって頑張ってるのよ！私達がここで逃げたら彼女に笑われちゃうわね。」

アスフィの決断に【ヘルメス・ファミリア】全員が腹を括る。

「残党は彼に任せましょう。まず私たちは食人花を警戒しながら距離を詰めます。この役は前衛に任せます。距離を詰めたあとは彼らの動きを伺いながら中衛の後に下がりなさい。中衛は接敵後前に出て交戦。最悪の場合死体で構いません。可能であれば敵一人を捕縛しなさい。後衛は合図するまで魔法・魔剣は禁止、回復薬の準備を。」

アスファイは改めて陣営の指揮を伝えていく。最後にセインの提案でアスファイは後方で全体を見据える形に置く。

「かかりなさい！」

アスファイの号令とともに前衛を先頭として、集団にぶつかりに行く。残党の方は彼女たちに気づいていないのか、はたまた対応する余裕もないのか、何かに怯え、逃げ惑い、斬られ、食い散らかされるだけだった。

「アイツら、おれたちにもむきもしねえな。」

「むしろ好都合じゃない。食人花だけでも面倒なのに、残党まで相手するなんてごめんよ。」

「そういえばさ、みんなって『ベル・クラネル』についてどこまで知ってるんだ?」

「・・・ああ、ルルネはあの抗争の時は外にいたから知らないんだったな。」

静かに距離を詰めながら「ヘルメス・ファミリア」のパーティーは食人花を狩っていく。とはいえ、食人花は彼らに見向きもせずに残党集団に襲いかかっていく。

「俺も詳しくは知らないんだが、どうもベル・クラネルに関する良い噂は聞けなかった。」

「へえー。」

「さて、もうすぐそこだ。引き締めろよ。」

大した障害もなく、パーティー全員が集団と合流する。

「・・・」

ベル・クラネルは「ヘルメス・ファミア」の方を一瞥だけすると、声もかけず一人白いローブの集団を追い抜き、その向こうにいる男にひたすら向かっていく。

そんな彼を追い抜くように、飛翔するアスファイに気づくことも無く。

・・・

後方から「ヘルメス・ファミア」の人達が入ってきたのは気づいていた。それでも僕がやることは変わらない。敵意を無くし、恐怖と逃亡しか頭のない奴らを全員倒すのみ。

とうの昔に置いてきた悪に対する慈悲は置いてきた。

餌に釣られた食人花に食い散らかされるか、首を飛ばされるか。彼らの未来はこの2つしかないのだ。

「キリがないっ！」

何人斬ったところで、湯水のように湧き出てくる残党は増え続ける一方。やはり頭をうたなければ問題解決にはならない。ならば、ここは彼らに託そう。ここまで問題なくやってこれたんだ。それならこの場を凌ぐことも大丈夫なはず。

「愚かなるこの身にしゆくぐわあああ!!!」

僕の魔法では自爆までは防げない。ならどうするか、自爆するより前に奴らの息の根を止める。何より確実に効率が良い。

視界の隅に捉えた「ヘルメス・ファミリア」の人達はもうすぐここいらと合流できる。後は、一言だけ断りを入れておこう。舞台は整えたものの、押し付けるのは失礼だ。

「すまないが、君はベル・クラネルで合ってるか？」

「は、はい！ヘルメス様から話は聞いています。「ヘルメス・ファミリア」ですよね？」

「ああ。主神様からは非とも頼ってやってくれと言われている。今日あったばかりで信頼

してくれなんて言わないが、力を貸してくれ！」

パーティの前衛にいた獣人から共闘を持ちかけられる。こちらとしても、変に敵を増やすのは本意ではないのでこれを蹴る必要性はない。

「白いオーブの人達は任せてください！なので、ここは任せて良いですか！」

「あ、ああ。それは構わないが、何をするつもりだ？」

「頭を叩くんですよ。奴を潰せば面倒な食人花は統率の取れないデカブツと化します。そうなれば後は戦意喪失した白いローブの集団とモンスターのみです。」

「あ、ああ。頼む。」

彼らが頷いたのを確認して、僕はローブの集団の脇を過ぎていく。即席パーティを組むよりは分担した方が効率がいい。何より、動きやすい。

後ろを彼らに託して僕は一人、集団を避けて仮面の男に近づいていく。

「貴様は何度私たちの邪魔をすれば気が済むのだ！」

「掃除つてのは綺麗サツパリ片付かない限り終わらない。違うか？」

アスフィさんから流れ出る血の滴が地面に血溜まりを作っていく。早めに手を打たねば間違いなく死ぬ。

「お前、知っているぞ。6年前、”27階層の悪夢”の生き残りだろう？そして、私たちの同類でもある。」

「仲間？お前たちみたいな非道と一緒にされたくはないな。」

「同じであろう？貴様は今まで何人の残党共を葬ってきた？」

「何度も言わすな。殺戮ではない、あれはただの掃除に過ぎない。」

「何も変わらないではないか。いや、これ以上言い合っても何も進まない。いずれにせよ貴様らを葬ることは変わらない。」

ドゴオツ

僕達が立つはるか後方。食料庫の入口から破碎音と共に1人の獣人が姿を現す。

「なんだと!!?」

「もういいだろう・・・【暴発】」

スフオゴ

「ここから大詰めと行こうじゃないか。」

・
・
・

いつも、都合の悪い真実は大きな力によって書き変わるものだ。

【27階層の悪夢】は事実とは全く異なる虚偽が広まっている。

共通認識である【27階層の悪夢】を惨劇と言うならば、真の【27階層の悪夢】は言うなれば『誕生の奇跡』。

産み出されてはならない怪物が世に放たれるきっかけを作った悪夢と呼ぶべき最悪の奇跡に他ならない。

『私ノ願イヲ叶エテ。』

『犠牲なくして英雄はなれない……か。なつてやろうじやないか！英雄の礎生骸に！』

誰も知らない。誰にも語られない。たった一人命を賭した男の物語。

E P. 20 魔法

一度発せられた音源は一定期間その空間に残り続ける。ベルの音の魔法もまた同じ特性を持っていた。

彼の魔法は範囲内にいる味方の能力を最大限まで引き出せる。

たつたそれだけ

スキルによる能力補正とは全く違う。出来ることは出来るし、出来ないことは絶対出来ない。
ステータス

範囲魔法といえは聞こえはいいものの、補正スキルを持つ冒険者にはほぼ無意味であり、勝てない相手に勝てるようになる訳では無い。

ならば、この魔法の強みとはなんなのだと問われれば、それこそ出来ることは絶対に出る点である。力・耐久・器用・敏捷・体力・自己治癒力全て全力であまねく行使される。

かすり傷から骨折まで、時間をかければ治すことが出来る傷ならば、ものの数分で完治してしまう。

更にこの魔法は敵にも効果が付与される。

内容は敵の戦意剥奪。ステイタス上の変化はゼロ。だが、“味方”に対する戦意を抱いた瞬間、それは全て消滅しその場にへたりこんでしまうのだ。

音による魔法のため、防御魔法は意味をなさない。響き続ける音と光は全身に染み渡る。

その上、スペルキーを発動すればもう一度効果を発動可能。一度魔法を付与した敵味方全員を対象にもう一度発動できる。

全体治癒×バッドステータス付与。一度でもこの魔法を撃たせてしまえば、たちまち一方的な殺戮が始まる。

「アスファイ達の怪我が癒えていく・・・」

「アスファイ達だけじゃないわ。ここにいる全員の怪我が治っていく・・・」

「闇派閥の奴らが逃げ腰なのは気になるが、後回しだ。それより、めんどくせえ奴らがいやがる。おい、時間は稼いでやる。食人花^アを全部吹っ飛ばせ。」

後ろにいたレフィーヤが詠唱を始める。魔力に反応した食人花が一斉に襲いかかるも、全てベートによって蹴散らされる。

「雨の如く降りそそぎ蛮族どもを焼き払え！」〔ヒュゼレイド・ファラリーカ！！〕

広範囲にわたる炎属性の攻撃魔法。数百数千にもわたる炎の矢が食料庫に蔓延る食人花を一掃する。

「お前……確かレフィーヤだろ!？」

「ルルネさん!？」

「おいつアイズはいねえのか!？ 答えろ！」

「け．．．【劍姫】はさつきまえ私達と一緒にいたんだけど．．．」

「ヴァナルガンダ【凶狼】ですか。あなた達がどうしてここに？」

「アスファイ!?無事なの!？」

「え、ええ。私にも良くはわかりませんが。傷は完全に塞がっています。」

「俺らはアイズを連れ戻しに來ただけだ。てめえらの用事なんざ知らねえが、アイズはどこにいる!答えやがれ!」

「生憎と我々は【劍姫】と分断させられた結果ここにいます。ですが、恐らくはあの謎の男が関係しているのは間違いないでしょう。こんな形ではあります、力を貸してくださいませんか【凶狼】。」

「ちつ．．．面倒くせえがやってやる。アイズのこともあるが．．．あの野郎の眼も気に

「食わねえ。」

「それにしても、この惨状はどういうことでしょうか？どうして闇派閥の方々はあんなに逃げ回っているのでしょうか？聞いた話では彼らが操っているのですよね？」

「・・・うん。その通りなんだけど、私達が突入した時には既にあの状態だったんだ。私達も全く分からないんだよ！」

「・・・やはり来ていたか。」

「え？」

「行くぞウィリデイス！我々で援護する！」

「は、はい!!」

・・・

「オリヴァス・アクト・・・!?」

何故だ・・・なぜお前がここにいる!?

「お前は確かにあの時死んだはずだ！なぜ死人がここにいる！」

「生きていたのですか・・・」

「いや、死んだ。紛れもなく、貴様の手によつて私は死に追いやられたのだ。・・・だが死の淵から私は蘇った。」

破れた服から見えるやつのは下半身はとても人間のそれとは異物。そこから導かれる答えは一つ。

「私は二つ目の命を授かったのだ！他ならない『彼女』に!!」

やつの胸に埋め込まれているのは極彩式の魔石。本来モンスターにのみ存在するそれはやつが人外であることの何よりの証。

「人とモンスター。二つの力を兼ね備えた至上の存在だ。」

「……ぎげんな！ぎげんなよっ!!闇派閥の残党が今度は半分モンスターになって調教師のマネごとか!?!」

「私をあのような残りカス……神に踊らされる人形と一緒にされるとは心外だな。ましてや調教などという兇戯と同列に見られるとは……食人花も私も全て『彼女』という起源を同じくする同胞!『彼女』の代行者として私の意思にモンスターどもは従う!!」

「……何故です。なんでそんな事を!?!」

「迷宮都市を滅ぼす。」

迷宮都市とはいわば大きな『蓋』だ。モンスターが跋扈するダンジョンからモ

ンスターが出てくるのを食い止めるための唯一の砦。それが失われてしまえば地上はモンスターで溢れかえってしまう。

「私は理解した上、自らの意思でこの都市を滅ぼす!! 全ては『彼女』の願いを叶えるために!」

「とにかくめてめえは大人しくくたばれ。回復の時間かせぎにベラベラしゃべりがって。どうせもう碌に動けやしねえんだろ。」

「見抜いていたとは恐れ入る・・・私を生かそうとして下さる『彼女』の加護は未だこの身には過ぎた代物・・・貴様の言う通り今の私は碌に動けん。」

「ー私はなはな。」

「やれ。
ヴィスクム
巨大花。」

食料庫中央の主柱に巻きついていた一体の触手型モンスターが倒れ込んでくる。推定さえできない巨軀による押し潰し。巻き込まれれば間違いなく死ぬ。

「散れえ!!」

いち早く反応したベートが叫ぶ。その甲斐あつてか、なんとか全員が巻き込まれることなく済んだが、あくまで倒れ込んだだけ。巨大な怪物はちり紙程度の冒険者を蹴散らすために暴れ始める。

「ふはははははっ!! 行け巨大花! この神聖な空間に足を踏み入れた冒険者どもを根絶やしにしろ!!」

「オリヴァス・アクト!!」

ベートは巨大花の対応に周り、オリヴァスと対峙する冒険者はフィルヴィスに交

代する。

「あれだけの惨劇を引き起こしていながら今日までのうのと生きていたのか貴様は!?! お前のせいで仲間はっ……アイツは!!」

「……ああお前か。思い出したぞ、折角助けに来てくれたお仲間をむごむごと窮地においやるような臆病者め。そんなだからお前は『彼女』に選ばれなかったのだ! お前には最初から資格などなかった!」

「ふざ……つけるな!! お前だけは……私が倒さねばならない!」

「相手をしてやってもいいが、同胞を放っておいていいのか? エルフの娘よ。」

……

『バンシー
死妖精』

一時期、冒険者達から私はそう呼ばれていた。

『恥さらし』

同胞からは公然とそう罵られた。

心が痛むことは無かった。

それは事実だから。

私は“汚い”のだから。

そんな私を最初に救ってくれたのは『ベル・クラネル』だった。アイツは本当に不思議な男だった。

いくら私から拒絶しようと、奴は一切折れようとしなかった。『フィールヴィスさんは凄くいい人ですから。』などと恥ずかしげもなくあそこまで言い切れる奴はデュ

オニユソス様だけだと思っていた。

『大丈夫です！僕強いんで死にません！』

一切裏がなく、本心から放たれる彼の言葉は、汚れていた当時の私の心を少しずつ溶かしてくれたのだ。

もし、彼のの出会いが27階層あんなことの悪夢ごとでなければ、もしかしたらデュオニユソス様以上の思いを抱いていたのだろうか。

そして、もう1人私のことを綺麗だと言ってくれたウィリデイス。

『貴方は汚れてなんかいない！私なんかよりずっと美しくて優しい人です!!』

その言葉に

アイツと同じ言葉に私は2度も救われた。

何の因縁もない。初対面のお前の言葉だからこそより救われたんだ。

だから

お前だけは絶対に！私が死なせはしない！！

「ウイリデイス武器を！」

「は……はい！」

……

あの日の更新を最後に、僕のステイタスが変わることは無かった。

もう二度と、ステイタス更新はしないだろうと決めたのだからいずれにしろ：
か。

魔法に自信がないわけじゃないけど、どうも先にあんなどテカい一発見せられちゃつたら自信なくしちゃうよ・・・

長文詠唱は余裕ないから簡単に済ませよう。

「^{ゴスベル}福音！」

借りるよ、お義母さん！

E P. 21 酒場の白兔

「ベル・クラネル」と聞いて、1体何人の方が彼のことを認知するだろうか。『大抗争』^{あの時}を知る者も、水面下で動き続けていた彼を知るものは数しれない。

その上、冒険者時代の彼を語る者は両の指で数える程度だろう。

彼と何かしらの形で知り合った人からは「酒場の白兔」^{パテカトル}と呼ばれ始めている。その人のほとんどが私か他の人経由で関わるのがほとんどです。

彼と私が初めて邂逅を果たしたのは七年前。闇派閥との対戦の中で、どれほど彼に助けられたことか。

更にはその2年後、私達のファミリアを助けて貰うまで。2年間どこで何をしていたのか、

「無理には言わないわ。彼について少しでも教えて欲しいの。」

「・・・」

以前、アストレア様から、このようなことを質問をされたことがある。

「・・・少し、考えさせてください。」

なぜ、私はこの時躊躇したのだろうか。元より彼の情報は公言しないこと。他言無用で頼まれた。この約束を私自身破るつもりもなかった。それなのに躊躇してしまったのは私自身の未熟さゆえだろうか。

「私にさ貴方の交友関係についてとやかく言える立場じゃないわ。そりゃあ、恋人や悪い人に騙されるような事になってくると、ちよつと話は変わっちゃうけど。それでも、私はリ्यूを信じる。」

「それでは何故、ベル・クラネルについて？」

「んー・・・そうねえ。女神故の好奇心かしら？ファミリア家族内でも気難しいリ्यूがあんなに

破顔しながら話す男子についてね。」

「わ、私そこまで酷い顔してませんか!？」

「ふふつ、1度でもいいからアリーゼ達に見せてあげたいくらいだわ。」

「そ、それだけは辞めてください!」

「冗談よ、冗談。それで?話してくれるかしら?」

「……すみません。私の独断で彼の情報を話す訳にはいけません。」

神に子供の嘘は通じない。ならばわざわざ隠す必要もない。さつきまで躊躇してしまったのは……おそらく気の所為です。

「……ですが、一つだけ。」

これだけは言っても差し支えないでしょう。

「我々の大恩人です。」

「そう。なら、今度お礼に行かないとね。」

「・・・え？」

・・・

「シル、少しよろしいでしょうか。」

「リ्यू？ベルさんならまだ帰ってきてないよ？」

「ですから何故そこでクラネルさんの話になるのですか。」

「え？だってリ्यूったらここに一人で来る時はいつもベルさんの事じゃない。」

「えっ、いえっ、そ、そんなことはない・・・かど。」

「ふふっ、それで？今日はどうしたの？」

「正直、今更な所ではありませんが彼に何か今までの分も含めてお礼をしたいのです。」

無論今までの報酬分は全て彼に渡してきた。彼の性格上、お店の売上に貢献するという形で流れてしまった分もありますが、報酬とは払ってきたものの、お礼として返したことはありません。

ですから、アストレア様と共にお礼をする際に一緒に渡すことに決めたのです。

「いぎプレゼントをしようにも、彼の趣向が分からず・・・」

「それで私に相談してきたの？」

「ええ。クラネルさんと親しく、相談できるのはシルだけですから。」

「うーん・・・ベルさんって余りお洒落とかシヨッピングってあまりしないから。そういうば、甘いものが苦手だった気がする。」

「ありがとうございます。食べ物贈るかはまだ未定ですが頭に入れておきます。」

クラネルさんとの付き合いは長いものの、私はクラネルさんについてほとんど知らない。二年間、何をしていたか。冒険者の時代の話も。

「ごめんね？力になれなくて。」

「いいえ、苦手な物が聞けただけ良い収穫です。ですが、私が選んだプレゼントで喜んで貰えるでしょうか・・・」

「大丈夫！リユースが気持ちを入れて選んだ物なら絶対喜んでくれるよ！」

「・・・そうでしょうか。」

「そうです！」

「感謝しますシル。」

やはり彼女に聞くのが一番ですね。

「リーオーン！何してるのー？」

「えっ、ちょっと待ってください！だからその抱きここうとすることを止めて下さいアー
デー！」

・・・

「・・・じーっ」

「え、えーつと．．．何でしょうか？」

食料庫での一件が終わり、レヴィスの手によつて主柱が破壊され、食料庫の天井が崩落したことで全員追い出される形でこの一件は幕を閉じた。

「．．．どうして？」

「へ？」

「み、脈略が無さすぎて会話が成り立たない。雰囲気的には怒っているような困惑しているような．．．」

「君は．．．レベル１．．．だよな？」

「えーつと．．．」

分かった、この人僕を誰かと勘違いしているんだ。．．．でも、誰と勘違いして

いるんだ？

「君はどうしてここまで強くなれるの？」

「あ、あのー。どなたかと勘違いされてませんか？」

「・・・はっ！ごめん。なさい？」

「なんで疑問形!?ま、まあ勘違いは誰にでもありますし・・・」

「そろそろ出発しますよ。闇派閥達が食料庫を壊した以上、ここに長居しても無駄でしょう。このまま地上に戻って報告します。」

「何をやっているのだクラネル。」

彼女を前衛に敷いて地上に出ようとするかのじよたちに続こうとすると、後ろから声をかけられる。

「フィルヴィスさん。ありがとうございました。」

「なぜお前が礼を言う？我々は【劍姫】を探しにここまで降りてきたまでだ。」

「いえ、フィルヴィスさん達が来なかったら間違いなく被害は広がっていました。他の御二方も含めてありがとうございます。」

「う、噂通りの人ですね・・・」

「やはり変わらん、クラネル。」

「フィルヴィスさんの方は・・・大分柔らかくなりましたね。」

「そうなのか？」

「んーなんとというか…少しだけ綺麗になったというか・・・やはり隣の彼女の影響でしょ

うか？」

「そうだな、紹介しておこう。彼女はレファイヤ・ウィリデイスだ。」

「えーつとベル・クラネルさんですよ？お話はフィルヴィスさんから聞いています！」

「フィ、フィルヴィスさん!？」

「だ、大丈夫だ。そこまで詳しい情報は出てないはずだ！」

「……はあ。」

EP. 22 シル・フローヴァ

「てめえ、どこのファミリアだ？」

24階層の事件は解決した。事件の発端だった闇派閥の残党は全滅。オリヴァスはレヴィスに喰われ、消滅。魔石により強化された彼女は歯止めが効かず、ベイトさん達上級冒険者に任せっきりになってしまった。

結果として、レヴィスは取り逃してしまったものの、犠牲無くして幕を降ろす結果となった。

「・・・」

「答えられねえのか？」

「ちよっと！ベイトさん！私たちに手を貸して貰ったのですからそういうことを聞くのは野暮じゃあ・・・」

「だってそうじゃねえか。あの仮面野郎とまともにやり合えるのに名前も聞いたことがねえ。不自然じゃねえか。」

「おい狼^{ウルフ}人、いい加減にしろ。全てが終わったあとでまた火種を撒くな。」

「・・・チイツ。」

この場はフィルヴィスさんのおかげで収められたけど、今思えば派手に動きすぎたのかも・・・

「色々と聞き出したことはありませんが、ヘルメス様から言及はしないようにとの言伝ですので私からは何も。ですが、力添え感謝します。」

「いえ、こちらこそです。貴方達が来てくれなければ苦戦を強いられていたでしょう。」

「ヘルメス様に振り回される同士、また手を合わせることになるでしょう。」

「……あまり呼び出されるような事件が起きないで欲しいですけど。」

「ええ。ですが、何ひとつとして元凶は倒せていない。」

「にしてもさー、誰だったんだろーなあの仮面の奴。」

崩落する寸前、突如姿を現した黒いローブを被った仮面をつけた誰かが埋もれていた何かを奪い去っていった。

「ヤツがエニユオと読んでいたところからも我々の敵と見て間違いないでしょう。加えて報告しておきます。」

僕達は神妙な面持ちで食料庫を後にした。

・
・
・

「シルさん？」

「あちやー、バレちやいましたか。」

24階層の事件は死傷者も出ずに戻ってくることが出来た。ただ、やけに派手に動きすぎたのかもしれない。

1人になりたい時、僕はここを訪れる。街全体を見下ろし、夜風に当たりながら何も考えずにただ時を過ごしていられるから。

「バレちやいましたかって・・・どうして着けてきたんですか？明日もお店の仕事とかあるでしょうに。」

「大丈夫です。それに、ベルさんを放っておけませんから。」

いつものような笑顔のまま告げるシルさん。5年前、僕を助けてくれたあの日

から、何かと僕と絡むことが多くなっていた。

「シルさんって、僕に構うの好きですよね。」

「そんな事ないですよ？ベルさんはもちろん、アーニヤ達や酒場に来て下さる皆さんと話すこと自体、私が大好きなことです。」

シルさんは酒場に来てくれた冒険者やオラリオに住んでいる一般の人達。強いては神様達まで、実に沢山の人達に顔が利いている。

「でも、ベルさんが特別ってことは本当ですよ？」

「・・・え？」

シルさんが突然発した言葉に僕は声が出せないでいる。今この子なんて言った？

「私にとってベルさんは特別な存在なんです。そう、誰よりも。」

「えっ、でもシルさんにはアルが・・・」

「確かにアルさんにもすごく興味はあります。そう、例えるとしたら初めて親から真っ白な自分だけのキャンバスを貰った子供を見つめる親になったような気持ち。まだ何色にも染められてないキャンバスがどう染められていくのか。言ってしまうえば興味が湧いえましたんです。」

「そ、そうなんですネ。」

「それに、最初はベルさんから構ってくれたじゃないですか。忘れちゃったんですか？」

「そ、そうでしたっけ？」

「忘れちゃうなんてひどい。私すごく嬉しかったんですからね！」

本当に、彼女はどこまで僕のことを見透かしているのだろうか。

「ベルさん。」

いつもの笑顔から一転、真剣な顔付きでこちらを見つめてくる。こういう時のシルさんはすごく確信を着いてくるから緊張してしまう。

「はっ、はい！」

「疲れてませんか？」

「えっ、えーつと……それは、まあダンジョンから帰ってきたばかりですし。多少は……」

「いえ、体力的なお話ではありません。精神的に疲れていませんか？」

そう言われて、改めて自分の体を顧みる。7年前、お義母さん達を追ってオラリオに戻ってきたあの日から、闇派閥の殲滅に明け暮れる日々。壊滅させた後でも、こ

の戦いから開放されることは無い。

ウラノス様の命で奴らの残党が関わりと見られる事件に駆り出される日々。

椿さんの付き添いや、リユーさんとの手合わせやシルさんに振りわされる方が幾分か救いだったほど。

「ベルさんは、全てが終わったあとはどうなされるおつもりですか？」

全てが終わったあと。つまりは闇派閥との因果をたった後。ここにいる意味がなくなったその時。僕はどう動くだろう。

「実の所僕にも分かりません。オラリオの追放か、はたまた用済みと切り捨てられるか。何にせよ、僕はオラリオに居られないでしょうね。」

本来ならばオラリオにいたことさえ許されていないのだ。ここに滞在することを許可する代わりとして出された条件が達成された以上、僕がオラリオに長居する道理はない。

「酷い！手伝うだけ手伝わせたのに全てが終わったら捨てるだなんて！」

「元々僕はギルドにとって危険人物だった。そこを無理を聞いてもらってまでたされた条件が、神ウラヌスの手伝いです。それが果たされたならば、ギルドにとって僕は邪魔者になるだろう。」

本当なら7年前にとうに落としていた命。オラリオを守るために果てるのならば本望だ。

「もし、もしでしたらでいいんですけど。もしベルさんが開放された時、少しの間でいいので私に付き合って貰えませんか？」

「え？今じゃなくてですか？」

「はい。今のままでは何かと動きにくいでしょう？何より、今から悲しい結末を想像するくらいでしたらその先に楽しい未来を考えた方がいいと思いますよ。」

「いや・・・いえ、そうですね。もし、その時になったらどんなことにでも付き合いますよ。最強の騎士様に殺される前にね。」

「ふふっ、楽しみにしてます。」

いつになるか、そもそも守れるかどうか分からない約束だ。それでも、これか先のイバラの道のような未来に、一輪のきれいな花を咲かせようとしたってバチは当たらない・・・かな？

「ありがとうございます。色々と吹っ切れた気がします。」

「ベルさんのお役に立てたのなら私も嬉しいです！」

「それじゃあ帰りましょうか。そろそろ帰らないとミアお母さんに怒られちゃいます。」

「そうですね。」

どこからか突き刺さる殺意の視線に目を背けながら、僕達は帰路に着いた。

EPISODE 豊穣の女主人

抜けるような蒼穹の下で

「おじさん！これとこれーつずつください！」

「はいよ！それとこれオマケね！今度もシルちゃんによろしく言っといてくれよ！」

「はいー！」

迷宮都市オラリオにも露店は存在する

いつも具材調達先としてお世話になっているお店

いつもはシルさんが買ってきてくれるんだけど、今回は僕が担当に選ばれた
シルさんが言うには

『食材を買い物する時は可愛く笑って、ねだるといいよ』

『あ、あのシルさん。僕男ですけど・・・』

『大丈夫大丈夫！ベルさんすごく可愛いから！それにお店のおじさん達も優しいし！』

『しれっと酷いこと言ってますん!?てかそれ理由になってるんですか!?!』

と、口喧嘩していた頃が懐かしく感じてくる

一抹の不安を抱えながらいざお店を尋ねてみれば、シルさんの言っていた店主さんたちの優しさがすごく伝わってくる

「よおボウズ！今日は何を買いに来たんだい？」

「どうしたどうした今日はいつものべっぴんさんは一緒じゃないんかい？」

こんな風にいつも声をかけてくれる

それと同時に、シルさんの人柄の良さも分かってきた

人も神も種族分け隔てなく真摯に接し、神すらも魅了するほどの美貌と優しさを店主たちの言い分も理解出来る気がする

「ただいま戻りました。」

「白髪頭早く戻るニヤ！今日はシルが居ないから仕事が溜まって忙しいニヤ！」

買い物袋を両手に僕が【豊饒の女主人】に戻ってくるとアーニヤさんが大量の食器を前に悪戦苦闘していた

「とりあえず食材置いてきますので待つてください。」

シルさんに拾われ、住む場所もなかった僕をミアお母さん達は大分強引なやり方だったけどここ【豊饒の女主人】で雇ってくれた

担当は買い出しと皿洗い

さすがに、僕をお客の前に出す訳にもいかず、なるべく目立たないお皿洗いに指名されることとなった

帰ろうと思えば帰れる場所があった

それでも、そうしなかった…否、出来なかったのは雨の中行き倒れていた僕を助けてくれた彼女たちへのせめてもの恩返しだった

．．．

「ベルさんもこの仕事に慣れてきましたね。」

「はい、これもシルさん達のおかげです。本当にありがとうございます。」

「まつ、ミヤーから言わせたらまだまだニヤ。」

「ごらつ、アーニヤ！」

「ははははは」

お店が少し空いた時、僕はシルさんに連れ出された
何故か一緒にアーニヤさんもついて来ちやっただけ……

「ここね、私のお気に入り場所なの。」

シルさんに連れてこられた場所は路地裏を抜けた先にあつた大聖堂の屋上
抜けるような蒼穹を望めるこの場所は周囲の建物より高く、静穏な街の景色が広が
っていた

「ここにいるとよくわかるの。今、街がどんなことを思っているのか。」

シルさんが言っていることはよく分かる

僕がオラリオに帰ってきた時、よく城壁の上で街を見下ろしていたから
シルさんには及ばずとも、オラリオの表情はよく見えていた

「何年も前から、オラリオはずっと悲しんだり、怖がったりしてた……」

無理もない、つい三年前まではオラリオは『暗黒期』に突入していた

抵抗できる冒険者^{人達}ですら恐怖は計り知れなかったんだ、街の住人達の恐怖と絶望は計り知れないものだ。たははずだ

「それは、仕方ないという言葉で切ってしまう訳にはいきませんが、そういう時代でしたので……」

「でもね、最近はずうんだよ。街が少しずつ、笑うようになった。喜んだり、嬉しがるようになったの。」

「そうですね、〔ガネーシャ・ファミリア〕に、〔ロキ・ファミリア〕、〔フレイヤ・ファミリア〕や〔アストレア・ファミリア〕。他にも多くの冒険者達が戦って、傷付いて、多くの犠牲を払いながらも街を守ったんだ。」

鳴り止まぬ人々の悲鳴

立ち上る黒い煙、消えることの無い戦火

乱立する無情な多くの光の柱

『悪』に屈すまいと立ち上がり、邪神の使徒たちと戦い、闇を追い払おうとした
そして、【アストレア・ファミリア】の手によって『悪』は今、確かに滅びようとして
る

「ベルさんも、がんばってくれてたんですよね？」

「えっ？」

シルさんから思いがけない言葉が飛び出してきた

「ベルさんがどのような方で、どんな風に生きてこられたかは私は存じあげません。ただ、冒険者様達の言葉を聞いていると悪い噂が多かったです。」

「それは……」

「ですが、一部の方からは、感謝の声も聞こえてきました。白髪の人に助けていただいた

話も聞いていました。」

シルさんはこちらを振り返って笑顔を浮かべた

「当時私は、ベルさんという方にお会いしたことはございませんでした。とはいえ、会ったことのない人を噂だけで決めつけたくなかつた。だから視てみることにしたんです。」

「み、視る……ですか？」

「はい。どんなに表面上取り繕っていても、瞳は全てを嘘偽りなく教えてくださいます。神様のようににはつきりと分かるわけじゃありません。ですが、鵜呑みにするくらいならと、そう考えていました。そしたら、貴方は凄く綺麗な瞳をしてたんです。」

「それで僕を受け入れてくださったんですね。」

「はい！まあ、実は他にも理由はあるんですけどね。」

「深堀はしません。どんな形であっても、シルさん達が命の恩人ということには変わりありませんから。」

「ふふつ、ありがとうございます。」

「こらあー！もうすぐ店が開くニヤ！おミヤーら早く戻るニヤ！」

しんみりした空気を壊すように、扉が開かれアーニヤさんが飛び出してくる

「あらら、もう時間切れみたいですね。早く戻らないとミアお母さんに怒られてしまいますね。」

「シルさん、最後に一つだけいいですか？」

「なんででしょう？」

「僕がもし、あの場所に帰らないような。そんな時が来た場合は。その時は――」

その先の言葉が紡がれることは無かった

シルさんの人差し指によってその先の言葉は紡がれなかった

「ベルさんが帰ってこなかったら、私寝込んでいますよ？」

少しだけ、シルさんの笑顔が消えた

そんな気がした

咎人

「依頼？また？」

ルノア・ファウストは『賞金稼ぎ』である

派閥を転々としながら旅を続ける毎日を送り、路銀稼ぎの一貫として賞金首狩りとして活動している

その強さから、『黒拳』の渾名まで付けられるほど

「【アストレア・ファミア】によって、闇派閥イウイルスの残り滓も壊滅したんでしょう？勢力争いなんて終わったんじゃないの？」

「あくまでそれは表向き似流された嘘情報デマだ。ギルドの上層部によって書き換えられた偽りの事実にすぎない。」

「はあ？あんた何言って。」

「闇派閥イヴイルスの壊滅に係しているのはたった一人。「アストレア・ファミリア」はあくまで
 でつち上げられた『英雄』に過ぎない。」

「なぜそんなことを。」

「そつちの方がギルドにとつて都合がいいのさ。「墮ちた英雄」を上げるくらいなら人望
 もある「アストレア・ファミリア」を担ぎあげた方が好都合だとな。」

「ふーん、まあどつちでもいいや。それで、今回の標的ターゲットは？」

「その壊滅させた本人が今回の標的だ。」

ルノアに依頼をもちかけた男ヒューマンは深くため息をつく

「名前は『ベル・クラネル』。現在「豊穡の女主人」を隠れ蓑に行動していることまでは
 調べが付いている。」

ルノア自身も、賞金稼ぎとして名前くらいは聞いたことがあった

やれ『大抗争』の首謀者だの

やれ闇派閥イツイルスの黒幕だの

やれ人の心を持たぬ非常な化け物だの

まともな噂は全く飛んでこない

一時期彼は死んだという噂すら流れたほどだ

「聞けば、今でも残党狩りを続けているらしい。我々の息がかかった配下にも被害が及んでいる。ひいては、我らブルーノ商会イツイルスが闇派閥と繋がっていたこともやつにバレたかも知れん。明るみになる前に、必ず消せ。」

と告げると男は返事も待たず、椅子から立ち上がり、酒場から飛び出していく

「なあーんかパツとしないなあ．．．」

ルノアが今まで相手したきた賞金首はそれこそ札付きの悪がほとんどこの国でも札付きの悪なんてものは一つや二つ大悪を犯してる

それがどうだ、今回の依頼は

確かに『大抗争』以来、主に闇派閥に関して大暴れしているようだが、全くといっていいほど雲が掴めないのだ

それこそ本当に首に額がかかっているのかどうかも怪しい人物

なによりルノアにとって1番の不安要素はオラリオの冒険者であるという点

裏切りが常の裏世界といえど、信用もまた大事な要素

腕っぷしの強さにものを言わせ、達成率はほぼ10割の彼女とて、第2級以上の冒険者には苦戦は必至

その上、『大抗争』で悪名を挙げた大悪党なんて、考えるだけでも気が滅入る相手に変わりなかった

酒場の蜂蜜酒をカラカラと手の中で転がしていく

「あゝ。もう何か疲れたし、どつかに身を落ち着きたいなあ。カツコ良くなくていいから、気をつかってくれる亭主とか見つけて、狭い家でゴロゴロして・・・」

風に揺られ、机から落ちていく似顔絵を気にもとめず、蜂蜜酒をひと口あおる

「賞金稼ぎ、もう止めようかなあ。」

・・・

「また依頼？今月で何人目？」

クロエ・ロロは『暗殺者』である

とある犯罪組織ファミリアから脱退して以降、路銀稼ぎとして暗殺業を兼ねながら旅を続けてい

た

「まあ、見合つた報酬さえ用意してくれば、仕事はこなすけど。」

「ああ、勿論だ。今回暗殺を頼みたいのは、「ベル・クラネル」という男だ。」

「【ベル・クラネル】？聞いたことない名前。それも冒険者なのに2つ名も無し。ハズレの匂いがするわ。」

「まあ、そう疑うのも仕方ない。表舞台にさえ名前を知るやつは少なえ。知ってるやつですら死亡したと思つてる奴がほとんどなレベルだ。」

「ふうん……」

クロエの顔がどんどん険しいものになつていく

「本当にそいつの首にかかつてるわけ？」

「ああ。それも7000万ヴァリスだ。それもある組織直々に裏のルートに出された賞金だ。まず間違いないねえ。」

クロエに渡された手配書にはフードを外した白髪の男

両目は真紅に染まり、その顔はお尋ね者とは思えないほどあどけなさの残る顔が写っている

肖像の上に記された額は7000万ヴァリスと嘘ではないらしい

「この額の賞金首なんてそうはいねえ。なにより、今回は存在自体あやふやな標的だ。出来次第では超える事も考えられる。他のやつに出し抜かれる前に俺達が頂くんだ。賞金は山分けてことごとく――」

「前金で3500万。懸賞金の取り分は、こっちが七割。」

「ま、待てつ。いくらなんでもそれは・・・せめて六・四で・・・」

「嫌。ただでさえ不確定すぎる標的なのに、そのうえ巨大組織直々の暗殺指令。そんな

のを仕留めるのなら、それくらい貰わないと割に合わない。」

クロエの目もとを隠すフード―猫耳によって二つの山が出来ている『黒猫』の表象―
が夜気になびく中、その小振りな唇が薄ら寒い三日月を描く

「なんなら私一人でやってもいいんだけど？今ここで、貴方から情報を引きずり出して」
「わ、わかった・・・その条件でいい。」

拷問も十八番である暗殺者を前に、息を呑むドワーフはこくこくと頷く
標的の情報が載っている羊皮紙を置いていき、逃げるように立ち去っていった

「・・・ちよろいもんニヤ。」

一人、口調を元に戻したクロエは盛大に嘆息した

「歯ぐたえがなさ過ぎて興ざめニヤア・・・いつそ依頼を持ち帰ってくれた方がよかった

のに、ニヤ。」

暗殺者である彼女は生業の關係上舐められることは仕事に直結する

舐められぬよう営業用の仮面まで被って、闇の仕事に身を投じてきた

だが、彼女はいいよ疲れていた

「あゝ。もう美少年を侍らせた優雅な生活を送りたいニヤ。おへそやお尻を撫で回して、胸をキュンキュンさせながらこの世の極楽を満喫したいニヤ。」

色々な意味で、今回の依頼に乗り気でなかったクロエにも、一つだけお気に召した部分があるようで

「それにしても……」

手配書を月にかざし、その頬を崩し

「なかなかいい美少年だニヤ、殺す前に堪能するのも悪くないニヤ。」

クロエの暗殺には規則ルールがあつた

まず、子供は殺さない。特に男児は世界の宝だ。宝を奪うなどもつての外である。そして殺すのは人としての屑、あるいは殺される覚悟のある者だけ。この条件に見合
わない者は、頂戴した金ごと依頼人に投げ返して依頼を放棄している

それがよりもよつて最後だと決めた案件に回つてきてしまったのだ

「暗殺業、止めようかニヤ〜。」

兎

「いやー！なんとか腰を落ち着ける場所を見つけたようだねベル君！」

そんなこんなで『豊穡の女主人』で働くこととなり、どこから聞きつけてきたのかヘルメス様が1人で尋ねてきた

いつものお供アシライさんを連れていないヘルメス様を見るのはいつぶりかな

時代が時代なら、眷属達から止められるほど危険行為だった神様の1人歩き
これもまた時代の変化として受け止めるべきなんだと心の中で受け止める

「わざわざミアお母さんに頼み込んでまで休暇にしてもらわなくても・・・」

ヘルメス様は何を思ったのか、ミアお母さんに僕に今日を休暇にして貰えるようにしたのだとか

ミアお母さんは渋々と言った感じでした承してくれた

僕としてもヘルメス様に対するお礼もまだだったこともあつて僕からも頼むことにした

まあ、ミアお母さんの『後でいつもより働いてもらうからね!』にはミアお母さんらしいと笑つてしまつたけど

「それにしてもベル君、よく留まることを選んでくれたね。立ち去るといふ択も取れたはずだろう?いくら君が死んだことになつてるとは言つても、君をよく思わない人達は多い。」

「ははは、オラリオが気に入つたと言いますか・・・」

「兎にも角にも、闇派閥イツイルスの残党狩りの件実に見事だつた!」

「僕としても事情がありましたし：何より、『英雄』を欲しがっていると持ちかけたのはヘルメス様からですよね?」

全てが終わり、宛をなくし途方に暮れていた僕をヘルメス様は閻派閥イヅイルスに対する對抗策として僕をとどまらせてくれたのが最初だった

交換条件として閻派閥の殲滅の手伝いを出されたけど・・・

「いやー！ベル君のおかげで無事解決！無事オラリオに平穏が訪れたって訳だ！」

「あまり大きな声で言わないでください。体としては僕がやった事にはなつて無いんですから。」

『大抗争』で、閻派閥と手を組んだお義母さん達が所属していたのは「ゼウス・ヘラファミリア」

末端の方とはいえ、「ゼウス・ファミリア」の僕を立てるのはギルドにとって不都合があるらしく、留まることを条件に協力を仰いできた

閻派閥の牽制となり、僕としても断る理由もなく了承する形になった

「ベルさん！ベルさんに用事がある方がいらっしやってますよ？」

「えっ……」

ウエイトレスとして働いているわけじゃない僕は、お客から指名されるわけも無いし、そもそもここで働いていることを知っている人だって限られてるし……

「それじゃ、俺はここで。それじゃ、ベル君またよろしく頼むよ！」

「……」

飄々と立ち去っていく男神を見送る

ヘルメス様とは随分と長い付き合い——と言っても一方的なもの——で、ことある事に押しかけてきた

その度にお義母さんに飛ばされるまでがオチになってたけど

ヘルメス様には、どうも同じような匂いがする

兎にも角にも今は、シルさんの所へ向かわなくていいと

．．．

「すみませんお待たせしましたーってリユースさん!？」

シルさんに手招きされた場所に進んでいけば、そこにはリユースさんが立っていた

「すみません、突然押しかけてしまい。」

「いえいえ、今日はちようどお休みを貰ってましたから。それよりよくここにいると分かりましたね? 一部の人しか知らないと思ってたんですけど．．．」

「と、とある男神から．．．」

リユースさんにとっては精一杯隠しているつもりなんでしょうけど、それだとほぼ言ってるようなものですよ．．．

「せっかく来てくれたんです。座つてご一緒にお話されたらどうでしょう?」

「押しかけてきて何も買わないというのも不躰です。まだ時間もありますのでここはお言葉に甘えさせていただきます。」

・
・
・

「改めて私から代表して感謝を伝えます。ありがとうございました。」

先までヘルメス様と対談していた席とは違う席に案内し、シルさんに注文を受けてもらつて、一息つくとりユーさんの方から切り出してきた

「ヘルメス様からお聞きしました。イヴイルス闇派閥壊滅の立役者だと。」

ヘルメス様結局喋っちゃったんですか!?

「ご、ごめんなさい!勝手に名前をお借りしてしまつて!」

「いえ、本来謝るべきは私たちです。クラネルさんのためとはお聞きしていますが、『事実隠蔽』に手をつけたのは事実ですから。アリーゼ達もどこか納得いかない顔は消えませんが、」

「・・・別に断って頂いて構いません。ここに残りたいというのも完全にエゴですし。何より、これはただの押しつけにすぎません。」

目を閉じ、大きく深呼吸をしてからもう一度彼女を見つめる

「僕は、ただの弱虫です。『大抗争』のことは事前から知っていました。知っていて、その上で僕は最初オラリオに向かうつもりはありませんでした。僕は、1度オラリオを見捨てたんです。」

エレボス様から全てを聞き、その上で僕は加担することも、オラリオに戻ることも選ばなかった

「僕には、助けられたかもしれない人達全員に贖罪できるほど、僕は強くない。だから、これは僕からの精一杯の罪滅ぼしなんです。」

「そんなことありません。クラネルさんが居なければ助けられなかった命も多いです。貴方を知らない人も『英雄』と仰ぐ者たちも居ます。」

「……僕は『英雄』にはなれません。」

「そうだ、誰かのためになんてものは綺麗事で、ようは手柄をやるから黙ってろって言う
いただけ」

【アストレア・ファミア】を隠れみのに混乱を防ぐ

結局は僕の活躍はそこまでってことだ

「もし、この話を無かったことにした場合。クラネルさんはどうされるんですか？」

「どうなるでしょうかね。ギルドがどの様な形で報告するかは分かりませんが、遅かれ早かれ闇派閥の壊滅は何かしらの形で伝わっていくでしょう。ともすれば、人々はその

立役者を探したがりです。」

人とは常に『安心』を求め生きている

『安心』とは柱だ、それも大黒柱のようなでっかい柱

闇派閥の壊滅は『安心』には繋がらない

怯える『恐怖』は消えても、頼るべき『安心』がなければ、人から『不安』は決して消えない

もし、新しい『悪』が台頭してきたらどうしよう

その一抹の不安ですら人は大仰に縮こまってしまふ

だからこそ、人は求めるんだ

自分達が頼るべき存在を

「この隠蔽に後ろめたい意味はありません。言うなればこれは都市の混乱防止と、一人を守るため。アリーゼ達もそれを理解した上で見極めようとしています。クラネルさん、貴方は一体何者なんですか？」

「僕は、しがない”元”冒険者です。それ以上でもそれ以下でもありません。」

「・・・分かりました。」

「僕から一つ質問なのですが。リユーさんは、どちらを選びたいですか？」

「私ですか？」

「はい。貴方の『正義』としてでも、『アストレア・ファミリア』の一員としてでもなく、『リユー・リオン』。あなた一人としての応えが聞きたいです。」

変なプレッシャーを与えないように柔らかい笑顔で、それでも真剣に目を向ければ相手もきちんと返してくれる

大切なのは答えじゃない。相手に伝える意思があるのか、そしてちゃんと伝えられるか。そこからだから

「私は、クラネルさんにはずっと一緒にいて欲しい…です。」

「・・・え？」

「はっ！いい、今私はなんと!?すみませんクラネルさん。用事を思い出しました。料金はここに置いておくので。それでは！」

脱兎のごとく椅子から立ち上がって店から出ていくリユースさんを僕は一人ただ見ているしか出来なかった

「ニヤ？白髪頭あのエルフに逃げられたのかニヤ？」

「さ、さあ・・・」

一緒にってことはオラリオに居てもいいってことだよね？何かダメな事だったのかな？

とはいえ、今はもうひとつ厄介事に巻き込まれちゃいそうだな

ふと、店外の人だかりの中を歩いていく一人の女性から目を逸らして片付けに入る

「とりあえずアーニヤさん。ご勘定です。」

懐から2人分の料理の料金をアーニヤさんに渡し、空になった食器とリユーさんが置いていった麻袋を拾い上げ、いつもの『仕事場』に持っていく

「手伝うよアーニヤ。用事は増えちゃったけど、今は無理だからね。」

「やったニヤ！これでミヤの仕事が減るニヤ！」

「ははは、アーニヤさん。もう少し声を落とした方が・・・」

今は、この生活を満喫してもバチは当たらない・・・はず

ニヨルズ様

「おじさん！野菜買いに来たよ！」

「よお坊主、「豊穰の女主人」の服も様になってきたじゃねえの。」

「はい、おかげさまで。」

ある程度仕事になれてくると、シルさんのお供なしでも任されるようになった
たくさんの仕事を5人で分担してこなしていく必要がある

か

「ところでいつもの嬢ちゃんは居ないのかい？」

「ははは、ふられちゃいました。」

シルさん曰く、良い関係を築くには会話が大切なのだ

「おっしや！おじさんからサービスだ！シルちゃんにもよろしく伝えてくれな！」

「おじさんこそいつもありがとうございます！」

頼まれた野菜を袋詰めしてもらって、店主と軽い挨拶を交わして店を後にしていく

「それにしても……」

さつきから誰かに見られてる気がする

数は2つ、それも極限にまで気配を殺した暗殺者の眼

「心当たりは……イヴィルス闇派閥ダヨネだよね。どう考えても。」

今までも何度か、夜襲に遭ったことはある

問題なく返り討ちにできたけど、今回は明らかに違うものだった

彼らが易易出向くとは思えないから今まで通り雇われ者なのは確か
それでも、今回のそれとは違っている

「今回はやりにくそうだ・・・」

今日も蒼き穹はどこまでも澄み渡っていた

・・・

「ただいま戻りました！」

その後も大きなことも起きず、【豊穰の女主人】へと戻ってきた

「おかえりなさいベルさん。お客さんが来てますよう？」

シルさんの目線の先、窓際に設けられていた席の一つ

そこに一人のヒューマンが座っている

「ミアお母さんには私から伝えておくので待たせないように言ってきてください。」

買い物袋をシルさんに渡してシルさんに呼ばれた場所へと向かっていく

「すみません、お待たせしました。」

「いえ、大丈夫です。ここの料理美味しいですし！」

「……とりあえず本題に入りましょう。まどろっこしいのは無しです。要件を教えてください。」

オラリオ広しといえど、僕の名を知るものは限られている

ましてや、ここで働いていることを知ってるひとはそれこそ指でこと足りるほど

人手不足で臨時のウェイターとして駆り出される事はあるけど、それは店員としてのベル・クラネルの呼び出し

【ベル・クラネル】として呼び出された場合はほとんどがヘルメス様からの無茶振りがほ

とんどだった

なので今回もその類のはず

「ブルーノ商会を探つて欲しいと。」

「探つて欲しい？捕縛とかではなく捜査？」

「はっ！はい！へ、ヘルメス様が『豊穣の女主人』で働いているベル・クラネルに伝え
として☆』とおっしゃって……」

「……」

やっぱりあの神様一回殴つてみようかな

アスフィさん達の恨みもついでに込めて……

「団長に頼んだら死んだ魚の様な目で睨まれたらしくて……」

「暗黒期が終わってもあそこは忙しそうだね。」

「ヘルメス様にいいように使われてるだけな気がするけど・・・」

「^{ギルド}労基にでも駆け込んでみたら？」

「あの人達がまともに受けてくれるとも思わないけど？」

「デスヨネー。」

蜂起^{ストライキ}運動の方が案外効果的なのでは？

「ところでところでベルさんや。」

「どうしたんじや婆さんや。」

「とある女神様から聞いた話なんだけどさ。ベルつてあのフレイヤ様を啼かした唯一の

男つてほんと?」

「ぶっ!」

危ない危ない、突然過ぎて口の中のものをぶちまける所だった
そんなことになったら色々とマズイ!

って、そんなことよりな誰ですかそんな噂流したの!

この子純粹なんだから信じちゃうじゃん!

「ベルつてすんごく奥手そうに見えてもやつぱり狼だったんだね。それも相手があ
のフレイヤ様だなんて。」

「ち、違うからね!?! マリー!?! 僕そこまでやり手じゃないからね!?!」

「大丈夫! ベルがどんな人でも私は君の味方だから!」

ああ…ダメだ、やっぱりこの子人の話を聞いてくれない!

いや、まあ…啼かしたというか、思い当たる節は無くはないんだけど泣かした、というか泣かれたというかなんというか…

「まつ! ベルいじりはこれくらいにして。用事も済んだし私はこれでおいとまさせてもらうよ。」

「うん、ありがとう。」

【豊穰の女主人】を後にする彼女を僕は手を振りながら見送った

「なんだい、もう終わったのかい? ならさっさと戻りな!」

「は、はい!」

…

「あれがベル・クラネル・・・」

依頼者からの情報を頼りに「豊穡の女主人」を訪れた
ギルドからも彼に関するまともな情報はなかった

レベルは5、それも10年以上も前のものなので低く見積つても現在レベル6
所属ファミリアは「ゼウス・ファミリア」

分かっているだけでも彼の強さを証明するには十分すぎた

「どうしてオラリオの冒険者って強い人ばつかなのよ・・・」

オラリオの冒険者と戦ったことは何度かあるけど、そのほとんどが苦戦か失敗に終
わっていた

その中でも彼は別格なのは明白だった

「やっぱり断ろつかなあ。でも、最後つて決めたもんなあ・・・」

最初は路銀稼ぎで始めた賞金稼ぎも今じや苦行に変わっていた
強い標的を倒せば、噂は広まりまた新しい依頼が迷い込む
終わりのない悪循環だけが巡っていた

「最後に、ぶつかって散るつてのも悪くないのかも。どうして酒場でこき使われているのかは謎だけど……」

それでも、ちゃんとした居場所を見つけられた彼を羨んでるのかも

……

「ベル・クラネル？」

「そうニヤ、そいつがミヤーの最後のターゲットニヤ。」

何故かオラリオを訪れていたニョルズ様様にお願いして更新を頼んだのニヤ

「俺はお前の暗殺術含めて腕は認めている。だがな、アイツだけは辞めておけ。」

「あ、珍しくニョルズ様が真剣な顔してるニヤ。明日はきつとビヒーモスでも復活するニヤ。」

「縁起でもないこと言うんじゃない！・・・なんにしろ、お前は今回の件から降りろ。」

「残念だけどそれは出来ないニヤ。今回はミヤーが最後だと決めた以上はやりきるつもりニヤ。」

「お前がそこまで言うのなら止めはしねえよ。でもな、アイツだけは関わらない方がいい。いい噂は聞かないぞっ。」

「それはニョルズ様が闇派閥寄りの神様だからニヤ。」

「うぐつ、それを言われると辛い・・・」

ニョルズ様は港町メルンの方で闇派閥イヴィルスと交流があるニヤ

「武器は短剣だったり大剣だったり、魔法だったりで決まっていらない。それもとんでもない強い使い手らしい。それこそ、「猛者マウジヤ」に負けなくらいにな。」

「辞めるニヤ、暗殺する前から気が滅入るのニヤ。」

標的が規格外なのは最初から承知の上、肝心なのはいかに対峙せずして確実に仕留められるか

その点だけに関しては暗殺者とさしては利があつた

「なあ？お前、疲れてるだろ？」

「こんなご時世だから、仕方ないのニヤ。」

「お前さえよければ、俺の「ファミリア」に来るか？それこそ、今回の仕事が終わって、

真つ白になつた時にでも。」

「何ニヤ？美しいミヤの虜になつて、ミヤが欲しくなつてしまつたのかニヤ？」

「ああ、そうだな。そういうことでいい。お前のような可愛い女手が入れば漁師達も喜ぶだろう。何より、俺達も色々と危ないことやつてるんだ。用心棒くらい欲しくなつちまうのさ。」

「・・・ニオルズ様はいい神ニヤ。イケメンだし、身長高いし、子供思い。美少年の神様じゃないけど、きつといい【ファミリア】ニヤ。」

「・・・」

「けど・・・」

ここで一言断る。それだけで済むはずだった

人殺しをやめた猫が魚に夢中になつて改心なんて、滑稽だニヤ

それだけ伝えれば、神のいいニョルズ様は身を引くはずだニヤ

それにやのに、いざ口に出そうとした時、「豊穡の女主人」での光景が蘇った

「そうだニヤ、考えておいてやるニヤ。」

「・・・そうか。」

ニョルズ様は最初豆鉄砲食ったような顔をしたものの、直ぐにいつものイケメン顔に戻って、一言だけ呟いていたニヤ

「クロエ、最後に一つだけ聞いてくれるか？」

「なんニヤ？」

「死んでも死ぬなよ？」

「誰に言ってるニヤ。」

ここは豊穡の酒場

「すみませんミアお母さん。少しお話があります。」

「どうしたんだい？改まって。まさか辞めさせてくれ。なんて言うんじゃないだろうね？」

「ち、違います！今夜、営業時間外ではあるんですが、空けさせていただきます。」

そう告げると、ミアお母さんは渋い顔をしながら

「まあた、あの男神ヘルメスの差し金かい？」

「はい。」

「アンタも断ればいいものを。それでこの前なんて血だらけで帰ってきたじゃないか。」

アンタもうれつきとしたうちの店員なんだ、迷惑かけることは許さないよ！さっさと済ませて明日の仕込みには間に合わせな！」

「ありがとうございます！」

「ニヤ!?白髪頭サボリニヤ!?ズルいにや！白髪頭ばかりズルいのにや！」

「まったく・・・今日の夜、アタシとシルに用事が出来たから夜の方は閉めてアンタに見張りを頼もうとしてただけどねえ。」

「面目ない・・・」

「ただし！ちゃんとケジメ付けてきな。アンタを色々と嗅ぎ回っている連中も含めて落とし前付けてきなよ！」

「ベルさん、もしもの時は頼っていただけでも構わないんですよ？お母さんもそうだけど、アーニヤ達はとっても強いから。ちゃんと頼めば力になってくるれるよきつと。」

「ありがとうございます。」

「さあ！こんな不景気な話はお終いだよ！夜の分までみっちり働いてもらうからね！」

ミアお母さんの号令でそれぞれが持ち場へと戻って行った。

・
・
・

夜。シルとミアお母さんが酒場から出かけた後、臨時休店に歓喜したアーニヤ達
が小パーティーを開こうとした所を開こうとしていた為に少し手荒にねむってもらった。

結構手荒だったが、ミアお母さんに怒られるよりかは多分マシだろう。

「行つてきます。」

後片付けと明日の準備を済ませた上で僕は『豊穡の女主人』を出た。

一応事情は話してるとはいえ、念の為書置きだけ残してきた。

酒場の裏口を開くと暗闇に包まれた店内に蒼い月明かりが少し漏れるて店内に差し込まれる。

まだ月が出てから幾許も経っていないこともあつてかまだ家屋からも明かりが漏れている

「急ごう。」

モタモタしてしまえば任務が困難になつてくる。何より、先客がそれを許してはくれない。

そんなことをどこかへと追いやりながら歩き出そうとしたその時、視界の隅で影が動いた。

「ちよつと失礼！」

影は飛び上がり、自らの拳を掲げてこちらへと迫ってくる。

受け止めること自体は容易いものの、初見の技など喰らう余裕などありはしな

い。

影との距離が1Mを切ったその刹那、その拳を前に少年の体がブレた。

ドゴオオオツ！

直後、破砕音が響く。

「こっわあ・・・」

拳を振り下ろした地面が少しだけ抉れている。詠唱^歌は聞こえなかった。つまりは単純な筋力のみでここまでの破壊力を生み出しているのだ。

「本当ならもうちょっと待ちたかったんだけどね。」

立ち込める煙が晴れて引き起こした張本人の姿が顕になっていく。首に巻かれた防寒着^{マフラ}、肩や胸を守る軽装、そして拳に装着された革の指抜き手袋^{グローブ}。栗色の髪をなびかせている。

「不意打ちは性にあわないし、かかってきなよ。」

相手は間違いなく拳が主力武器。メインウェポン。こちらは短剣に加えて魔法で迎撃はできる。ただ、今じゃない。

「構えなよ。私は本気だよ。」

「君は確か……『黒拳』。だったかな？」

これでも裏に通じてる身、少しは名の知れたそっち側の人間くらいは知っている。

「へえ、ちゃんと知ってんじゃん。」

「『蛇の道は蛇』。多くのことに身を落としてきた。」

「お、思ってた以上にアンタも大変そうね・・・」

「あの日から僕は茨の道を突き進むことだけを選んだ。そのためならなんだってやってやるさ。」

「ま、あたしには関係無いことだけど。」

ダンツとお互いが同時に蹴ることで、2人の距離を一気にゼロへと縮める。お互いが右腕で貯めを作り、距離一Mを切った地点で解放する。

お互いが全く同じ動作を起こせばその先に待つのは単純な力比べだ。

拳どうしをかち合わせて、その後は力で吹き飛ばす。見た目以上の力で押し返されるもそのまま勢いに任せて振り切った。

ドゴオオオオオン!!

大きな衝突音と共に吹き飛ばされたルノアが離の壁に激突した。壁自体は大きく損傷していないものの、ミアお母さんに怒られるのは目に見えている。

「あちやー・・・」

「つつう・・・完全に油断してたよ。敵はLv6以上の冒険者じゃん。」

立ち込める残骸と砂埃をはらいながら彼女は再び立ち上がる。先程まで以上の殺気と集中力をもって構える。

「(彼女は間違いなく僕を殺すために雇われた『賞金稼ぎ』だ。目の前にいる彼女が『黒拳』であることはまず間違いない。ただそう考えると、一つだけ違和感を感じる部分がある。)」

まるでこちらに向けられる殺意が弱いのだ。

人の恨みを買うような生き方をしていく上でそういった人達に狙われることは多かった。その誰よりも彼女の殺意は低かった。

低いと言うよりはどこか悲壮感のような、悲しみの感情の方が多かった。

「はああああつ!!」

声とともに彼女が右腕を振りかぶりながら向かってくる。最初こそ拳で相殺こそしたが、今回は受けに徹していく。

使う力は最低限。相手の拳をいなしていくだけ。まともな打ち合いは避けるよう心がける。

「守ってるだけじゃ勝てないよっ!」

左から飛んできたストレートを右手で弾き、もう一方の腕を左腕で止めた上で右腕に勢いを乗せてぶん殴るも、既のところ躲され、もう一度お互いに距離を取る。

拳を交わして、また距離を置く。お互いに決めきれないまま時間だけがすぎていく。そんな中、微かな【詠唱】が鼓膜を震わす。

【戯れよ】

『黒拳』から目を離さないまま、視線だけで声の主を探っていく。

そして、ルノアがもう一度、地面を蹴った時、視界の隅に捉えた影は動き出し、何か風を斬る音は同時だった。

ルノアと少し遅れた形で地面を蹴り、ルノアの拳を弾き返し、こめかみに突き刺さる目前まで来ていた短剣を仰げ反らせることで回避する。

これで全部かわせた。——と勘違いしたのが甘かった。

「……っ！」

影を捉えた逆の方向に同じ影が見えた。影が握るのは先まで投擲されていたはずの短剣。それを今振り下ろそうとしている。

「(足音がしなかった。それも速いつ!?)」

恐らくは投擲の後すぐ、足音も立てず、こちらに、回ったのか。間違いなく敵

は【暗殺者^{アサシン}】。単独^{ソロ}だと言う『黒拳』とは別に雇われた口だろう。

「ちいつー！」

避けられる体勢ではない。そのため、腰に仕込んでいたナイフを掴んだまま体を捻って遠心力のまま短剣にぶつけた。

キインと、確かな金属音と共に微かな痛みを感じながらそのままの勢いで転がっていく。

「さすがオラリオ、どいつもこいつも化け物だわ。」

月の光に照らされ、影だったシルエットが頭になっていく。編上げのブーツに、身軽さを重視した戦闘^{バトル}衣、目深に被られた黒のフードに、細い尻尾をくねらせ、フードに二つの山を作る猫^{キャットヒール} 人の暗殺者。

「『黒猫』までお出ましとは大分豪華なことだ。」

「ひっそり暗殺したかったんだけど、色々重なったせいで全てパー、ね。全く、今日はつくづく運がないわ。」

「あんたは『黒猫』？じゃあ、ダブル・バウンティ標的重複だ。」

吹き飛ばされていたルノアがよろよろと立ち上がり、横から割って入ってきたクロエを睨む

「まさかとは思ってたけど本当に『黒拳』とはね。」

「獲物が被った場合は早いもん勝ち……それがうちの掟。どっちが仕留めても恨みっこなしね。」

「ええいつ、噂に違わぬ筋肉脳め……でも。」

忌々しそうに吐き捨てるクロエはすぐに小振りな唇を笑みの形に変える。

「斬ったわ。」

クロエが持つナイフに付着した血の跡を晒す。

「『毒』、それも『毒妖蛆』か。」

ポイズン・ウェルミス

「あら、さすが元上級冒険者。知ってたのね？」

「伊達に何度も死にかけちゃいないさ。」

「でも、流石の貴方でも特效薬なんて持ってないでしょう？」

「なに、問題は無い。」

特效薬はないが、最悪の場合は魔法を使えばどうにでもなるが、付随効果が今使う訳にはいかない。いくら耐異常を貫通するほどの『劇毒』でも、即死でないのならい

くらでもやりようはある。

「僕を殺せと雇われたな？ 敵はさしずめ、ブルーノ商会つて所でしようか。」

「さあ？ 言うとも思ってる？」

彼女が正直に言うとは思っていなかったものの、ベルには確信に近い何かを持っていた。

ヘルメス様にブルーノ商会の調査を依頼されたその日の夕方から彼女達の尾行は付けられていた。どうもタイミングとしても彼らが最もグレーだろう。

それでも確信には至れない。だからこそ、罌を貼ることにした。

殺し合いを餌にして食いついてきた本命を炙り出すために

「さて、邪魔が入っちゃったけど続けよつか。」

仕切り直しと言わんばかりに、拳と掌をぶつけ合うルノア。

『黒猫』の乱入はある程度想定していた。むしろ、邪魔をされなければ2対1で格上でも有利が取れる。そう考えていた。

されど、現実とは上手くは回らないものだ。『劇毒』を喰らってもなお、全く衰えないほどに彼は規格外だった。

「(このまま敵の消耗を待っている余裕はない。やはり最初から全力で叩く!)」

『黒猫』の襲撃後より様子見に徹していたルノアが動き出す。

「はああああああ!」

中断されていた肉弾戦タイマンが再開される。ナイフという選択肢がある分も含めて若干ベルが有利という所だろうか。

「おーおー、脳筋どもは単純で良いニヤ。二人ともミャーが横槍するのは予測してるだろうけど、無駄ニヤ。ネチネチ外から攻撃して、美味しいところをかつさらうニヤ!」

そんな2人の攻防をクロエは1人、傍観している。大きく動きはしない。削り自体はルノアに任せることで、自分は最後のラストボーン一撃を狙うだけ。ベルがクロエに手を出せる状況でもなく、ほかの店員も既に眠らせている。住民達は避難を優先している。つまり、この状況下で彼女の邪魔ができる者はいない。

ドゴオオオオンツ！

バカ大きい破砕音と共に、ルノアの体が吹っ飛ばされる。

ベルが肩で息をするように切れる息を整えている。片やルノアはその場から動きそうにない。間違いなく彼の勝利であろう。

「・・・」

直後、彼は声も発さずに地面に突つ伏した。呼吸音もだいぶ小さい。酷く汗をかきすぎている。

「毒がようやく効いたようね。ほんっと、化け物しか居ないのね。オラリオつて。でも、もうこれで終わり。」

指先さえピクリと動かない彼を置いて、クロエはこの場から去ろうとする。

「本当なら自分の目で確かめるのが一番なんだけど……『君子危うきに近寄らず』。憲兵がやってくる前に逃げるわ。」

最後まで彼から目をそらさなかったクロエでさえ気づけなかった。彼の口の動きを。

「【福音】」
ゴスペル

見えない音の衝撃がクロエを襲う。ほぼ無傷だったクロエでさえ上から叩

き潰される音の暴力で戦闘不能。ノックダウン

「はあつ．．．はあつ．．．賭けだったけど何とかなつたつ！」

覚束無い足取りでよろよろと立ち上がるのはベルのみ。後は「ガネーシャ・ファミリア」のホーム前にでも投げとけば、朝には2人仲良くお縄だろう。

彼にそんな力が残っていればの話だが．．．

「【我は汝を救おう】——」

残された力を振り絞りながら、ベルは1人【詠唱^{うた}】を紡いでいく。

「はっはは！いい塩梅に潰しあってくれたじゃないか！」

星夜の歌声に水を差す男が数名。ゾロゾロと影から出てくる。

「へっへっへ．．．」

「逃がさねえぜ。」

2人にベルの抹殺を命じたブルーノ商会が、3人全員を抹殺するためここまで傍観を決め込んでいたのだ。

「【鳴らせ、鐘の音を】。」

そんな彼らを気にもとめず、彼の【独唱】^{ソロ}は止まらない。

「奴と戦わせることで、弱ったところを討ち取る算段だったんだが、その手間も省けた！感謝するぜ！お前を始末したあとで二人とも同じく送ってやるよ！」

『黒拳』と『黒猫』に依頼したのも全て3人で潰し合いを狙ったため。最初からブルーノ商会の狙いは3人だけだったのだ。

ルノアとクロエは戦闘不能。一番厄介なのはベルも毒に犯され虫の息。それいけと全員が襲いかかろうとしたその時だった

「【汝の誓いを今果たさん】【ゾオアス・アンジェラス】！」

彼の【独唱】^{ソッロ}が終わった。直後、大鐘楼が浮かび上がり

ゴオオオン

星夜のオラリオに鐘の音が響き渡る

光の粒子に一带が包み込まれ、ベルヤルノア、クロエの傷が癒えていく

「な、何だこの光は！」

「ち、力が入らねえっ！」

これが彼の魔法の効力。味方に力を与え、敵から力を奪う鐘の音。あらゆる者の傷は癒えていき、あらゆるものは傷つける力を失っていく。

「ちよーつとおじさん達僕とお話しようか？」

「お、お助けえええ!!!」

その後10分間、ブルーノ商会の悲鳴が響き渡り、直後静寂が訪れていた。

．．．

「さてと、ミアお母さんが帰ってくる前に出ないと．．．」

だいぶ疲弊してしまっただが、まだ本来の目的は達成していない。最小限の被害に抑えていたつもりだったが、店にも少し被害が出てしまった。ミアお母さんの怒りは確定。その場しのぎと、ケジメとしてブルーノ商会の連中に『私がやりました』とリヴェリアさん直伝『お仕置き』として罪を被ってもらおう。

「待ちなよ。」

案内役として商会の男一人を担ぎ、その場から立ち去ろうとするベルをルノアが止めた。

「どうしてウチらを助けた？」

そんな問い掛けにベルはキョトンとした顔をして

「死にそうだったから。それだけです。」

そのまま踵を返して、立ち去る彼の背中をルノアはただ眺めているだけだった

「ああ、それと。」

ピタリと足を止めて、彼は最後に

「あなた達がすごく悲しそうに思えた。それだけです。」

...

後日、1人の手によってブルーノ商会が捕まった情報がオラリオ全土に知れ渡った。

目撃者もおらず、会員は皆口を揃えて『いつの間にか捕まっていた』と言うばかり。結局、話としては「アストレア・ファミリア」か「ガネーシャ・ファミリア」が動いたんだろう。という形で幕を閉じた。

「やったニヤー！人が増えたおかげで少し楽になるのニヤー！」

あの後、「豊穡の女主人」に戻ってきたベルを出迎えたのはクロエとルノアだった。ミアお母さんに捕まり、流れで店員になったのだとか。

「さあ、客が来たよ！お前達、声を出しな！どんなにクソツタレな時代だろうと、ここは

笑つて飯を食べてもらう場所さ！」

「「いらつしやいませ！豊穰の女主人へようこそ！」」

f i n .

日常編

幕間 阻害要素

「(君は確かに駆け出し冒険者とは思えないほどに強い・・・でも、何故だろう。その力を阻害している何かがある飛び出すとする力を押し潰しちやつてる・・・)」

オラリオを囲む城壁の上、人や神がオラリオ内や壁外の様子を見れるような通路として整備されているその場所で、2人の冒険者が剣を交えていた。

訓練とは名ばかりの、明らかな一方的ないじめとも思える決闘は、まだ日が登り始めた早朝から始まっていた。

「どうしましたか？アイズさん。」

「ちよつと一回休憩しよつか。」

「え？でもさつき始めたばっか・・・」

「休憩、しよっ。」

「……はい。」

上級冒険者の圧に押され、渋々とその場に正座する白髪のヒューマン。レベル1の彼ではどう転んでも戦闘で敵うはずは無い。それでも、アルは彼女との戦闘で少しづつでも確かに力をつけてきていた。

「君は強いよ。余り誰かに教えたことは無いから上手くは言えないけど……同じレベルの子と比べても上の方に入ると思う。」

アルが冒険者になってから約1ヶ月。彼の成長速度は著しいものだった。他派閥のアイズの目からもその異様さは明らかだった。

「あ、ありがとうございます。」

「……でも。」

アイズの微笑みから一転、少し険しい顔をします。

「君はどこか何かを無意識に恐れてる。成長するのが怖いとか、モンスターと対峙するのが怖いとかとは別の……神様の言う劣等感^{コンプレックス}?という感じの……」

人が生きるために恐怖感は大切である。人が恐怖を忘れる時は無謀に走る時だけだ。恐怖を完全に消し去ることは勇敢に立ち向かうことではない。

恐怖があるからこそ、人はモンスターと戦い続けられるのだ。

「この前私は君に臆病者だって言ったよね？」

「はい。僕が何かに怯えているとも教えていただきました。」

「私も詳しくは分かんないんだけど、多分その怯えている何かと、さつき私を感じた十二力は別だと思う。」

アイズの目に少年は2つの姿が見えていた。何かを目指そうと努力をし続ける彼と、何かに怯えて成長を恐れてしまっている彼。

どちらも同じアル・クラネルであり、だからこそお互いに阻害しあい彼自身に悪影響を与えてしまう。そうアイズは捉えていた。

「今の君の成長速度は確かに早い。けど、どこか伸び悩んでるように見えるの。もしかしたらだけど、その何かが阻害してるんだと思う。」

「えっ、えーつと・・・つまり?」

「君がもつと強くなりたいたならその劣等感を捨てること。今すぐにとは言わない。けど、今のままだと必ず転んじやう。」

「一体どうすれば・・・」

「私は君じゃないから何が起こったのかは分からない。でも、因果というのはそんなに直ぐにどうこうなるものではないよ。その時は必ず来る。」

「それなら、それまでに強くなる必要があるってことですね？」

「うん。それじゃ、続き。しよつか。」

「お願いします！」

...

「ところでアルはさ。」

「何でしょうか？」

「確かオラリオに来る前に誰かから師事を受けてたって言ってたけどどんな人だったの？」

「どんな人かって言われると困りますね・・・結構昔のことで記憶も曖昧で。」

「そっか。」

「顔とかは思い出せませんが、凄く怖い人だったことだけは覚えてます。」

「・・・」

その瞬間、アイズの頭に光るものがあつた。

「ア、アイズさん？」

「もしかしたら、アルが恐れているのはその人だと思う。」

「え？ いやいやでも顔もまとも覚えてないんですよ!？」

「ううん、ダメ。1度恐怖を感じたらそれは体にずっと残るから。」

あからさまに顔が青ざめていくアイズにアルはただただタジタジになるだけだった。

「（これって実験だよね・・・絶対。）」

・・・

「うニャー・・・」

「サボってないで働けアホ猫！またミアお母さんにドヤされるよ！」

「ルノアは何も感じなかったのかニャ？」

「またそんなデタラメ言っつて！ほらさっさと仕事に戻った戻った！」

「いいから待つのにや！さつきから誰かに見られてる気がするのニヤ！」

「一体誰がアーニヤなんか見るのよ……」

「ふっ、オラリオがついにミヤーの美しさに気がついたのにや。美しいって罪だニヤー。」

「いや、それだけは無い。で？その視線の主とやらは見つかった？」

「それがミヤーが外に出た瞬間消えちやったニヤ。きつと『きゅーきよく』の恥ずかしがり屋ニヤー！」

「全く。ほら！さつきと仕事戻った戻った！」

「ニヤアー……」

E.P. 23 ドッペルゲンガー

改めて確認しておこう。

アル・クラネル。所属は「ヘステイア・ファミリア」であり、レベルは1。到達階層はルーキーにしては早い7階層である。

零細ファミリア出身のソロプレイヤー。それが担当であるエイナ含めたギルド受付員全員の印象のはずだった。

その印象が徐々に崩れてきたのはいつ頃だったであろうか。

『白髪の男性冒険者に24階層で助けられた』

この一言から生じた亀裂は少しずつ、されどそれは確実に広がっていく

事の発端はエイナと同僚であるミイシャがエイナにアルに似た特徴の冒険者にダンジョンで助けられたとの情報を伝えたことからだった

最初こそ間違いだ。他人の空似などと、気にしない様子ではあったが、アドバイザーであるエイナ含めたギルド職員みな合致する冒険者を知らないのである。

アル自身は否定しているし、嘘をつけるようなタイプである事はエイナ自身よく知っている。だからこそこの真偽に終止符が打たれることはなく、弾けず薄れないまま噂だけが存在しているのだ。

「不思議だよねえ。私達だけじゃなくて先輩たちでさえ知らないなんて。」

「そうだね。今回の件についてはギルド長からは『他言無用だ！余計な混乱を冒険者達に招くなよ！分かったな！』の一点張りだし……」

「弟くんと見間違えたってことは無いんでしょー？」

「うん。24階層なんて今のアル君だと上級冒険者に連れてこられなきやさすがに行けないし……」

「だよねえ、相当運でも良くなきゃ難しいよねえ。」

「レベル1で18階層まで落ちるのは運が悪いと思うんだけど・・・」

「もしかしたらあれじゃない？あれ！」

「どうしたのミイシャ、急に大声なんか出したりして。」

「ほらあれだよ！一時期冒険者達の中で噂になってた『どつぺるげんがー』？つてやつ
！」

「あー、あの姿形が全く一緒の人が3人はいるつてあの噂？たしかに話は似てるけど結局あれデマだったじゃん。」

一時期、ある男神の悪知恵によって全く一緒の冒険者が別々の場所で目撃されたことからひよんな騒動は始まった。

最初は幻想でも見たのだとか、他人の空似だと誰も本気にもせず75日立たずと流れていくはずの噂だったが、とある神が発した一言でこの噂は勢いが増す羽目になってしまったのだ

「そいつは『ドツペルゲンガー』だ！気をつけろ！自分と瓜二つの奴と出会った奴は殺されちゃうんだってよ！」

元よりバカ騒ぎが好きな神だったこともあつてか、当初は相手にすらされることもなかったが、とある事件を皮切りに事態は思わぬ方向へと進んでしまう

「お、おい聞いたか！ハシヤーナが不審死だつてよ！」

「おいおいまじかよ。ハシヤーナついたらガネーちゃん所のレベル4だろ!?誰がやれんだよ!?!?」

「お、おい待てよ。確かハシヤーナって言ったら確か『ドツペルゲンガー』の・・・」

「お、おいあれは神が流したデマだろ!？」

「でもよお! そうでもなきや説明つかねえって!」

訳あつてハシャーナの死を不審死と公表していたせいで謎が謎を呼ぶ形で『ドッペルゲンガー』の噂は大きくなりすぎてしまった。

事態の拡大を忌避した「ガネーシャ・ファミア」はハシャーナの死因を公表することで事なきを得た上で、全ての元凶である男神を吊るしあげることによって事態は終息の一途を辿って行った。

「コラ! その話は厳禁だつて言ってるでしょ!」

「はーい。」

ギルドの先輩に小突かれ、彼女らの談合は終わりを告げる

箝口令が敷かれている以上、ギルドの誰も口に出すことはなくとも、不安と疑

問が永遠と渦巻いては溢れていくのだった。

．．．．

「あつ．．．」

「地上で会うのはお久しぶりですねフィルヴィスさん。」

「あ、ああ。クラネルはどこかに出かけていたのか？」

「これですか？」

フィルヴィスに指摘され、両手に提げた袋を両手で持ち上げる

「ミアお母さんから買い出しを頼まれたんですよ。表に出れない分、雑用は基本僕の仕事ですから。」

「そうか、お前も大変そうだな。」

「フィルヴィスさんこそ、その果実酒、ディオニソス様用ですよね？」

「ああ。いつもの発作だ。先程までオラリオ内を探し回ってようやく見つけれただ。だ。」

フィルヴィスが提げている袋からは果実酒の入った瓶の先端が目に入ってくる

「ところでクラネル。このあと少しだけ時間をくれないか？」

「え、ええ。あまり長くは取れないですけど僕でよければ。」

「ならば早速女主人に向かうとしよう。」

「えっ！悪いですよフィルヴィスさん！僕がファミリアのホームまで送りますから！」

「なに、私から頼んだせめてものお礼だ。これくらいはさせてくれ。」

「なにかお礼なんてされるようなことしたかな・・・」

ベル side

オラリオの空に星空が見え始めた夕暮れ時の頃、買い出しから戻ろうとした道中でフィルヴィスさんとぼったり出会った

「なに、ちよつとお前に聞いてみたいことがあるんだ。少しだけ付き合ってくれないか。」

断る理由もなかった。フィルヴィスさんには食料庫で巻き込むことになってしまった事のお礼もまだ出来ていなかったから。たいした手土産もないけど

せめてお礼だけでも伝えようときめた

「まずは先日の食料庫での1件。改めて感謝を伝えたい。」

「・・・ほえ？」

あまりにも素っ頓狂な声が自分の声から出てきてしまう。まさか自分が謝罪しようとしていた事で感謝されるとはまさか思っていなかった

「何を気の抜けた返事をしている。エルフでも感謝のひとつやふたつ言える。」

「あいや、そうじゃなくて。あの件、フィルヴィスさん達は僕たちに巻き込まれる形で参戦させてしまったので小言の一つや二つ覚悟はしていましたが感謝されるとは思っていませんでしたから。」

レフィーヤさんの魔法で一掃していなければ確実に悲惨な結果に終わっていたことは間違いない

「それに、レフィーヤとも出会えることが出来た。」

「レフィーヤさんってあの時一緒にいたエルフの？」

「ああ、私にはもつたないくらいの素晴らしい同胞だよ。それに。」

「それに？」

「あの日、お前に言われた言葉をもう一度言われるとは思わなかったよ。まさかあのよ
うな恥ずかしい台詞を惜しげも無く口にする奴がいるとは思いませんでした。」

「アハハハ・・・」

あれってそんなに恥ずかしい言葉だったかな・・・

「そう気負うことは無い。私としてはその言葉に2度救われている。」

「はい・・・」

「それで、お前に聞きたいことなのだが。」

さつきまでとは一風変わって、神妙な顔つきになるフィルヴィスさんが来るのかと身構えてしまう

「もし、もしもの話だ。イヴイルス闇派閥が壊滅した後、お前は どうするつもりだ？」

「・・・僕の役目はあくまで闇派閥を壊滅し、オラリオの平和を約束するまでという約束。本来なら目的が果たされた以上、僕がここにいられる理由なんてありません。」

「そうか・・・そうだよな。いやすまない、変なことを聞いてしまった。」

「ですが、もし許されるのであれば僕はその先を見てみたい。オラリオに集った冒険者たちがどんな冒険譚を紡いでいくのか。どんな結末を描いてくれるのか。」

「そうか・・・そうだな。」

「フィルヴィスさんも勿論その1人ですからね！」

「い、いや私は。そんな大したことは・・・」

「別に普通でいいんです。闇派閥の居なくなつた世界を、一日を感じながら過ごしてくれれば。僕はそれを見れるだけで満足なんです。」

「ふっ、お前らしいな。ならそうだな、もし許されるのならば、しばらく私に付き合つて貰うかな。」

「ええ!?!」

「なに、そう身構えるな。ダンジョンに潜るわけじゃない。少しお前とゆっくり過ごしてみたいと思つてるだけだ。」

「えっ、あついや。フィルヴィスさんからそう言われると思つてなくて・・・僕なんかで

良ければいくらでもお供させていただきますよ。」

「クラネルだからこそ私は誘ってるんだ。約束したからな？死ぬなよ。」

「ファイルヴィスさんこそ。約束のキャンセルは締め切りましたからね？」

「ああ、もちろんだ。」

気がつけば、空はすっかり星空に覆われていた

いつ死ぬかも分からないようなこの場所で、訪れるかどうかも分からない約束を交わしてみる

シルさんかとの約束もあるんだ、せめて壊滅までは見届けよう。それからのことは流れに任せるだけさ

E P . 2 4 騒動

「ベルさんベルさん！この服なんていかがでしょう！」

オラリオに建てられたとある呉服店

ドツペルゲンガー騒動を機に、神々の言うところの『いめちえん』とやらをしようと考え、グランカジノ潜入の時にもお世話になった呉服店にシルさんと着たのは良
いんだけど・・・”

「あつ、こつちの服も良さそう！」

来店してからかれこれ1時間程

お店の中の洋服を片っ端から見手取っては戻したりを繰り返し、気になった服が
僕の腕の上に積み上げられていく

「あつ、ベルさんも気に入った服があれば取って良いですからね！」

「(手に取る余裕無いとは言えない・・・) アリガトウゴザイマス。」

ここに来る前に髪を染め、髪も少し切って髪型まで整え、後は新しい服を着買つて帰路につか予定だったのが約一時間前

今ではもう着せ替え人形所ではなくさながらラックと化している

「あ、あのーシルさん？さすがにこれ以上は・・・」

さすがにこれ以上は収集がつかないと判断し、シルさん呼び止める

「せっかく呉服店に来たんですから思いつきりオシャレしないと勿体ないですよ？ベルさんでは基本同じような服ばかりだと流石にバレちゃいますよ？」

「うっ・・・！」

シルさんに痛いところをつかれてしまう

僕の普段着は酒場で着用している服からエプロンを抜き取った簡単なもの

当然洗濯は欠かしたことは無いものの、迷宮に潜る時以外はこの格好でいることが多かった

「ベルさんはもつとこう…なんて言うんでしょうか。もつとお洒落に着飾って良いと思うんです！」

「ソウナンデスネー。」

目を輝かせながら両腕をグツと構えるシルさんに僕は笑って返すしかなかった

「あーっ、その声は信じてませんね！私に任せてください！絶対にかっこいいと言われるようなコーデイネートに見せるんで！」

決してシルさんを疑ってるわけじゃないんです

確かにシルさんの料理のセンスについては壊滅的ですが、服のセンスに関してはともだと思っ……多分

「それにですね、ミアお母さんが言うにはベルさんもお店の接客の方に回ってもらってもいけないとなそうなので、普段からの身だしなみは大切にしないとですよ？」

「それはまあ、そうですが……」

お店の表に立つと言うことは、お店の一員として今まで以上に認識されるということ、外での印象等はより直接的に響いてきてしまう

何より驚いたのは女性ウェイトレスが売りでもあったお店に男性の僕が入って良いのかという不安が残ってる

とある女神からの要望で数週間程だとは聞いてるけど……

「ベルさんならきつとすぐに冒険者さん達から人気になれますよ。私が保証します！ それに知ってました？ 隠し事は隠し通そうと蓋をするよりも何も隠してませんとおおっ

ぴらにした方がバレないものなんですよ？」

なぜだろう、シルさんが自身ありげに話すところまでそうなりそうな気がしてくるのは

「そろそろ夕方になっちゃいますのでこの服の中から選んじやいましょう。」

そう言いながらシルさんはお店の中に設けられた試着室へと向かう

「そうだっ！せっかくだしリユーにも見てもらおうよ！ベルさんの自信にも繋がるはず！」

「えっ、ええええええええええ
!!!???」

拝啓お義母さん、僕の受難はまだまだ続きそうです

．．．

「どうしたんだいへフアイトス、そんな不景気そうな顔しちやつてさ！そんなんじや売れる物も売れないぜ！」

バベルにはいくつかの商業施設が店を構えており、そのうちの四階から八階を「へフアイトス・ファミリア」がテナントとしている

その武器屋でバイトをしているヘステイアが出勤すると、店内がいつもよりざわついており、とある一室の前で神友のへフアイトスが気難しい顔で悩んでいる様子だった

「おはよう、ヘステイア。どうもこうも泥棒に入られたのよ。」

「へフアイトスのところに泥棒だつてえ!?!大丈夫なのかい？子供達に怪我は？」

「幸か不幸か、被害に遭つたのはこの倉庫に置かれていた剣だけよ。とはいえここに置かれてるのは店頭に並べられないものや一時的な保管場所として使つてたもの。悪いように使われてなきや良いけど。」

「犯人の目星とかはついてるのかい？」

「後でガネーシヤの所に調査を頼むつもり。分かったらアンタもさっさと持ち場に着きなさい。」

「分かった分かった、ちゃんと向かうよ。」

「（流石にこの倉庫に魔剣は混ざってないはず。なのになんなの、この胸騒ぎは……）とりあえず、ガネーシヤの所に行った後に改めて整理しましょう。」

……

「すみませんクラネルさん、シルに誘われてお邪魔……失礼させていただきます。」

シルに連れられたリユーさんは店内に入った刹那、踵を返すようにそそくさと店を出て行くこうとする

「待つてリユー！せめて批評だけでも聞かせて！お願い？」

シルさんがリユーさんの行く道を阻む

リユーさんがほんの少し力を込めれば退かせてしまえるような柔い壁でもそれをしてないのはリユーさんなりのシルへの優しさだと思う

「い、いえですがシル、私には荷が重いと云いますかそういうことには疎くですね。私以外に適任がいるかと！」

「えー、私はリユーに見てもらいたいなあと思って思ったのにい。」

「み、見てもらうのはクラネルさんだ。彼が良いと言わなければ」

「僕もリユーさんに見てもらいたいのです！」
ち

これは確かな本心からの言葉だった、なんだかんだ長い付き合いであるリユーさんからの言葉なら不安も拭えると考えた上での発言だった

「ク、クラネルさん!？」

「ということだからお願い!」

「と、とりあえず心の準備だけさせてください!」

背後から見た僕でも分かるほどに紅く染めたりユーさんが深呼吸をひとつ

「そ、それでは行かせていただきます。」

くるりところらを向いたリユーさんはこちらを向いた形でまた静止してしまった

「おーい、リユーさん?リユーさーん。」

目の前でブンブン振っても反応が返ってこない

「はっ、すみませんクラネルさん……それで批評でしたよね。凄く似合っておられるので良いと思います。」

「ですって！良かったですねベルさん！」

「はい！これでしつかり自信持つて出来そうです！」

「しばらくその格好なんですか？」

「はい。最近少し目立ち過ぎてしまったようで、なればということとで神様達のいうイメージというのをやってみるのもありかなと。」

「それは殊勝な心がけですクラネルさん。ギルドの方で箝口令が敷かれているようですが、下手に波風を立てるのは得策ではない。」

「すみません、色々とお騒がせしてしまつて。」

「いえ、今のところはなんとかギルド内だけで収まっています。クラネルさんを知る者が限られていることが幸いしたのでしょう。」

「それで、この後はリユーさん時間ありますか？」

「いえ、今日は非番ですので特に用事は。」

「でしたら、少しお茶でもしませんか？最近いきちんと落ち着いて話せる機会が無かったので久しぶりにリユーさんのお話、聞きたくなってしまつて。」

「私の話でよろしいのですか？」

「リユーさん達だから良いんです。凄く面白いですし！」

「クラネルさんがそこまでおっしゃるのなら・・・」

「決まりですね！シルさんもどうですか？」

「そうですね、でしたら私もお言葉に甘えちやおつ。」

僕は2人を引き連れて、いつもの部屋へと入って行った